

THE PAPER ARCHIVE

X-MEN 1 ブラックローゼス

桑原 忍

日本語テキスト版・文字起こし草稿

thepaperarchive.org

この版について

本書は The Paper Archive に掲載している日本語の文字起こしをまとめた非公式の閲覧用テキスト版です。小説本文、あとがき、巻末資料を収録しています。

文字起こしは校正途中です。「文字起こし草稿」と記したページには、OCRによる誤認識、脱字、読み順の誤りなどが残っている可能性があります。原本と照合済みの完全な復刻版ではありません。

原本のページ番号を参照用に残し、横書きに組み直しています。挿絵のみのページは収録していません。

原本164ページおよび214〜216ページの一部は、サイトと同じく要約として明示しています。要約は原文ではありません。

原作、登場人物などの権利はそれぞれの権利者に帰属します。独立したファンによる保存プロジェクトです。

2026年9月14日作成。

目次

序章	4
第一章 九月一日	14
第2章	24
第3章	41
第四章 ブラックローゼス	48
第5章	56
第6章	69
第七章 ドラッグボイス	76
第8章	89
第9章	99
第十章 クルス失墜	116
第十一章 斜陽	130
第十二章 儀式	137
あとがき	144
奥付・巻末資料	147

序章

原本 23 ページ

「すっげーなあ、俺、モノホン見たの初めてだ」

新大久保手前の国道沿いのガード下に、五～六人の少年たちが寄り集まっていた。

深夜二時を過ぎていた。少年たち以外に、通るものは誰もいない。彼らは皆、手にペンタイプの懐中電灯を持って何かを照らし、食い入るように見入っていた。

ひとりの少年が、ペンライトの先でソレをつついてみる。ソレは弾力を持ってペンライトを押し返した。

パツキンのモヒカンにノーズピアスをしている少年の姿は、まるでただのパンクス。まだ十代に違いない。

「ケツの方までびっしりだぜ。たまんねえな、スゲエよな」

原本 24 ページ

しきりに感心している様子だ。だが、ゆっくりしてはいられない。もうじきに空は白み始めるだろう。

少年たちの足元に倒れているのは、人間だった。少年たちはソレを足でこづいたり、棒でつついたりしながら楽しそうに笑っている。

「おい、そろそろバックしないと、やばいぜ」

「おう、んじゃあ最後に火でもつけちゃおうか」

少年たちのひとりが足で、それを軽く蹴った。男は死んでいた。まだ肉の温もりを残したままのその死体の男が、ごろりと仰向けに転がった。

見開かれた濁った目が、空を振り仰いでいた。半開きの口から、だらしなく紫の舌が伸びていた。

少年たちが楽しげに見入っていたのは、パンチパーマの暴力団員風の男の死体だった。

おそらく、少年たちのだれかが切り裂いたのだろう。男の衣服はナイフでずたずたに引き裂かれ、半裸状態である。

少年たちが興味を抱いたのは、入れ墨だ。死体の背中から腹、下は尻にかけて、見事なノボリ竜と天女が彫られている。

男の恰幅や年齢好からして、組織の中ではかなり上の人間に違いない。

「焼くとかっせえからよー、ほっとこーぜ。朝には清掃車が来るさ、今日は燃えるゴミの日だ

原本 25 ページ・文字起こし草稿

[クッククック、ぼまあねえなたな。上暴力団のああにいさんもやはり、死体の男は舞力団員らしい。

「お前、パワーのスベル、間違ってんを。Aじゃねえよ、0だ」

「つとと、いけねえいけねえ。NEWESTPOWER見参…と]少年たちに悪びれた様子はまったくない。

「死んじまったもんは仕方ないよな。大体、このオッサンが先にケンカ売ってきたんだし。洲力団員なんて殺っちゃおうが何しようが、どうせ俺たち正当防衛さ」

[またまた1つ。どうせ、ケーサツなんかに行く気ないくせにノー

「ど1つせ、こいつら街のゴミき。ヤクザ映画の中じゃ、みんなるそう言ってるじゃん」

どうやらこの男は、少年たちとの調いが原因で死んだらしい。

少年たちは口々に勝手な事を言いあって死体を前に慮る様子がない。せいぜい高校生くらいの少年ばかりだが、死に対して鈍格なのだろう。彼らは、新宿をラナリトリートしているグループ【ニューエストペパワー】のメンバーである。

「つたりまえじゃん。よし、行こうぜ。ボスに報告だ」

原本 26 ページ・文字起こし草稿

少年たちは、ざんげ-死体にいたずらし、あと)し、しーんじんし稼をつけとつか本ちようろう動。ええ広倍を見つめる男がひと0ii刀第伝叫の中(と消えていっなう動かななくなった人は5えと体を汚れた歩道に横たえていたかお人の...)しよし、間一、1日、こ・ワ3了にたもむろする少年たちを多く見-)ういんめで部矢代町周辺1かけるようになった。少年たちはグループで行動しているようで、ほとんどが中学生、高校生、大学生のティーンエイジャーたちである。

彼らは仲間を求めて歌舞伎町つとやってきた。例えば、ちょっと見かっこいいタレント敗のワンレン少年たちが、ボディコンの女子中学生とパーティーを組む。大好きなミュージシャンいきとうごろろろの話題で盛り上がる黒服少女集団とスケボーを抱えた少年たちが意気投合するク征たちのグループ結成見は、歌規伝町をベースにあつという間に広がっていまウワサはウワサを呼び、をの現象は流行の-結てでもあるかのように各地の少年少女たちのに4人わった。地方都市の少年たちにとっては新宿でグループに入るとするのが本のステノー...なのだ。

人や少年たちらは間休日新答へ通って玉ようになっていたなだけ学校々も行っず替(も行か

原本 27 ページ・文字起こし草稿

こと包家流しゆく。いた5人人のたなnA少年たちの行動は大胆になった。1を練り沙き、イタズラも度を増していく以前ほどの勢いを失いしとで用ムんまったく動じない。特にひとりで歩く暴力団員を、多勢に無勢で聞計ちする。そんなケームがか流行っていた。oi人し怒り寿った虹力団関係者は、イタズラな少年たちの行方を放ってやっきになったと租舞伎町に出入りする若者の数は増える一方で、誰が犯人なのかカカを特定することも少年グループの実態をつかひこともできなかった。

組織に出入りする若者の数も、いつのまにか減っていった。組織の末端に位置する落者たちの消滅は、和収入元の減退に直接結びつく。幹部連中は焦っていた。

ちょよくりゃがって!主なグループは、いくつあるんだ?リーダーは誰だ?前ら、役旋的に調べあげるんだ。ガキだしと思って甘く見てるしと、痛い目に洒うぞルー無力団電部らは、組をあげて調査に乗り出していた。それでも少年たちの実態には、ぼかなカが逝っけず地団跡を踏んでいた。

提議少年なちのやり口は世妙だったし、それをそれぞれのリーダーによって実に統制が取れてい1規模の大きuv少年たちのグループはなは、全部で五つ。

原本 28 ページ・文字起こし草稿

|つ和え人シル|びとつつは、チーマーあがりの-|十歳以上が多いデニポーエズトババアアーそしてで最走族と密接な関係を持つ[ミシシッピーと名乗るグループ。

少女売春組織としても名高い自和美少女集団【馬交場負砂】

のうろは総員IQ一六〇以上の中学生中心の頭脳派集団【】クラブ・ピエトロマああつとうてきともんじたまさざたかひきさらに、若者の圧倒的支持を受けるボス、クルスこと十文字正喧が率いるブラックローゼス』しと呼ばれる集団である。

しんじゅくびみようきんこうyっう」o彼らは新宿を舞台に、微妙な均衡を保ていえWMううつ諸大静桂ほぶな夏たごえたむおねつたいゆいや...、">」o東京では、連日三十五度を越す落し噴い替菩原るちなともなくアスファルト導3いメレ(、殊こかこ航を横切る風が今夜6熱い。夜が明ければ、太陽は府に闇アーつらめぬいし路に有囲まれた街を射し貫くたろうお和おこの年、関東地方中心城は例年になく異常気象に尊われでTi地えていると言われて4アート\な}、-存内邊史のベッドタウン化がすすみ、地方への波出入口aいi5ころでは、修

原本 29 ページ・文字起こし草稿

ネネEL...ろみ21.、.、.1ん人-ji、かんらくがイト月が間近い七月下旬の疾い日。新宿駅周辺の歓楽街一帯には、今日6多くの人間たちが洪れかかえいたけんそう新宿駅を出発点しとしたこの喧噪は、四方八方に広がりを見せていた。も.やすぐに記正面の新宿通りの両側から、国通りに至る地域。南口を背に新道を南下し、代々木(しる長い歩行者天国の道筋には、出来たばかりの大きなデパートや有名ブランド店の新店舗が立ち並び、その周辺は人間と路上駐車の手でとごったがえしてvgせいぶかきちよう症国通りを渡って西武新宿駅の向こう側に広がる歌舞伝町は昔かりら変わらず新宿の裏の穀として夜の歓楽街を形成している。

陽の高いうちはまだ人通りも少ない。しだいに夜が近づくにつれ、様々な目的を持った老若男女がどこからともなくわらわらと集まって来る。

-そうおんざつとうかつ村、車道とあふれる車の騒音。雑踏を開歩する人々のぎわめき。それらをベースに、新宿の街全な人ep体に沿った音が溢れていた。泥決する人間の数を上回る雑音は、油を巻いて新宿上空に配る、待中にこだましていた。

。っは、32のあのあし池ひタタシーの窓かちら新宿通りの雑踏にたもろする若者たちの群れ。和過いいた。上吸いつけの煙草の灰が、その指から落ちる寸前だった。

原本 30 ページ・文字起こし草稿

お客さん、西新宿下。ルーこまで行ジぶったり人をれとも本ていいわけつ4旧世の灰を作放りタタシー運転手が、ダミ声行き先を確認する"男は今にも落ちをレルミー;-ゝし(ジアコグ人とちまう上フく(灰皿に落とすと運転手とは対照的なよく通るテノールで答えた。

一都庁の前までで、お願いします」

ダミ声のタクシー運転手はその答えに、別段あいづちを打つわけでもなく、芝てつけっぱなしのラジオのボリュームを大きくした。

いせいカーラジオからは、聞き覚えのあるDJの威勢のいい声か聞こえてくる。最近人気のある中高生をターゲットにした電話カウンセリング番組である。ハアイイ、こちらはティーンズホットライン!洛とちの知りたいこし衣したとないつくも何でも受付中ッ!ざさざあ、まずは君の名前と学年を教えてくれたまえ、たいつとなうに人パ和旨内のスタジオと電話回線が繋がるプチッという音が聞こえると、上をうの和人のの声がきこえたた。

(つせーな、んなこたあどーでもいいじゃんよーっ~)』つなアハハー、吉気な匿名希望洛だね。さ、何か、届みでもあるのかい?どンドン、ノンんはあん02んかじゃな1ん6だけのv人上月この八崎」ニナーかに大地許がくるって、

原本 31 ページ・文字起こし草稿

ホントか2製休みるにつナ杉てる/7。、ねlr*ま1導いげん0をにんこれは用休み前あたりから、小学生、中学生の間でさきさやかれている激言滋問だ。何の紗息もなければ、議が言い始めたのかもわからない。

だが、偽じている者が多く、本気で届がる小中学生たちにパニックが生じていんと、次性池刊誌のネタにもなっていたと。かんとかりやあ日本は地和用列島だからね、いつ大地謀が来たっておかしくくないワケじゃない。関東、。だいしんさいでい0い]大臓災からずいぶんたってるし、東京大地肛だって結局来なかった。ノストラダムスの

大予言かくごもあるし、まあ、覚悟だけはしておくしかないってコトよ。ってなワケで、次は許かな?アイ、こちらテラティーンズホットライン^このノリの良きと軽Sが、D]のウリなのだ。次の電話は、ずいぶんハスキーな女の子の登【あたし、ミサザサトー。高二vー、彼氏いない歴十六年!の美少女さ』

ハレー、今どき綱重じゃん最近の女の子たちの性体験はに早まる一方である。

ちなみに高校一誠容は、和信二人このm村一年生の男性経験率は、全国的に六十%にも達しているという調相結果は周知...うちのクラスにさきさー、が、人ににさー変な子がいるんよーあたしは止めたんだけどりり、今どきなんなんだアメだもト-区基和和人人人5人所で人人人|上人人

原本 32 ページ・文字起こし草稿

けどさきさー、スク0なて>じめっ7ト連れて仕返|りすjってー"相休み中にあなしらんとこに、儲骨をみようま人しに氷んとか営んのイーな奴だよねー]区に同意びしたメス話し方は、最近の女の子に多い。

をn、いい人o放のいくに義少女もん.いじめはいけないよん。お兄さん、いじめっ子はキライなんだ。いじめっ子なんていじめられた方から見れば、灯人者や極悪人と同じだもんね結構無責任な事を言っているが、たしかにいじめたからにはどんな仕返しされても誰も同情してくれない。

いじめられっ子がやられっぱなしでいた時代は、とうの昔に終わっているのだ。現代のいじともなふきいがくめは加害者・被害者・学校関係者すべてに、そをそれなりのリスタクガカ伴う裁判での負全額も大きい。成長してからも当時の負債に苦しむ、いじめっ子はあとしを絶たない。

「をんでさー、そいつにはアメリカにミュータントの友だちってのがいあみんだって1。政休み中に、そいつを日本に連れて来るって言うててさー1。ミュータントだなんて、な1ーんカコワイnlや人』いた

どをそれでもいじめはなくなたならない。るその内実は年々悪質化の一途を辿る。

たしかに最近のアメリじゃあ、ミュータントや、ミュータント関連の犯時事件が二えて.を人人でて』も日本にミュータントがいるわけじゃなし、心配することないんじゃないの.印別frがいじゅっやっ子な7ワケじゃかんでしょよtよ。だいじな、[/よ。そんだったら大丈夫、大丈夫。じゃ次のっ湯i|||//アン12人人人遇宮衝

原本 33 ページ・文字起こし草稿

kBがれいに。ちニン中[だよ。えっとえっしと、あのさ、ミュータントの基地が新宿にあるってホントッ2Py1。

いまたまータントの話題かい?最近多いね。なんだねキミたち、ハヤッてるのかそれじゃお、うじよう。この番組ではミュータント情報コーナーを次回から新しく設けちらちゃうう。みんな、びしっばしミュータントに関するいろんな情報、なんでもかんでも教えてチョーダイ。よろしくねっ多の外は乱員だが、男の乗ったタクシーの車内はクーラーが効き過ぎて寮いくらいだった。

-相変わらずのろのみろ運転を続けているタクシーは、何分もかかって新宿の大ガードを左拓し..ようやくぼく新宿駅西口前にさしかかろうとしていた。

こん夏休みを迎えた企業も増えているせいかもしれないが、人の多さがスクランブル交差点の混-刻を所き、都内のいたところで渋滞を巻き起こしていた。

pちようほんにプペは和一きっときっきの子自身がいじめの張本人なんだろうなあ|ss閑符の雑路に溢れる人の波を見飽きて、聞くとはなしにラジオを聞いていた男が、ポツリと祝提用人っ生理池向沼和人/...が2人アク|人人

原本 34 ページ・文字起こし草稿

言った。さきほばほじどよま."たばこ。

い漂っている。て過っでいな灯間の煙はクーラーが効き過ぎの車内に残留し、宙をき迷男の名は建部伸明。三十二歳独身。隊業は、し1)三十二歳独身。職業は、公務中である。

区部の人の必導は夏たししに冬でも着てしまえそうなグレイのスーツにブルーのシツジ黒し緑の細いななめ綿のネクタイと、銀緑有限鏡の奥の細長の目。そしてほお骨の氏た章せた問は、抜け目ない和印象を与える。外見だけなら、年若い熱血教師のようにも見える。

「おや、おおたく、学校の先生ですか?いやまったく、最近の子たちってのは悪びれないっちゅうか、理解できませんわ」

建部を教師し捧違いしたタクシー運転手は、今までの態度とは打って変わって、いきなりおしゃべりになった。

「別に教師やってるわけじゃなくて、ただの公務員でですよ」

建部は素直に答えたのだが、タクシー運転手にはまったく聞こえなかったらしく、彼はとおれんることなくしゃべり続けている。

「をのにしてもミュータントだなんだって、いったいなんなんですかかかねえ、アメリカじゃあをんなやつらもいるらしいですけど、どうにもねねえ。あたしゃ、おおお目にかかりたいとも思いまノッー宮転衝は右手でハンドルを取ったまま、左手で薄くなった頭をほりほりかいな

原本 35 ページ・文字起こし草稿

アメリカで急地しているんるん、ぶミュータナーーあり池VV.いいー・ /・ 治の中には、『XIMEN』と呈ばれるミュータントの集団がいて、どんな理由がっで0にどは知らないがミュータント同士で争ったりしているらしLuしかし、るそれは朱い海の向こうの一部人種間での出来事に過ぎない。だから、ミュータントくわしようかいい、\に關しての本当に詳しい情報は、あまり日本では紹介されてもvなulそれほど関心を持って語られることしもなかった。これは、対外国交渉における現在の日本政府の基本姿勢しも|致している:.....というの一般的な認識である。

<ミし共共基はいでくごが、衝部はそんな一般の人間たちとは少しだけ違う立場にいた。まだ配属されて間もない新しい仕事場で、被数のミュータント情報を聞き及んでいたのだ。

シンルいい>)sちようこうそう.:x巡部を乗せとタクシーは閑答台西口ロータリーをな右所しばて,超高層ビル街へとし向かっていしっしOo四でつ>」vxつ>」天so・へと)た。西口を過ぎざざればたいした渋滞もない先程までの人波と喧品が、ウソのように消えてし,まっている。弟人こつよ>]人軸東口周辺からはたった数十メートルの礎離しか離れていないというのに、あの熱-を掃びた汎ん空気の余韻は、ここでは感じられないg。

/。激い色の夏の青空が、ビル街を用っている。上空に有敗い。

。先各の群深となんら変わらない人間たちをつつ人ん7きれの同時ノルの森の中に、アた厄周気が和を包んでいた。にんでていんはずだやたけけなのになどこかしらけ

原本 36 ページ・文字起こし草稿

「あ:...しまった、領収書もらい忘れた」]都有的前でタクシーを降りた建部は、冷え過ぎたタクシーを求めて振り返った。だが、タクシーはヒットンホテルの前を左折し、彼の視界から消えていった。だミュータントか:::すでにミュータントは日本に出現しているかもしれないってのに。誰もが目の前の事しか、考えようとししないんだ」

建部はふうっとため息を吐くし、緩んだネクタイに手をかけてしめ直した。タタ暮れが近づいていた。だが、昼間の暑さ是一向にひく気配がない。建部は足早に、都計のビルの中へしと吸い込まれて行った。

第一章 九月一日

原本 37 ページ

第一章 九月一日

都立天ノ川高校は、偏差値六十の男女共学校である。

荒川区にある学び舎へ至るルートは、通常三方向から。ひとつは山手線N駅からバスで十五分で学校前へ。もうひとつは私鉄線M駅下車、そこから徒歩で十分。さらに都電K駅ならば徒歩十七分で到着する。

たいていの生徒は、JRで私鉄に乗り換えて私鉄M駅からの道を利用している。バスは通勤ラッシュ渋滞に巻き込まれた場合、悲惨な結果を起こしてしまうのと、都電K駅からの徒歩では疲れすぎるからだった。

長い夏休みが明けた。

約一月半ぶりに私鉄M駅から天ノ川高校に向かう道に、人が溢れていた。

原本 38 ページ・文字起こし草稿

oOoタくは進学fA|日の朝である。、学交であるメ今日よ、新学期が妙まる九月名の、3ほど大きくない男女共学校名||クラスXでノ高校は全枚生徒一〇三国際学科には、現在還都立天ノ川高材は>された国際学科の上走だが、一昨年カから新ヨ卒ヒ+%の療通科の生徒力力専門コース|学年が在籍している。基品とした国際コースで、毎外和留学を目的てしを1人国際学科は英語+外国語教育を基盤とし}、カンザス州のセント・フrlnして新設された。これは五年前に徹妹枚となったアメリカとして新設きれたこれは1ある。

こうかんここナハイスクールとの交換留学生制度のためでもけ入れたことに、学校側は非常に気2玉国のプリンセスを留学生として受け入れたことに粗年前坪アプリナオ]けんとうちゅういNフワサイベ

ン新留学生制度が実現さをよくしたと。現在、校明にはすで容用中の球県わらのン。

れれば、学校全体の設備もさらに規模拡大される見通しであるつとうていミヽ、Oo|昨コースの生徒は女子が圧舞時に多い。八対二の割合で女子生徒が占めている。まるで女子校のようでもあるが、由了学科の生邊し普通科の生徒の交流は薄かったと。

半の婦了はほとんどかやっかみ半分、国際学科の生徒を嫌っていえし国際学科の女子4ラライドカ院く自ら交流をもとうとはしなかった。るそれでも、普通科の男子にとっては、国了学科の女子はちょっと身近なハヘイレベレて凍に21、腔はブイレベヘルの女の子で憧れの的だった。当然信差値も少しえい光い。

夏休みの終わった天ノ川高校の通学族にばは、同じように日に焼けて同じ制服をましいが

原本 39 ページ・文字起こし草稿

5も、るその胸に様々な夏の思いを抱く集団が学校を目指して歩いていえ.その中に、角田トオルの姿があった。

「よおっ、元気だたった力えここ駅から歩き始めてすぐ、トオルの肩を誰かが叩いた。振り返ると、そこにはよく知った笑靨があった。

天ノ川高校に通うトオルは、今年の春高校に入学したばかりの一年生である。今、トオルに声をかけたのは、同じクラスの南神映二だ。

映二しトオルは学校へ向かって並んで歩き始めた。ふたりとも白の半袖シャツに、グレイの学生ズボンを着ている。、ネクタイもベストもないシンプルなものだが、これが天ノ川の男子の制服である。

ふたりともやせ形だが、映二の方がトオルの身長より十センチほど大きい。映二の身長、たた今一七三センチ。まだまだ伸び盛りで成長期の映二は、細い黒縁の有眼鏡をかけている。その顔が、人健康そうに赤く焼けていた。まだ日に焼けたばかりといったカンジで、痛そうでさえあ

「おはよう、よく日焼けしてるじゃん。結局昨日、どっか行ってたのか？電話したんだけど、いなかったからトオルは夏休みの間に、一度しか映二とは会っていなかった。そのあとは電話ばかりだ。昨人

原本 40 ページ・文字起こし草稿

いい9いqweの人も、トオルは映-の計に季放を力(でてくるよしs<北海遡三泊四日旅行に出かけと。

月の肖からふたりは、学期林試陽の前から計両しでい北測導三抽四旧財人で導い5のは人令色気ツなカットがガをれで、六しい計和に人ペルだ12つその後はふたりとしも、そをそれぞれバイトに椅を出して八月-店ヨンなけさは凡ぶ六にていた。容然映二から電話が入ったのは、二十日の夜だった。せっかく入ったバイトの給料を全額沙としたと泣いていた。

三週間もバイトして終いだ金を落とすなんて、本当に不幸だ。だからトオルは区休み最後の一日に、ハハーンと他飯をあごってやることにした。るそう思ってせっかく電話してみたのだが、映二は朝早くからどこかへ出掛けた後だったのだ。

「人って、この用不幸のズンドコだったじゃないのよ。ちよよよっとくらいイ4目をみないとカワメyo>インー！たろたがそんで、時日はショーナンヘナンベヘしに行ったのよ。そしたら::」

しから放をしていあるトオルと史二の後あから必還人に向かって女の巴がメタけ=てきた。

「オハンヨロウ、映くん、トオルくん|だいつ和牛り返ると下の日差しの中に一人の少女が立っていた。

半初のシャツに黒いリボン、グレイ人イの地に細い青線のチェック模様の入ったベストるそしての知めのブリーツスカートハイソックスは白。をこれは、天ノ用高校の女子の制服だ。ク7ARも、jk(takilaよ54まま噴すAA31りた

原本 41 ページ・文字起こし草稿

「ああっ、キッ、キョーコちゃん!オハヨ一映一ーがおどけたようにどもりながら答えると鏡子はとなりのトオルをちろっと見て、ペコリと軽く会釈した。

クラスメートとはいっても、トオルと鏡子は特別仲良しなわけではない。挨拶を交わすくらいで、じっくり話をしたこともない。

なので気軽に声をかけられて、トオルは少し面食らってしまった。だが、それは映二だとして変わらない。一学期が終わるまでは、トオルと同じ状況だったハズである。

鏡子は、逆を少し上気させながら笑っている。上り始めた太陽が暑いせいかもしれない。るそるの顔がまぶしいほどカワイかったので、トオルは返事も返せずししばしボーッと眺めるだけだ[キョーコちゃん、昨日は楽しかったよね映二]か鏡子に言うと、鏡子は少し恥ずかしをうにくんとうなずいて、足早に学校へと向かって歩いてしまった。道すがら、闇見知りの子に挨拶しているのがトオルと映二にも見トオルはうすっぺらな学生カバンを腕にはさみ、仁王立ちになった。腕組みしながらよふに落ちない顔で、にやけさきった映二を瞬んでいる。

原本 42 ページ・文字起こし草稿

「昨日がどうしたってっう・」

トオルの問いかけに、映二の顔が~らりと一層ゆるむ。

一のっふっふっ。昨日、シヨーナンでバツタリよ。も1、運命かんじちゃったよ俺]

「マジ?井上鏡子とおまえが2運命って、何。まさか、告白したのう」

トオルが驚いたのにはワケがある。なぜなら、鏡子は普通科の女子では一番かわいくて、るそるのうえ成績もvv。普通科のアイドルであり、マドンナ的存在なのだ。

常に国際学科の女子にライバル心を燃やす普通科女子にとって、鏡子は学年一頼もしい存在しかも、性格も素直で努力家で行動派。鏡子に憧れる男子も大勢いる。上級生からも先生からも信頼が厚く、誰からも好かれている。

その鏡子と映二が、昨日の海で一緒に楽しかったね・だなんて。こればかりは、トオルじゃなくても絶対聞き捨てならない。ほうってあおけない事態だ。

ところが、にやけさきつた映二の顔が急変したc。やにさがった目尻がいつそう下がり、眉間に縦じわがよった。

つても彼女。海辺で家族の人たちと一緒にだったんだわ]

原本 44 ページ・文字起こし草稿

-この夏は、いいきっかけができたよ。これから仲良しになって、いつか:.....マイラヴァーおれに愛の告白を:.....つし、おーい。トオルううう、俺をおいて行かないでくれー」

記3えいじこぶしを握り締めて、朝日に誓いをたてる映二を置き去りにして、トオルは学校へ向かってすたすたと歩き始めていた。

また夏の暑さの残る朝の通学路。いよいよ新学期が始まる。

長い長い校長の訓話がやっと済み、全校朝礼が終わった。生徒たちはいっせいに、各自のクモドラスへと戻り始める。

二学期初めのホームルームが終われば、あとは大掃除をするだけ。久しぶりに会ったクラブスメートたちは、みんな日に焼けてまっ黒だ。はず3しホームルームが始まるまでの数分間は、久しぶりの再開に話を理まきえ生徒にが4記カaいっぱい満ちていた。トオルと映二も、仲のよい姫川真人や瑞江研司らと一夏の銀財上に室いばいいtk満花を咲かしていえた。ん真人も研司も、映二に負けないくらい焼けて黒い。和う付該良さツイにtiサバイバルゲームしと枕闘技に入れこんでいる。この夏は毎日吉くまで出掛けて和を欠せていたという。

だともみこ3-ど1と知義らちゃんは連れでなかったんだろ?あんまりほっとくしと、どっかの許かにとにううts)ぜし、

原本 45 ページ・文字起こし草稿

「アイツなら、夏休み中ずっとうちにさきとったトオルたちと同じくクラスメートの楠知美は、真人の彼女である。

最近では、社会人のサバイバルゲームマニアの人たちと交流を持っている真人は、日曜日にも家にいたためしがない。体育会系の体格をしていて、一見としても高校生には見えないが、実は気の優しいやつである。

すでに両親公認の彼女がいるのは、トオルたちの周りには真人だけだ。

中学の時の仲間とバンドを結成している研司は、貸しスタジオ代を稼ぐためにバイトに明け暮れていたという。小さきな体に似合わず、大工仕事を手伝っていたというのにはみんなビック身長こそ伸びてないが、研司の細かった腕し情には、夏休みの前にはなかった筋肉がついて

「トオルは映二と一緒に北海道行っただろ。土産は?俺たちに土産はないの?う」

真人と研司は、トオルルたちに旅の土産を期待していたらしかったが、あいにくバイト前の高校生二人。当然、貧乏旅行である。

「あるわけないだろ。俺たちふたりともバイトの前に旅行しちゃったもんだから、泊まったのもボロい民宿ばっかだぜ。な、トオル」

原本 46 ページ・文字起こし草稿

みやげ土産あるよー-やったぜトオル。ざさすが友だち甲斐のあるやつだぜ。お前って普段はkmくさいけど、というときは頼りになるよなたなああめ、クレクレタコラー休じられない表情をする映二の前で、トオルはカバンから何やらごそごる取り出した。真人と研司にそれぞれ手渡す。

「はい、北海道土産。なかなか、いいだろ|それは自動販売機で売っている清涼飲料水の向だった。

「なん.じれaだいばくしよう真人とし研司の上間に.映二が大爆笑して答えた。

[ぎやはははははっ、そいつあ、アレとっ。富良野で買った年シューズだっ-

「何|ットオル人てゆめえーと真人と研司に手渡された缶ジュースは、たしかに北海道富良野で買ったものかもしれ2uガが全国どこでも買えるものでもあみ.生得

「なんだよお、ちゃんと北海道土産だろう。なんで、るそんなに怒るんたよよトオルは、真人し研司にこづき回されながら、へへへラへラ笑っている。どうやらこれは

原本 47 ページ・文字起こし草稿

真人のぶっそうをな言葉に、映一が思い出したようにしゃべり出した

「ウソソっていふえば、結局、昨日は地震こなかったなあこ」

映二がなにやら残念そをうなのは、半分はウワサを信じていたせいだ。

「ああ、あの八月三十一日に大地震が来るってヤツね。あんなの信じてて騒いでたのは、小学生と映二くらいのものだもんな。残念でしとた]からかうような研司の言い草に、映二は口をとがらせ少しすねた前をしている。オバケや宇宙人やミュータントなどの俗っぽい話題に長けた映二は、仲間内ではすっかり。情報オタクの称号を与えられているのだ。

[そうだよなあ。巨大地震が起こるとしかミュータントが日本に現れるとしか言ってる連中も多いけど、ど1ーせいっつもウワサだけたなんだよなあ。アメリカはいいなあ映二のがっかりした様子を見な

がら、トオルは同じようにガッカリした顔の小学生が、今現在日本中に何信いるだろうと、バババカなことを想像して笑った。

そんなトオルの想像を設えように、聞き覚えのある女の子の透き通る声が、四人の間に割つ|あら、ミュータントはきっと日本にもいるはずだわー朝、通学路で聞いた透き通る少女の声。その声の持ち主は、井上鏡子だ。

ーキョーコちゃん、キョーコちゃんもミュータントの存在を信じているんだね。俺たち気が

原本 48 ページ・文字起こし草稿

|。..、ラリし和え全当たい合うねえ」

角子ご7)いじのき1本1て人の身の下が八び才っていた情けない志だ
吹二はすやか9鱗-にお熱しドドせんしはんざいIMENっていう強いミュータント戦士たちが、悪の犯界組織と戦っているのよ。カッコいいよねれたええ|鏡子はうっとりとミュータントについて語った。

かしゆみどうやらら鏡子の隠された趣味は、アメリカのミュータントだったようだ。だが、これには映二が意外にも反発した。つてでもさ、XIMENってみんながみんなを本当に強いわけじゃないんじゃないか?りらよはぐれて市民権を剝奪されたミュータントが、寄り集まってるだけだっそて言うよ]

「ああら、アメリカ政府にれたてついてまでも自分たちの正義をまとうしていあたけじょい。ミュータントだからって人権を無視しようとするアメリカ政府の方があたしは放せと上還う」,ン\記い3j捧|鏡子はミュータントについてずいぶん詳しい様子だった。その知識量は情報オタクの時しし対夫;;;;いや、るそれ以上のようなだった。

つて武九牧人和合っそのだけは、あんまり好きじゃたないなたあ_

原本 49 ページ・文字起こし草稿

「XIMENは乾走族とか垣力団じゃないんだから。能力の高い人たちが集まってでい2スベヘシャリスト人上集団なよりよ、きさきつしと-映二はXIMENについては反発しなかふら4、尊敬したように鏡子を見ていたと。またミミュータントの存在自体にうとい真人や研司やトオルにとっては、よふたりの会話にちょっと呆れ毅になってしまった。

「井上も映二と一緒に、変な趣味持ってるんだね。ミュータントだのオバケだの本気で信じてるなんて、結構コドモじゃん」

映二たちの中では一番童疾なトオルが、鏡子に言った。

[あれっ、もしかしてやいてるの?トオルくん]

鏡子の情に手を回しなから、映二が悪態をつく。鏡子は注の上の映二の手の甲を、キュツとつまんだと。

ーてててー

「あたしは信じているわ。普通の人とは違った能力や姿を持った人間は、それだけで偉いと思うのよ。あ、でも子供たちがウワサしてる新宿にミュータントの基地がある・っていうのは、ホントじゃないかカかもしれないけど|釣子は自信えつぷりに。日本にもミュータントは実在する・ケと言うが、真人も研司もトオルも一枝には信じられないといいう顔をしている。

原本 50 ページ・文字起こし草稿

トオルには、ミューメタントの実態がどんなものしんぎ:ys,yu、邊三二二三仁和p2PcGとえなは自分たちを半身の相おは和区つ和・た。人作らかかか力かつ<たともちもたかびびよつとしたなら自分たちのすぐ央-ミ。

くく側【ミュータントよ吉にy)*きようにミよよい||も信じて、るのだ。な実在して2の0たと前子も員そんなのってでなんだか気持もち悪くないか2、身近にい7りらり、ミツ|ダ伝染したりしないのかなあう?・

にいたりしたんら、ミュータントってss\いssOけんいどちらのほうか子供ごないのかか研司は思いついたことを口にした。この発言には鋭子がムツとして言った。

「やだあああ、研司(んって、バカなの?ミュータントが伝染病だったら、アメリカ人なんかとしづくに全忠ミータントよ|んみんながクラスのアイドルたしと思っていた鏡子に、案外キソツイところがあるのをトオルツッたちは初めて知つとミ>|つOOだつ3;;はビツつその時、ドアが開いた。体育教師をしている、まだ若い担任が闇を見せれ.をの競が生入た>33つOoええ折が"有朋ちの衣よりも日焼けして真つ黒だったので、初めは誰なのかわからなかかったえ秋の禄約ぎづoO仁の皮い括に的人げになみさいただて教室内は一角、シーンと静まり返った後、ワツという歓声に変わった(りここらりこらりーっっ、静かにしろー1。ホームルーム始める。夏休みは、もう終わったんた

原本 51 ページ

もうすぐ、あれほど暑かった夏も終わろうとしていた。

第2章

原本 52 ページ・文字起こし草稿

「選ばれし子らの学園アメリカ、ニ=ニューヨーク州の郊外に、広大な租地を持つ奴設学加がっな高い壁に囲まれた広大な敷地の中には、緑に恵まれた豊かな土地が広がっている。

[選ばれし子らの学園』と呼ばれるその施設は、医学博士チールズ・エスグをピア氏によっそうaいいsつの創設されたものだ。エグゼビア氏本人も、ここで暮らしていたここは、ある目的のために造られたトレーニングセンターであり、秘密の研究施設でもあつ外界からの侵入者を盟もレーザー和監視システム4に守られた[選ばれし子らの学園]には、最新鋭の医療設備や情報設備、研究設備と様々な資料や専門書がそろっている。

生活密閉としての環境も万全でて、多くの人間たちが人快適な生活を送れるようになっている。

原本 53 ページ・文字起こし草稿

それらがすべて、エグゼビア氏の私費で愛われているというのだから、驚きだ。氏がどれほどの資産系なのかは、誰にも想像がつかないだろう。

たたし、ここに住んでいるのはただの人間たちではない。

生まれなからにして特殊な力を持った者たちばかりかが、だいに集まっているのだ。彼らの力の実例をあげればきりがなが、例えば飛行前力や熱線発射能力や怪力を持ち、ある者はテレパシーや物質破壊の力を持っている。なかには、人間離れした獣の姿をした者もいる。

個々の能力差こそえあるものの、それらは通常の間が持ち得ない、未知のパワーであった。

特殊な能力を持った者たちは、十三歳を過ぎる頃に能力が発現し始める。

それは。ミュータントケと呼ばれる新しい人類である。

この[選ばれし子らの学園]は、エグゼビア氏によってミュータントのために用意された施設であった。

ここへきたミュータントにとっては、第二の族郷とも言える場所なのである。

もちろん、創始者のエグゼビア氏も強力なテレパシー能力を持ったミュータントである。エグゼビア氏は自らがミュータントであることで、ミュータントレとして生まれた者たちの心を深く理解していた。多くのミュータントたちは彼を父のように慕っていた。

アメリカは、早くからミュータントが出現した国である。

原本 54 ページ・文字起こし草稿

だが、当時のアメリカの事情はミュータントにとって暗いものだったと。自分たちとは輝う力を持った者たち、ミュータントという存在は普通の人間たちによって簡単に抱否された。

ミュータントも同じ人間であると、誰ひとり認めようとはしなかったのだ。

ミュータントの存在が明らかにされるとし、町のあちこちで武器を手にした普通の人間たちによるミュータント狩りやが始まった。ミュータントレと呼ばれた新人類たちは、泣のように間によって狩り立てられたのだ。

難通の人間たちによる不当な差別や蔑視によって、ミュータントとして生まれた者たちは通の人間を憎むようになっていった。そして対立は激化した。

ミュータントは、自分たちがミュータントであるという理由だけで銃口を向ける普通の間たちに対して、反撃を開始した。ミュータントによる復讐が始まったのだ。

結果的に、人間は心度ミュータントを恐れるようになり、ミュータントは人間を嫌いになった。ミュータント能力を使った犯罪が増大し、ミュータントの社会的立場はさらに悪くなっをんなミュータントの中には、ミュータントこそが真実の人間であり、世界の著者なの

原本 55 ページ・文字起こし草稿

だからエグゼビア氏は、この学膨をつくったのだ。ミュータントの補脚を2くったのだ。

ミュータントが安心して暮らせる家を。そして、ふミュータント犯罪をなくすための活動の拠普通の人間に対し好戦的なミュータントや、ミュータントを使って悪事を働こうとする組織と、たとえるそれが、ミュータント同士が戦うことになっても、あえて了肖っていこうと決意したのだった。普通の人間とミュータントの平和的共存の実現を夢見て。

そのために戦うミュータントたち。彼らは、。XIMENケと呼ばれている。

彼らは【選ばれし子らの学園】に集う。ここでは、エグゼビア氏や他のメンバーによって、ミュータントバハパワーを科学的に分析される。それによって再開発された彼らのパワーは、トレーニングを受けることしでさきさらに角え上げられる“同時にミュータント能力を伸ばすばかりではなく、日々人間としての心を養うトレーニングにも屋んでいる。

今、【選ばれし子らの学園】のミーティングルームに、XIMENのメンバーが帝をそろえて部屋の中は消較い。ミーティングルーム正面に設置された巨大んなプロジェクターには、次々とどこか外国の町

中の映像が映し出されている。フランス、イギリス、イタリア。様々な国の株子が、目まぐるしく流れて行く。

原本 56 ページ・文字起こし草稿

プロジェクターの右側は災い地上になっていて、そこにはひとりの小柄な男性がいる。映像に関する説明を、XIMENたちにしているのだ。ガスキンヘッドの小柄な男性の目は鋭く、黒いスーツに身を包んでいる。机の陰に隠れていてよく見えないが、彼の下半身は宙に浮く黒い乗り物の中に収まっていた。彼自身が移動を望めば、箇所物は宙を滑るように自在に走る。彼の持つミュータントパワーを利用し、足の不自由な彼自身のために自ら造った反重力カーであった。

彼の名は、プロフェッサーX。

XIMENの側始者であり、『【選ばれし子らの学園】』の創始者である。本名をチャールズ・エグググゼビアという。

今、プロフェッサーXがXIMENたちに説明をしているのは、彼の持つ情報網を駆使し調査見解をまとめた世界各国のミュータント情勢についての報告だった。XIMENのメンバーは、プロフェッサーXの解説に関き入り、興味深そうにその映像に見入っている。

両面が、また変化した。

プロフェッサーXは、手元の資料を見ながら説明を続けた。

-ここまほては、ヨla口ツパを中心に最近のミュータント情勢について報告したが、ここからは7メア講国に話を移そう|直近代的な高届建築ビルが立ち並ぶ、小ざれいな都市の様子が映し出されてい く。(。ピルの9

原本 57 ページ・文字起こし草稿

林の朋には線の炎のような未開のジャングルが隣接しているのが見える。アンバブズスな風景半円形のテーブルについて、プロフェッサーXの話を聞いているXIMENの表情は、様々プロフェッサーXの左から、太い腕を組んで陰しい表情で映像に見入っている中年の男性ウルヴァリン。るその隣で両肝ををろうえほお枚をついているジュピリーは、また訪れたことしのない見知らの国の映像が珍しいのだろう。目を丸くして興味深けに見ている。

ジュピリーからすこし離れて、ストーム4、ジーン・グレイ、ローグが並んで座っている。長いウェーブとグラマラスなナイスポボテディーで三人しんも個性的な美女たか。プロフェッサーXの調査報告を聞く態度は真剣だ。褐色の肌のストは、少し気て切れ長の目の女性で三人の中では一番落ち着いて見える。ジーンは、栗色の表を後ろで束ね、その隣にいるローグは、勝ち気そうな顔立ちのせいか活動的な究困気をもっている。三人とも、ボディラインがはっきりわかるほどピッタリした伸縮性のあるスーツに身を包んでいた。

ローグの横には、青い長毛でけむくじゃらのビーストが、さっきからしきりにメガネの明りを気にしている。

さらにその朋に座ったガンピットは、どこから見てもチンピラだ。部屋の中だというのに、重をるうなズタボボ口のコートを羽織っており、不良少年さながら、音をたてて口の中でガムをク

原本 58 ページ・文字起こし草稿

ゆ②⑩チャクチャいわせている。彼は時々いらいらするように、組んだ足を揺すってはいえプロフェッサーXから一番苑れた席に座っているのはXIMENのチームリーダーのサイクロップスである。鶴静沈着なサイクロップスは、その目を一同の前にさらすことは決してなしやだ。記のミュータント能力であるオプティックブラストは、パイザーで朱路していなければ祝はかいかく線の先にあるものを破圭してしまうからだ。パイザーで両目は明れているが、背が高く中肉中符の二枚目である。

現在【選ばれし子らの学園]で生活しているXIMENメンバパー全員が、このミーティングルームに集まっていたと。

「アジア各国のなかでも、最近急成長をとげたばかりのカンボジア。ここは和独立民主国家となった香浴や、シンガポールに次いで、急速度で都市開発が進められた国だ。しかし我々の調相によれば、これらアジアの急成長発展国では、近代文化を導入する反面、まだまだ古代の土着文化に依存した生活が営まれているようだ[ラッルンンとできたばかりの近代都市が映し出されていく。

[さらに、これらの国の人々には共通してミュータントの存在るく、のものに対する処、有崩れが祝めて低いという調松結果が出ている」にすす押噴宮殿プロフェッサーXの報告に、XIMENたちからどよめきが起った。

原本 59 ページ・文字起こし草稿

w『プロフェッサーXの出した結論に、ガンピットが噛んでいるガムをクチャクチャいわせながら口をはさんだた。

「へーっ、アジアってのはおおめでたい国ばかりをそろってるんだな」

ローグもちよっとあきれたように、首をすくめゆる。

「ラッキーだとしても言えるわよ」

はんのうちゅうちよXIMENたちの反応に驚嗜するでもなく、プロフェッサーXは話を続けた。

[経済大国し呼ばれて久しい日本も、例外なく。ミュータント不在の国・だと言われている。

ご丁寧に政府高宮レベルの発表までして、つい先日話題になったのでみんなも知っているだろうそれは、一週間ばほど前の出来事だった。

アメリカンチェリーの輸入問題でアメリカを訪れていた日本の新進若手議員が、夕食会に出されたワインで酔ったことから始まった。

その日本人は、つい、言わなよくとしもよいことを口にしてしまったのだ。

|ああ。。ア7アメリカのミュータント礼因に対しては一切関与するつもりはございせんが、チュリーの軸入に対しては有秒固しした衣度でけじめをつけていきます/!...とかつて、層の太いジャパニーズが、大統領補佐官に言ったの言わないの。何にしても、る<その引用がアメリカ国民

原本 60 ページ・文字起こし草稿

の総りを買ったんだな」_2ては来期からアメリカンチェリーの輸出量を現在の十倍にしえいアメリカ便このまたい本のさくらんば諸家が一輔もなくなってしまうだろうという.危機感にとらわれた日本側の攻防戦の一子だった。

「日本人はミュータントなんて対岸の火亡だと思ってるのよね、きつと。だから、あんなに性々しいことが言えるんだわ]_ローグの言うとおり日本人のことなかれ主裁的発言にアメリカ国民は狐烈に反発した統選あの時のジャパニーズは、そのの伴日、発言撤回と府因の申し立てに健走し、逃るぬみように日本へ帰っていった。

対岸の火席/という見解に、ストームもうなずいている。ただ、ジュビリーだけは、まどだ目をきよろきよろさせなかがかなら。

「.....でも、あたし。一度でいいから、日本に行ってみたいなあ;.....と、ほつりとつぶやいたのだが、朋のウルヴァリンの大声にかきけされ、一同の定には届か

「日本は非枝三原則の賠だからな、ミュータントについてんも同じ対応をするつもりなんだろう。

原本 61 ページ・文字起こし草稿

アア./吉1ワサがある&。私はそれが気になっているんだ。もしかするとし、現地に起いて調査する必要があるかもしれない」

プロジェクターに映し出されていた映像が放わたので、プロフェッサーXは部屋のライトをつけた。まぶしい光が部屋を満たす。

「子供たちのウワサなのだが、東京の中でも特に栄えた超近代都市新宿にミュータントの基地があるというのだ」XIMENたちがふたたびどよめいた。

とたったと今、ミュータントはいないと無礼な議員が宣言していた国で、そんなウワサがあるしと火のないところに煙はたないという言葉もある。もしかしたら、日本の見えない部分でミュータントが生まれているのかもしれない。

[つまりそれは、ミュータントに関心を持つてるのは大人でなく子供ばかりだということですね。新しいものに気付くのは、いつも子供たちですものね]ストームが冷静に判断し分析した。その時、一同の中心でカン高い声が響き渡った。

「はいっ!はいっ!ねなねえねなねえ、プロフェッサーX。るの調査あたしに行かせて!あたし、日本に行きといっ1ジューピリーが、日本への調査に手を挙げて志願したのだ。その目は、また見の日本への期待

原本 62 ページ・文字起こし草稿

感でざいっばいになって、キラキラ交っている

「このお嬢ちゃんじゃ、頼りにならないと思うぜ」人ウルヴァリンが言うと、ジューピリーはプンブン訟った。まったく短気な女の子たかたしかにやる気だけは十二分なのだ。

「日本は君も行ったことがあったね、ウツヴァリン。では、今回はウルヴァリンとジューピリーこ、日本の調査に出掛けてもらうことにしよう。ふたりとも気をつつけて行ってきたとまえ」

[ええっ人役がこいつと3人待ってくれよ、チャーリー。調査だけなら悠びとりだけで十分だ。このお嬢ちゃんが一緒じゃ、足手まといになるだけだぎぜ」

プロフェッサーXの決定に、ウルヴァリンは不満気に机をドンドン拳で叩いた。

「足手まといで悪かったわね、でも……よろしくね、相棒さん」

シュビリーは強引に、机に張り付いたウルヴァリンの拳をがっしりとつかんだ。るの太い用に自分の腕を回すと、チェシャ猫のようににっこり笑った。

三コユースほどしかない二十五メートルプールの庭のような、細長い空間の中央にふたつの閑が立っていた。ふたりの頭上高く、約十メートル上の天井部に埋め込まれた赤い照明だけが、ほのかかにふたりを照らしている。

部屋の中は葛剛かった。部屋の両端は暗間に包まれ、視界がさきかない。

原本 63 ページ・文字起こし草稿

たすじ、よたりの上下左右を継うように走り抜けて行っ。

北線を避けて右の壁に飛んだひとりが、もうひとりに向かって叫んだ。

「ジュビリー、右前方!発生源を狙ってっ」

「アイアイサーツ、ローグ|ジュビリーと呼ばれた少女は、はっきり聞きとれる大きな声で叫んだ。右に飛んだローグに続いて、ジュビリーは思い切り床を血った。ローグとは反対に左の壁面に向かって跳ねる。

ローグは、緑のヘアバンドでおさえた長い豊かな巻き毛をゆらしながら、よふたりを狙う光線を上手によける。伸縮性の高いボディースーツに身を包み、同じ色の手袋とブーツをつけてい左の壁面にジャンプしたジュビリーも、襲いくる光線をきらにかわしつつ、両腕に力を含めた。ジュビリーはいつものホットバパンツにハイネックシャツ、るその上に薄地のコートを羽終っている。ショートカットのカールヘアが弾んでいた。

ジュビリーの腕に電気の帯が巻き付いた。腕全体が電気を帯び、バチバチレとし火花を散らしてジュビリーは体の内側から生まれた熱いものが、両腕に集まっていくのを感じていた。

赤い光線が放たれた方向に向かって、電光が走る。これが、ジュビリーのミュータント能力

原本 64 ページ・文字起こし草稿

であるプラズマボルトだと。

「こんっちくしょーっ」るねらだが、プラズマボルトは、彼女の意志に反して左へ介れた狙ったはずのターゲットを大きく外れて、チタンの壁にあたり、はねかえされる。和ようしミ>3いくすじもの赤い光線は、さらに容赦なくローグとジュビリーに襲い力かった。光線かカすめたジュビリーの服が、すっぱりと切れている。レーザービームである。

かみひとえ。いさ通でてでてんじようのまきよういてきちょうやくりよくローグは、紙一重の差でレーザービームを避けながら、天井に飛んだ。驚異的な跳躍力だ。)うすぐらい部略い照明が張り付いた天井の壁に、吸いつくように着地する。天井に足をつけ、逆きにな、3い、ぶよはどうつつてコウモリのようにぶらさめかるローグの巻き毛が攻茶の蓋のように、ジュビリーのはるか上空にあった。

マヅ[人でらん人ぼう

「ジュビリー、女の子が乱時な言葉使うんじゃないよっ!」|ルトシン入ってレーブルとトムメんだ計pーグな天電を物9つけし店を見玉Aい=;かo、いみclターゲットに剛和。ターットは先程ジュビリーの外した、此の中レーザービーの委生導、ターットビ世直したし思った昌aiグのにあるはずae動いた。床全体がものすごいスピードで、後方へ向かって滑り出した。

ローグはめいっぱい両腕を振り上げた。足果を動かして、前方に向かって人來力で注る

原本 65 ページ・文字起こし草稿

が、包が付くしすぐ後みにジュピリーが巡っていた。本高下りのベルトコンベアのような床は、走っていなければ郊に後方に絢き飛ばされでてしまいそうだった。

「やだ、も1つ。なによこれ1ーつ、ダグイエットなんら必要ないつての」

シュピリー6も一生懸命赴っている。これでもかというように人製ってくるレーザービームを、体を左右にゆらしてよけていた。

とし、突然味の動きが止まった。

だが、ジュピリーの足は止まよらない。ローグの背中に頭から突っ込んだ。

[ああっ、ごめんローグ1!・ |

「うわあああっ、ジュピリーっーんたりはもつれあい、倒れた途敵にふたたび味が動き始めた。今度は前方に向かって。

あわや、前方の避に大激欠。という寸前、ふたりの体がふわりと人笛に浮いた。同時に、何かが空を切り、飛んできたレーザービーム4にぶつかり角発した。

祭の動きも止まり、ふたりは何者かに抱えられたまま床に降りた。

「大丈夫かね、ジュピリーク・ジュピリーを抱えたのは、XIMENのメンバーのひとしとり、至い毛むくじゃらのピーストだった。和前の高い青年ガンピットは、ローグを抱きかかえていびる。

原本 66 ページ・文字起こし草稿

レーザービームを破ったのは、ガンビピットのカードだった。前方のレーザービーム発射台がガンピットのエネルギーカードを受けて火を吹き、くすぶっている。

ガンピットは、物質に自分の体内エネルギーを吹き込み、武器をつくりたすことができるよく使うのはトランプのカードで、今もカード

でエネルギー爆弾を作り、見事ターゲットに命中させていたと。、一ダイエツトも少しは必要みたいだせぜ」

ガンビットはローグを抱えながら、悪態をついた。長いコートのガンビットは、長身のハンサムである。口が悪いのはいつものことだが、るそれにも増してローグはカかなり頭にきていた。

頬が赤くなってふくれつつらになっている。

「っさい、ねっ!勝手に入って来て、あたしたちのトレーニングの邪魔しないでよっ」

ジュリエットを抱くロミオのように、南胸でローグを横抱きにしたガンビットの間に、平手が飛んだ。

らちんぼう一ローグ、女の子は乱暴な言葉使ったらだめでしょ|育い毛のピーストに抱かれて、ジュビリーが言った。

その時上過明かについて部屋の中がすべて見渡せるようになった。明るい光に照らされたそこXIMENたちのデンジャールームであった。

[選ばれし子らの学園の中にある、X'MENたちの訓練用施設である。マイクを通してス

原本 67 ページ・文字起こし草稿

「トレーニング終了。ジュピリーとローグはなは、午後からもう一度このコンビビそで、シミュレーションバババトルの再訓練をすること。いいわねジュピリーたちの様子を、中二階のコントロールルームからストーム4とウルツヴァリンが見でていた。XIMENのサブリーダーであるストームは、ジュビリーとローグのトレーニング成果に不満らしい。

ウルヴァリンもストームの後をついで言った。

「お嬢ちゃん、そをんなんじゃ日本につれてけないな」

|えっ、るそんなことないよ1ー1。ウルヴァリンの足手まといになんか、絶対ならないから。おいてったりしたら一生恨むぞ」

コントロールルームから聞こえて来たウッルヴァリンの声に、ジュピリーは手足をじたばたさせて撤議した。感情の高ぶりと同時に、手や髪にプラズマボルトの火花が散る。

[あててて、ジュピリー落ち着けは。そういうのは、降りてからやってくれ]

ジュピリーを抱えていたビーストが悲鳴をあげた。

「ジュピリー、あんたとし組んだせいだよ。再訓練とたなんて、いまいましい。デートの時間カなく(なっちゃうじゃないい

原本 70 ページ・文字起こし草稿

ぼほおデンジャールームを出たローグは、タオルで汗を拭きながら、ジュピリーの頬をつついたジュピリーは平気な宜だた。

「サイクロップスとジーンじゃあるまいし、デートだなんて、予定もないくせに]」

「なんか言ったつの族ローグがにらみつけると、ジュピリーはすぐや後ろにいたガンピットの和中に懇れた。

[ローグは俺とデートなんだよ。なああ、ローグ][おあいにくさま、ガンビピット。今日はサイクロップスたちと街で合流して映画にいこうと思サイタクロップスとジーン・グレイは、朝力から待へ外出中だった。XIMENたちはプエロフェッサーXの依頼で、近有の町中の様子を見に交替で出掛けることしもある。

ミュータントによる様々な事件が深刻化している現在のアメリカでは、パトロールも重明をX'MENの仕事だ。

[そりやや、人ここでいそがい余計に牙胸しちゃだめだよ。いつも忙しくて、なかなかデートできたをいんじゃないの。、ジーンたちよジュピリーの言うとおり、VAMENのリーダー、サイクロロップスとジーン・クレイはあっあつの人だった。

原本 71 ページ・文字起こし草稿

よし入ってでていっがだ。

「まは、仕方がないわんよね」

ウルヴァリンの後ろ姿を目で追いながら、ローグはため息をついたと。

一何それえ・ジュビリーは、理由もわからずきょとんとしている。ウルツヴァアリンがジーン・グレイを好きなことに、ジュビリーは気付いていなかった。

ガンビットは、そんなジュビリーの頭を押さえつけて、笑った。

「いーから、い1から子供には関係ないの。それより午後のトレーニングが終わったら、ジュビリーも一緒に出掛けようぜ。ジュビリーが一緒なら、ついてってもいいよな、ローグ」

いたずらっぽく笑うガンビットに、ローグがあきれた顔でうなずいた。だが、ジュビリーはふたりと出掛けるかどうか、かなり迷っていた。

悩んだあげく、ローグに告げた。

「ウーン、とりあえずあたしはウルヴァリンのトレーニングを見て、勉強する。せつかく~日本にいけるのに、おいてかれたらヤダもん」

ジュビリーは、ストームのいるコントロールルームへと駆けていった。

「ヒューッツ、下面目だねえ」

原本 72 ページ・文字起こし草稿

ガンビットは口条を鳴らした。すかさずローグはガンビットに言う

「あんたも少しは真面目になればっう」

「連はいつだって、君には真面目だよ」.ガンビットはプリンセスの前のナイトのようにローグの前に片承を着いてびさざますいええロー

グの手をとり、手袋の上から口づける。素手のローグには、やってはいけない行為だ。ローグのミュータント能力が、触れた相手の力を吸い取ってしまうからだった。

「手袋、はずしとしけばよかった|をそう言いながらも、ローグの表情は明るかった。

一方、デンジャールームではウルヴァリンのシミュレーションバトルが始まっていた。

このデンジャールームはプロフェッサーXとビーストが開発したものだ。XIMENたちの各自のミュータント能力に合わせ、いろいろな仮想の敵を作り出すことしができる。

ウルヴァリンは、コントロールルームで、見守るストームに向かって叫ぶと身構えた。

「ストーム、始めてくれ[OK。今日はセンチネルを相手に戦ってみて。トレーニングスタート!」

部屋の中が暗くなって、前方に十体のセンチネルの姿が浮かんだ。立体映像である。

「うわあ、センチネルいっぺんに十体も?大丈夫なのウルヴァリンか
こ人センチネルはなは、ミュータントを捕獲するために、ミュータント管理センターがつ(りたし北

原本 73 ページ・文字起こし草稿

ロボポットであるんる。自己判断能力をもち、独自でミュータントに対すん攻軸を熱控に久有ていん。

数も多く、XIMENたちはやいつも苦戦してて

「なあに形れ甲髪があるってもんさ」

ウルヴァリンは左右の拳を所り締めた。両手の甲から鋭く長い三本の刃が飛び出す。ウツザヴァリンの持つ強力な武器だった。

センチネルが拳を開いてウルヴァリンに襲いかかった。手のひらから長く太いケーブルが、ウルヴァリンを捕まえようと伸びる。ウルヴァリンは左右にジャンピングしながら、超合金の爪でケーブルを断ち切っていく。

ウツヴァリンには、ジュビリーやガンビットやサイクロプスの持っている、エネルギービームのような飛び道具はない。

彼のミュータント能力は、るの超人的な冶稀能力にあった。また、大手術を受けたウルヴァリンの全身骨格には、超合金アダマンチウムが埋め込まれている。

今、両手の拳の友展を突き蔽って飛び出したのも、手術で埋め込まれたアダマンチウムムの強力な武器である超合金の的は、使うたび彼に苦痛をもたらすのである。

しかし、ウルヴァリンはるの導るを顔に出すことしもなく、センチネルをつぎつきと人鉄の爪で切り刻んでいった。

。|1

原本 74 ページ・文字起こし草稿

っうわカーお!相変わらずすごいなあああ、ウルヴァリン」0。

コントロールルームからのぞいていたジュビリーは、歓声をあげた。ものの十分もカカカかふらないうちに、ウルヴァリンはセンチネル十体を倒していれ感心するジュピリーに、ストームが尋ねたと。

「ジュビリー。出発の準備は、もう終わっているの2う2こ[うん。あとはプロフェッサーXのGOサイ4ンが出たら、すぐや出発できるよ]トレーニングを終えたウルヴァリンにもコントロールルームの会話が聞こえていたらしいく、ウツヴァリンがストームに答えた。

[日本の友だちに、連絡を取っているんだとさ。さあストーム、次の敵を出してくれ]

ウルヴァリンは立て続けに、トレーニングを要請した。ストームもジュビリーも呆れて頭を見合わせた。ウルヴァリンはXIMENータフネスだ。

なえ、ウルルヴァリン。今度は、あたしも入っていい?う2[だめだめだめ、お嬢ちゃんは午後からだろ]せべかくのジュビリーの申し出だったが、ウルツルヴァリンはきっぱり断った。

ジュビリーが口をしとがらせた。

第3章

原本 75 ページ・文字起こし草稿

ジャパニーズサイト東京は、九月になっても暑い日が続いていた。

のちようこうそうい用-とちあちよよういつ新宿の超高有層ビビル街に建った東京都庁は、今日も見学の市民でごった返している。九月に入ったばかりのせい、修学旅行などで地方からの団体見学も増えていた。

旗を持った一群が路のように通り過ぎると、ほっと一息つくヒとマもなく、また新しい一団が夫んこうやってくる。さきらに、社会科見学だといったは都内近離の小学生たちが、びびびつきりなしに訪れるのもこの時期た。

一隊口ビーのトイレの前は、いつもいつも人が絶えることがなかった。

アアyリリメシ))ははjj(いpr`へTEyy*yし07レムにここ刃引3赴部仲明は、都庁の最上階にある東京都知事室のドアの前に立っていた。ピルル全体に滞計か1111

原本 76 ページ・文字起こし草稿

れているので、徐下も厳しかった。なのに建部の額には、緊張のため大粒の汗が吹き出して手にした茶封懲の中には、これから都知事に報告する書類が入っていた。

建部は昨夜遅くまで残業して、この報告書を作成した。だが、まだ立ち上がったばかりのプロジェクトチームのため、満足な報告が仕上がったかどうかには自信がなかった。

プロジェクトチームのメンバーは建部の他に七名。彼らは、建部が集めた各分野の専門家たちばかりである。なかには、著名な社会派

ルポルタージュ作家ややや大学教授、天才外科医と呼ばれる人人物もいる。

誰もが新宿新都心に対して、それぞれの立場から異なった意見を持っていた。この点から言えば、建部の人選は間違っていなかったと言えるだろう。

だが、いかんせんプロジェクトに課せられたテーマが広すぎた。

つまり上新宿・である。

建部がどれほど時間をつぎ込み、細心の注意を払い神経を擦り減らしても、最放的に満足できるような埋告書は作成でさなかった。メンバーたちが都市新宿に抱く問題点が、多すぎるたそのプロジェクトチームは、都知事の直属の部署として発足したものだった。

部署名は【東京新都市開発安全保障室】。常駐の所属人員は建部と事務の女の子りのみで、他

原本 77 ページ・文字起こし草稿

もし名のゆ釣穀スタッフ7必所符してのゆ詳問題対繁研究が了二な仕右じしよめんる。

特吉は江を決して、知事鶴の下7をノックした。

これ以上ここに立っていたら、会議の時間に間に合わなくなってしまいうだろう。知攻が時間にうるさい男だということも、十分わかっていた。額の汗は、拭っても拭っても吹き出し、導の上をすべり落ていった。

知事室のドアを開けると、接客用の革張りソファの鮮やかなこげ茶色が、目に飛び込んできた。ソファにはすでに知事とひと、副知事、そして初めて見る初索の男が座っていた。

「ふも、時間どありだな。よいか建部活。時間の約束というものはたとえどんなことがあっても十分前には、るの場所で待機しておおくことが必要じゃ。胆に銘じておきたまえ」

正面に座っている長身の白狂の男が、現東京都知事である。

髪も白いが眉も白い。だが、これは決して老人だというわけではない。彼はまだ五十代半ばあばはらぬ。ばいろ知事と対照的に脂ぎってでっぷり体格のいい融知事は、つややかカかな少れ羽色の黒髪とが、てっぺんはすっかりハゲている。たしか以前はバーコード状態をキープしていたのだが、いつのまにかテカテカになってしまった。

その際の初索の男は小さい目の男でて、ねずみのような印象の老人だ。表情の変化がまったく__gg

原本 78 ページ・文字起こし草稿

||4人たいなせいか、どこか不気味な4ードの老人だった。

「ては、際の会議年へ移ろうか。建部洛報告書はまとまっとるな」

「は、は、はい。大丈夫です」

燈下のあまり、建部の声が譲返っていた。

ソファセットの左手にあるドアは、隣の知事専用会議室へ続いている。知事室を通らなければ伴も入る-ことはできない、先全防護の密室である会議室とは名ばかりで.部屋の内装は馬鹿に豪華だ。みかげいし大きな華張りのリクライニング椅子が四つ用意されていた。テーブルは御影石の黒い一枚板を中央にはめ込んだ、大理石の円卓である。御影石に埋まった模様のような大きなアンモナイトの化石は、たぶん本物だ。

天井のシャンデリアも見事だが、部屋の側面にある大きな絵画は、いつかどこかで見たこしッああれはたしか中学校の美術の教科書だったかもしれない∴と、建部は心の中で思っ二ー2よふかぶかつー上洒々と|札し早速報告を始めることにした。汗はまだしばらく収まり

原本 79 ページ・文字起こし草稿

琶本っ人々人々人々人々人々人々人々人々人々放人々宮入る和広
軸に11和19|人・オーソリティ9の方々です。では、お手元の資料、
政頂かりらご覧(だきい者知未たらに配られた資料は、厚さえお二セ
ンチほどの小間子で、合計八十枚に及んでいんるん。もも人のオー
ソリティによる発言内容を、各問題ことにまとめ、必要関係資料を
加えて作成し21oしんじめゆくミ

「よまず、私ども東京新都市開発安全保障室』」では、現在の新宿
新都心が持つ都市としての機能上の問題点を、様々な角度から取り
上げましたと」

ひたいぬぐ建部は額の汗をハンカチで拭うと、現在の新宿について
の報告を開始した。

てクノ「現在では多様化し、細分化した新宿新都心一帯の最新の実態
状況を、細部まで把握することは非常にむずかしいと思われます。
どんなに調査を続けたとしても、常に流動的で安定しないという特
徴があるからです」

新宿区の実態を都が把握することこそ、都知事の目的とする最
重要課題であった。建部の説明に、知事も副知事も感心した様子で
ホオとうなずいていた。

[新宿は常に動いているのです。るの中で第一に、新宿が抱える大き
ななを問題点として:::私どもはミュータントの出現について指摘いた
します。このミュータントについては、資料の三十頂からをご覧ください
ださいミュータント?なんだね、るそれはそれまでで資料に目を落と
していた都知事が、急に顔を上げた。その顔なはなぜかこわばり、
太

原本 80 ページ・文字起こし草稿

い用が昆虫の触光のようにぴびくぴくひきつっていいれ。っ通の人間
とは違う、異質な能力を持った新しい人類をミュータントケしと呼
びます夫訟は、人資料をばらばらとめくりつつ、説明を続ける。

「このミュータントの発生現象は、アメリカから始まりました。すでにアメリカでは、多種多様な能力形態の数多くのミュータントが出現しております。XiMENと呼ばれんるミュータントの集団が、別のミュータントたちとニューヨークなどで抗争を繰り広げていることはなほ、日本国内でも一部報道されているとおりです。アメリカ国内ではこの事態に対応すべく、ミュータント管理センターを設置し、国内のミュータントの登録管理を進めているということです」

資料にはアメリカ国内のミュータント発生率の年間推移が、克明に示さきれていた。さらに、それらミュータントの実証例が、写真入りで取りあげられている&。

4校目の写真には右に愛らしい普通の子供が写っており、左にはその子供の顔面に毛が生え牙か伸び、内のように変態した様子が写っていた。

アメリカのミュータント管理センターに登録された者たちは、ミュータントだけを集めた収容施設に反り分けられ、(る)で一生を過ごします』

しただたきジッター計したレータットめた03芝到りら中4朋導活するという。これは、ミュータントによる集団犯罪を防ぐやためであり、未知のミュータント能力を研究するためでもあった。

原本 81 ページ・文字起こし草稿

区在、秋次人冬町をを中心にする親符で著者たちを中心に、このミュータントが出現すいうウワサが唆かれています。これは、住所・氏名・年齢・職業不定の若者たちが、何りらかの目牛て新答に集まってきたために起こった現象であり、ウワサを聞きつけて新宿を訪れる若者けちの数は日々増加する一方です。いずれ彼らは新宿を占拠することになるかもしれません]新衛が一部無法地帯と化していることは、周知の事実である。そこに集まって来る若者たちが徒党を組んで、生活憶を築きつつあることも調査済みるであつた。んを現在の新宿では、若者たちのグループ抗争や地元暴力団、外国人マフィアとしての衝突が毎日絶えないのだ。

年齢・性別・国緒を問わず、この町は行き場のない者たちが集まる、吹きだまりのような場所なのだ。いつも誰かしら立ち止まっては、また去って行く。だが、彼らは一定期間止まっても必ず新宿を後にする。新宿は音から、をういいう町だった。

――きらに今回、オーソリティの先生方のはとんどが、この若者たちによるミュータントのウワサについて、近い将来、日本中に広がっていくだろうとの見解に直しました」

齋告に夢中になった建部は気付かなかったが、るその時都知事たちは三人としもいっせいに痕をあげ、導を見合わせていた。

-しかし、実際には、ミュータントに関する事実関係の裏付けはされておおりません。るそれでもウワサはとしとどまることを知らず、すでに都内近郊の若者たちの間にも広がり、あたかも現実の

原本 82 ページ・文字起こし草稿

ものであるかのように:.....」

ばかもの-馬旗者!」どなおおどろたけるべ人ははし3.ioと、突然、都知事が大声で玄鳴った。その声に驚いた建部の体がビクリと跳和上がる立ち上がりぎま、都知事は持っていた資料を建部に投げつけた。

都知事に続いて、副知事までもが、建部に開声を浴びせ力かける。・

「何がミュータントだ!馬鹿なことしを言っでは困るよ、建部君。我々は君にそんな根も葉もないウワサ話を調べてもらうために、室長に任命したわけではない」

「をうとも、そんな世迷い言を聞くために、忙しい時間を割いて集まっているわけではないのだぞ。だいたい、ミュータントだなんだと騒いでざいるのはアメリカの、それもほんの一部の少数の間に過ぎんではないか]初老の男は人冷ややかに言った。

「日本にミュータントがいなことは、周知の事実。いもしないものに気を回すヒマがあるのなん新都心の不明土地所有権の詳細を明らかにするのが最優先だろう。だいたい、今君がやらなければならぬのは、若者たちによる新都心のスラム化を防ぐ、具体案を提示することししと巡うのかかね|――しかし、ミュータントは...|それでも建部がミュータントについてでて発言しようとするしと、都知事は血って冷たい中差しを

原本 83 ページ・文字起こし草稿

47. 旬部に向け、一言6んないまま会論室を後にした。

初老の男も、をその後から部屋を出て行った。

「建部洛、だめだよ、こんなところでミュータントの話題を出しては。ま、次回の報告で失男するこにしとた」

脂ぎった薄笑いを浮かべて、副知事は建部の崩をボンと叩いた。

「わ、私は、ただ新宿の現状についての報告を:…」

建部は、なぜこれほどまで自分が怒られたのか、なぜ、都知事があればほど激高したとの力か、まったくわかカからなかカかった。

とにかく、また徹夜で新しい報告書を作成しなければならなくなつてしまったことだけは、よく理解できたのだが。

第四章 ブラックローゼス

原本 84 ページ・文字起こし草稿

1 ブラックローゼス第四章黒薔薇十字箇短舞伝明の|角に、一還の古いラブホテルがある。村用りのビルから見れば比較的新しい建築物だが、今は廃ビビルである。このビルの地下は、[へへブン]という名の小さなライブハウスになっていたと。

ライブハウス『[へへブン]』は、ロコミで集まる客だけを相手にインディーズバンドがカカ演奏を統小さなライブハウスである。そして「【へへブン】を仕切っている現在のオーナーは、字正貴。冠二十江になっただばかりの、自称青年実業家だった。

十文字は、『ブラックローゼス]のボスである。るそのため、連日連夜『【へへブン】は『ブラックローゼス]のたまり場と化していた。

十文字は、ここでは本名を名乗らない。『へへブン』に集まって来る若者たちは彼を、尊往{

原本 85 ページ・文字起こし草稿

M衝ん、心めて『クルス』し[し呼んでいた。

クルスが』狗目をかけているインディーズバンドのボーカッばは、有ノイオーイイヤヤーしとしが朗ばれん月ティイーチャーの歌声は、聞くものの心を釘付けにする。をの魅力あふれる声は、クッルスに劇にしていた。クルスはティイーチャーの才能にほれ込み、開花きさせるために【へへブン]を開いたとしも語われているほどだった。

「『へへブン]の店内は慌ただしかった。数人の少年たちが然心に音響機材の調整や、ステージラはげイトの換備に励んでいる&。

クルスは【ヘヘブン】の隅にあるカウンター席に座りテキーラサンライズをなめていた。クルスの腕には、ティーチャーも座ってギターを鳴らしている。

ティーチャーはクルスよりもデニつつ三っ年上の青年と。たかが、ドレッドヘアでやややせ形のティーチャーの、本当の年齢は不詳。もちろん、まっとうに働いている風でないのは、よたりに共通して言えた。ふたりとも身長は同じくらいだが、外見の印象はまったく人違っている。

ティーチャーはギター一本あれば、それをそれだけで満足してしまう。和歌っているだけで幸せになれるし、ナルシストだ。黒いルーズな服が好きで、レゲエっぽい外見だ。笑つきもどちらかしというインディカオ系の、獲い顔をしている。

原本 86 ページ・文字起こし草稿

クルスは、落ち江いた囲気のダンディーな男で、何をしていても絵になる男である。オーレルベック風の欠をかさあげる仕難も、妙に色っぽばい。周囲の若者たちからの信頼も厚く、女に今も、カウンターに座ったクルスにへばりついた女の子たちが、ティーチャーには目もくれず言い寄っている。だが、クルスはそんな少女たちを、軽くあしらってしまう。

「お嫁さん方。悪いが條は今、今度やるティーチャーの初めてのライブの打ち合わせ中でねね。

少しだけ、おとなしくしててくれないかなクルスは言い和持って此れそうにない少女をつかもと、あごに軽く口づけた。その少女は宮びのあまり引つ維り返った、どうやら和失神してしまったようだ。周りにいた少女たちに抱えられて、誠下の方へとし引きずられて行った。

[フフ…。罪な男だな、クルスーティーチャーはくすくすと笑って言った。

いつものことらしく、クルスは全然抗りた様子はない。

[今の仙たちに、愛する女は必要ない。そうだろう12・ -平釣とそんな台詞を口にする。別に意識してそうだったわけではないのだが、その姿は同性

原本 87 ページ・文字起こし草稿

「あ、矢はその心配はないが、お前はモテるから気をうけないと……・ ティーチャーが言ってるそばかんら、クルスの背後にひとりの婦が逝割・ てきた。

『ヘブン』に来ているいつもの少女たちとしは、一味違う。聞っぱい表情のアダルトチックな団援の壮女ただった・ ウェストのしまった黒いロングドレスも和色っぱい。2男の視線を人匂付けにする美しさだ。るその全身から、したたるような女の気を撒き散らしている。すかりつくようなるその視線が、クルスに注がれていた。強烈なセックスアピールを持つ|クルス…私、ミシシッピーを抜けて来たんだ…。…私を…、ブラックローゼスに入れてほしいんだ…・ | 甘い声が、膝えていた。女はロングドレスの裾をまくりあげて、クルスに見せた。

やけ黒の総レースのロングドレスに隠れてわからなかったが、るの足が火像をしたように真っ赤に腫れ上がり、ただれていた。ずるりと制けた皮が、足首まで垂れ下がっている。

リンチのあとしだった。柔らかそうな股からふくらはぎを、バーナーの火であぶられたのだろう。火服れと内出血が白い足を真っ赤に彩っていた。

[私を、ブブブラックローゼスに…|そこまで言うと女は、その場に崩れ落ちた。

原本 88 ページ・文字起こし草稿

おにひめ

「クルス、こいつ…ミシシッピーの鬼類だ!」

カウンターの中でシェーカーを振っていた、ズウズウレと呼ばれる少年が叫んだ。

女はブラックローゼスと対立するミシシッピーのマドンナで、役姫しと呼ばれている存在だった。クルスもティーチャーもその上顔くらいは知っていたと。

あがしき暴走族あがりのミシシッピーは、和鬼姫をマドンナとして崇めグループ内部の士気を高め、統制をとっていた。そのマドンナが抜けるとしなれば、大事件だろう。

「どうということだ、鬼姫ークルスが倒れた稀尋を喚き起こすしと、鬼姫は謀える手でクルスの贅をさすった。

「.....あたし.....あんたに...、移れちまったんだ...|>ミトいLすミご
かか向群の目から涯がとめどなく流れ落ちる。裾が広がる黒いロングドレスに懇され、床には血の染みか広がっていた。

向尋は自ら、ミシシッピーを抜けてきよきたのだった。クルスに対して、人能にも漏らせの恋心をいたことが、彼女の不幸の始まりだった。

の朋し通せるものならば隠しておきたかった。松めていられなければ、ミシシッピーマドンナとしての地位を維持することは不可能だった。マドンナのほほ笑みはミシシッピーのシンボルである。ミシシッピーのリーダーは、久必で残妨で独占欲の強い男だった。

原本 90 ページ・文字起こし草稿

身の火和修は、命懸けでミシシッピーを抜けた、役姫の愛の証しだった。

「さゆっ、救急箱、救急箱ちょーだいっ」

カウンターにいた少年の呼びかけでクルスの部下の少年たちが数人、カウンターの奥の小部屋から出てきた。クルスは少年たちに、鬼姫の作の手当てを命じた。電導

「自分から女を捨ててまで、ブラックローゼスへ(へ来たってのか。見上げた根性だ。お前たまち手朋く舌座してやっでてくれ]どんなに手当てをしても、この像跡は残るだろう。黒いドレスの下の皮膚はいたるところが焼かれただれていた。無叙だったのは、唯一疾面だけだった。

「その女、こっちに渡してもらあうか!!少年たちが役姫をかつぎ上げようとしたとさき、入り口のあたりがふいに騒がしくなった。クルスとティーチャーカカ振り返ると、そこに見覚えのある穀かがあったと。

ミシシッピーのヘッドで元暴走族のリーダー、政末だった。リーダーを守るように武装した五人の男たちが狼区を囲んで構えている。をの手にアーミーナイフや作った爪のメリケンな[まま闇が光っていな

「然のご来該とは、恐れ入る。何の用だい、竹区クルスは政落たちを上成財するようににやりと笑った。

原本 91 ページ・文字起こし草稿

,ま生生人-きかな硬g0つしoだが、クルスはそんな雅区の神経を逆撫でするかのように、あっきりと炒った[帰りなを。こいつはもう、あお前らのマドンナじゃない」

いかふるきようきふく3-LV-クルスの返答に、雅落はぶるぶると怒りに身を有漂わせた。狂気を含んだ目が、真っ赤に血走

「そをっ、そいつはなあ。令たちがさんざ稼がせてやって、それでも足りずにメンバーに貢がせたく秒いかがかえでて、多沢三味の日々を送らせてやっていたんだ。いまさら、ブラックローゼスに視返られちゃ俺たちの名前に伏かつくんだよーっ中きっさきと、こっちへ外しやがれれっ五人の部下たちは政砂の左右から、役姫を支えるブラックローゼスのメンバーに飛びかかっゆかおうせんて行った。メンババーたちは向姫を床に置いて、応戦する。ここぞとばかり、外秦が役姫に近づ役尋を捕まえようと手を伸ばした和雅区の後みに、

クルスが回りこも。昌に見えない早さで何みぎで。け度も雅秦の右腕を蹴りあげると、木の枝が折れるような音がした。

本生生生生生||||||ん

原本 92 ページ・文字起こし草稿

っがむ昨き徐まされたカミソリの刃のような勢いのクルスの類った散のつま先が、稚夢の無防備な右腕を砕いていった。

「っぎゃあああっ|gm-稚夢が右腕を押さえて叫んだ。その声に驚いたミシシッピーの五人が振り返ったとさき、和政克は称を転がって尋れ回った。稚夢の右腕は、指も手首も二の腕も肘も崩も、妙な具合に折れ曲がっている。ルーち8あまりに暴れ回るものだから、辛うじて皮と肉でつながっている部分が、今にも千切れそうになって引きつっていたと。

クルスは少したとけ乱れた衣服を整えながら、冷た言った。

[ブラックローゼスはお前たちと違って、女も仲間も売り買いを禁じている。おとなしく、このまま帰れ。でないとし、本当に殺す[一ぐやぐ、やうううっ、ちっ、っさきしよよ一つ|だが、まだあきらめきれない政夢は、右手を押さえてクルスに向かって突進した。捨て身の攻撃だったが、タルスは両腕でがっしりしと政夢を受け止めた。

|お前も、わかんない奴だな。踊姫はブラックローゼスが引き取るって言ってんだよ。もう女もおおお前らミシシッピーがこれ以上騒ぐ必要もないじゃねえか」

-有——う、ううう、うるせええ。あいつが役に立つか、立たねえかは條が決めることだあこ」

原本 93 ページ・文字起こし草稿

にの人。は、jも9すごいものだった。クルスに此められ身動き計利ががいともかるしい、背みに肖を生ませながらも、をの齒了イブクルスの月に路みっこうとすすすん。クダルルはそれを交わし、外紗の首筋に手刀を叩き込んだ。

「ひいガ2|鈍い調がした。ぐやらりと政砂の大きな体が麻に落ちた。

「お前ら、こいつを連れてとつとと帰れ!」6クルスの一囁に、五人の部下たちは気絶した雅区を抱え、すごすごと『【ヘブン】』からんら出で行

「ズウズウ、知姫を豊へつつれてってでやれ]ズウズウレと呼ばれた手足の短い少年が、カウンターの奥からびびょっこり闇を出した。

|きやあ、きやあ、きれいな女の人」

クルスはズウズウに和鬼姫を喘へ連れて行くように命じるんと、カウンターに座って待っているティーチャーの横に、腰を下ろした。ティーチャーは何事もなかったかのように、そこにずっと座っていた。

[はほはらな、あ前はモテるから気をつけないとーティーチャーはさつきしと同じ言葉で、クルスを迎えた。

[ああ、このままじゃすまないだろうな。ミシシッピーはこの辺のグループの中じゃ、一番し本生放放放生人||1本泣音1

原本 94 ページ・文字起こし草稿

つこいんだー新宿を中心とするグループ間の対立が、日に日に激しくなっている中での事件だった。いれでもクルスは、それがさも楽しいことのように話している。テティーチャーも、今回の和拘姫の一件はブラックローゼスの力を示す絶好のきっかけになると、踏んでいた。

「どっちにしたって、叩きつぶすつもりだったくせに]ティーチャーの言い方に、。クルスはいっと笑う。クルスは、材においてあったサラのバーボンを所んだ。その封を開けて、目の前のグラスに注ぎ足す。

[ふふ……これも億たちの、夢のためだ。対立グルハーブだろうが、暴力団だろうが、マフィアだろうかカ、政胸な奴らはぶつつぶす。

王国建設が間近くなっただけのことだよ]クルスのクラスにバーボンが満たされる。

-いつかカカ、この閑宿は俺たちブラックローゼスの治める独立国になるのさ」

[俺たち、はぐれ者の楽園ってわけた!!!クルス、あお前の話はいつも夢みたいだな|テラティーチャーはなは手の中のグラスに残ったズブロッカを、飲み干した。クルスはるそのグラスにバーボンを注ぎ足すと言った。

「夢なんかかで、終わらせない]ふたりのクラスがぶつかりあい、カチンと鳴った。

原本 95 ページ・文字起こし草稿

|和信た人放導当に全人人人人人和信う人王族人ンし人六(11...人の人
にーか1・ 瑞を人人の稚記|人人人ええっペン:マヌ和つつ/-コジンの2。
rrにつ:さんなアカつこ人クジ-っス工』そ呈人っこの有えろるを還っ
語っ生ちこにだにさとたた人に和ぶさにをこらなさてなっささは和
なささださせは人だのた同和二基とジンっユーリー

第5章

原本 96 ページ・文字起こし草稿

第五章天城心理学研究所しながらくふどうまえりゅうじんあまぎio品川区不動前の竜神神社の近くに[天城心理学研究所』は建っていたここは、登校拒否児童や神経症の子供たちのための、カウンセリング専門の私設心理学医院医院長の天城博士は、東京都の公認を受けるために長年申請はしているのだが、いまだ民間研究施設の立場にある、二十年程前に設立された心理学研究所であった。

天城閣士は、五十人歳。フルネームは天城職と言う。

まさこな克家助手をしていた宮・真砂子を早くに亡くし、今はアルバイトで若い見習いをとっかえびっかえ歴って、自分の研究を続けている。

原本 97 ページ・文字起こし草稿

「『』“(くみみ?1革つErfuPブで6kあるんが、最近のアメリカではミュータントと呼ばれる能力の|種でである。

具体的に言えば、それは予知夢を見たりコップの中の水を揺らしたりする程度の能力だ。

アメリカのミュータントの場合、るの能力は十三虚しいう年齢に達すると発現するしいうが、日本人にはそれは当てはまらず、研究所に通う子供たちは小学生から高校生まで様々だった。

能力の大小にも、かなりの個人差がある。

天城博士の持論は、この能力を持った子供たちには必ず何かのトラウマや強いコンプレックスなどの、和精神的な要因を持つものが多いというものだ。登校拒否の子供たちは皆、学校という小さな社会に順応できなかったものたちである&る。彼らは学校や社会に対して、強迫観念を持ち恐怖心を抱いている。をしかし、たいていの子供は

大人になるにしたがって、その能力が消滅していく。学校や社会に対する雷えや恐怖が江れていくのし同時に、彼らの能力も時まるのだった。

そんな天城博士にも、娘が一人いる。人天城博士の娘.天城ほのかは高校一年生の女の子である研究所の二陸に住んでいA自宅の一階を医院に改造してまで研究に没頭する父親と、ムたりっきりの家族であった。

まのかは吾の長い少女である。有の色の白さと、腰のあたりまで伸ばしたストレートヘアは

原本 98 ページ・文字起こし草稿

閨親談りであった。少し茶色がかっているのは、別にブリーチしているからりらではない。類立ちははっきりしていて、美少女タスィブだ。どちらかといえば、痩せているほうで華誰な印象が強い。

ほのかは小さきいころから口数が少なくおあとなしい、物わかりのいい賢い子供であった。

ままで親を困らせることもなければ、我を張って灯導を起こすこともなかった。

小学校に上がった年に母親が病気で亡くなったとしきは、さきすがに何週間も意気消沈していが、しばらくすると立ち直って家の事を手伝うようになった。天城博士にとっては、手のかからないかわいー人娘だった。

中学に入ったあたりから、ほのかに少したけ変化が見られるようになった。

大人びた表情で、内向的な少女だたったほのかは、そのせいか周囲の子供たちから浮いた存在になった。仲の良い友だちも、ひとりもできなかった。

たかカ協調性に欠けると注意されたことしはあっても、成績はいつも良かった。高校に入っても、るそれは変わらなかった。

この春、高校に進学したばかりのほのかは、今、担任教師の印口幸教諭による家庭訪問を受けている真っ最中である。

としいっても、小中学生の義務教育課程の家庭訪問ではない。

高校に入ってから家庭訪問ミれるということは、それぞれなりの理由があると見てよい。大きな

原本 99 ページ・文字起こし草稿

先生…今…父が留守なので、今度にしていただけませんか2吾前に何のり連絡もない、家許訪問だった。印口は突然、天城心理学研究所を訪れたのであつ

「僕はね、天城君と話をしに来たんだよ」

中口は、三十歳をちょっと越えたばかりの若い教師である。未婚の色男だ。教えているのは社会科で、クラス担任を持つのはこれで四年目になる。

また独身で二枚目の若い教師なので、特に女生徒の評判はすこぶる良い。毎年バレンタインデーにもらうチョコレートの数は校内一である。

学生時代から鳴らしたテニスの腕で、男子ラニス部の指導もしているスポーツマンでもある&。

男子生徒からは身近な兄貴のように慕われていた。

だが、ほのかはこの教師がどうしても好きになれなかった。

今日もくでさればこのまま帰って欲しいと、押し問答を続けた。沈黙ののち仕方なく応接間に上からせると、一応の礼儀して茶の用意を整えるためにほのかはキッチンに立った。

茶菓子の買い置きなどないので、おお茶をいれるだけで済ませることにした。コン口にホーローのやかんを置いて、ガスに火をつける。

その時、電話の呼び出し音が鳴った。やかんはをのままにして、ほのかはキッチンの壁にか

原本 100 ページ・文字起こし草稿

けりてある受話器を項ズゆめゆいいつみさきとまい電話の相手は、ほのかの唯一仲の良い少女、箕卿麻衣だ“ズ”。

「あ、麻衣ちゃん?うん、元気だよ。そっちは3?うん和えさん出掛けてていないんだけど。よかったらおおいでよ」

床衣はほのかよりも二つ下、中学二年生の女の子だ。これカから遊びにいきたいといいう。カからの電話たつたと。

ほのかと麻衣はどちらも登校拒否児である。ほのかは、今年の春せっかく入学した名門高校にも通わず、父親の手伝いをしていた。

それでも父親の天城博士はあわてもせず、ほのかが学校へ行かなくなったことについて、責め立てるようなことも一世しなかった。ほのかにはほのかの事情があるのだろうとし、父親なりに推察してのことしである。・もしかするし天城博士は職業柄、登校拒否の子供に接する機会が多かったからかもしだ天城朝士は、ほのかの母親が亡くなって以来どちらかといえば放任主義の父親であった。

学校へ行かなくなったからといって、ほのかが勉強することをやめてしまった訳ではないこしとちゃんと知っていてくれた。ほのかにとってそんな父親は、とてもありがたかった。

原本 101 ページ・文字起こし草稿

るこしとしもでさそるん。

呆交は登校拒否のため、天研究所に通っていたのである。麻衣はいじめられっ子だつれ。

中学でのいじめに耐え切れず、もう一年も学校へ行っていない。

ころ天需感銘所に通い始めたのは、去年の春からである。ほのかとの付き合いも、この頃から始よつたと。

「今さ、学校の担任来ちらやって。でも、すぐ追い返しちゃうから、おおいでよ。うん、じゃまたと後でね電話を切るしとし、ちょうどポットの湯も池いたところだった。

ポットにお湯を満たし、トレーに乗せる。ほのかは応接室~と運ばうと、キッチンから就下おしぐちに出てキョツとした。印口がそこに、立っていたと。

おそ遅いか力かよ心配したよ。それ、僕が持ってあげようかうう? れいう社交儀礼のつもりなのだろうか。顔にへばりついた印口の薄笑いが、気味悪かった。

|い…いええ、結構です|人とつぜん-いいんたよさよ、今日は突然来たわりしてすまなかったね。るそれで、お父さんは、いつ頃帰る予定の? 者。初めて会った時には、印口はこんな衣度の男ではなかった。親しげな口調と、姫びるよ。

原本 102 ページ・文字起こし草稿

うな日に、ほのかはなぜか背中にジツとするものを感じていたと。

いや、ほのかはるの理由に気が付いている。気が付かないように、お芝居をしているただけまほまのかには印口が今、何を考えているのか見えていた。印口が自分に対して感じている事が、なんとなく見えてしまうのだ。

ほのかには、物心ついたときからこの特殊な能力が備わっていた。相手が自分に対して抱いている感情を、なんとなく読み取れてしまうのである。幼い頃はそんな自分の能力を、得意になって使っていた。たが、大きくなるにつれ、この能力がしだいに厄介なものであることに、気付き始めたのだ。

人の心がわかってしまうというのは、実に淡ましいことしである。他人の闇色をうかがって、したいにあざとくなっていく(自分に気付いたとさき、ほのかは他人と接触することしから逃げるようになっていた。

中学生の頃までは学校も、衝ト、父も、ただただ怖かった。自分以外の人間がみんな、怖かたそれで6も自分の研究に没頭する父親はあまり娘に関心がないらしく、ほのかにとっては気楽な存在だった。

だが、ほのかカかにとって、この才はショックななが続いた。たったひとりの親友だと思ってい

原本 103 ページ・文字起こし草稿

ほのかはなは、漆雪とし-緒の高校に通うたのために、ひびひとしつつうランクを落としてで受験した。深妥にとては、きりきりの偏差値での受験だった。

ともに合格した時には、心から喜んだものだった。

それが、一月もしないうちに事態は一変した。深雪が、授業内容について行けなくなったのである。表面では笑いながら、日に日に深雪の態度が硬化していった。そそれから毎日争のもしろたった。>[あたし、一生懸命やってるのに:::ほのかは、苦勞しなくても平気なのに]深雪は毎日、心の中でほのかを、類婦と憎悪の全てで切り裂いた。ほのかには、それが背いほぼどよくわカかってしまうのだった。

ほのかの足は、しだいに学校から遠ざかっていった。

今、はのかは自分の足が震えているのを感じていた。

今の印口からは、あの頃の深雪と同じくらい危険な気が吹き出している。

だが、印口にそのことを知られてはいけない。裁然しとした態度を保とうと、ほのかは内面で必死に努力していた。

応接間のテーブルにトレーを置いて和印口に茶を出すと、ばほのかは自分の方から話を切り出し

原本 104 ページ・文字起こし草稿

「先生。私、来週には退学届を持って、父とそくちらにうかカカかかようと思います」

湯気のたつティーカップを支えた和印口の手が、びくんと動いた。
印口の対応に、ほはのかカも協えが顔に出た。

「そうか、お父さんと…で、学校やめいめてどうするの、君」]印口の身体から光み出ている気が、少しだけ変化した。これは不安の気だ。

「ですかカから、先生。今日はもうこれでお引き取りになってください… はのかの額には、脂汗が浮かんできた。気分は最悪である。

「いや、しかしだね。君のように成績優秀な子をだね…」

この者カから現在までの学校での出来事が、ほのかの頭の中を断片的に流れて行った。印口としては、なんとしてでもほのかの担人でありたかった。だから、退学すると言い出したほのかを引き止めようと、和懸命な説得を続けている。

口調たけいは、熱心な教師を演じているのだ。

えたカ、その中身は違う。ほのかには、それが何であるかわかっていた。

「で、でも、私…が、学校に行かなくても、勉強はできます。もっと楽しいことだって、友たちだって…|ほのかはあまりの気分の悪さに、実際の状況を判断できなくなっていた。気付いた時には

原本 105 ページ・文字起こし草稿

印口の大さきな手が、ほのかの細い肩をわしづかみにした。

「リルーぶ4ぼく

「痩せてんえれ寂しいんたろう3僕たちは、仲良くやれると思うんだけど]上口の悪臭のする分厚い唇が、ほはのかに触れようとしていた。

ほのかはそれを満身の力で押しのけて、叫んだ。

「私は、和印口先生と付き合いたいなんて、一度も思ったことはないわ。保健室で先生に着替えをのぞかれた時だって、何も悪いことしてないワケじゃない!全部、先生が勝手に作り出した幻想よっ」

印口の表情がこわばった。時間の流れが止まってしまったかのように、印口のすべての生學的な動きが止まった。そして、教師の凍ら表情が消えを2血が引いて青白い顔になった印口は一骨のち、肩を吊り上げ稀のような形村になったるとなして急に教師の言葉で、ほのかに向かって礼鳴り始ゆめた

「なっとなっとな、なっ、なななで、きみさみさきみ、きみはっ。ははっ、僕はれ教師として登いぶ」Ooご=!っ口半がボー守った生徒校拒否の問題児を見舞いに來ただいなんだいいか、天城ほのか!君は僕が受け持-え信のなかでも、最悪に最低な問題児なんえる」

原本 106 ページ・文字起こし草稿

一せ、先生?・はおしぐちつばを吐き散らして、印口は立ち上がった。

ぼくぐうぜんもくげき[成績がいい問題児ってのは、まったく手に負えない!!!僕は保健室で偶然、目撃してしまったんだからな。このことはきっちり校長にも報告させてもらうよっぎぎじよう.向口は言うが早いか、逃げ帰るようにるその場を去って行った。逆上し顔を真っ赤に染めて、聞あ*天城研究所を後にした。

けんまくとつつぜんひようへん、できようき、るその見鞭と突然の秒変ぶりに、ほのかは狂気を感じていた。

かどん

「まったく.....あんな不良な生徒は、見たことがない。校長だ、校長に直談判だ。天城ほのかが学校の保健記で、教師に対して色目を使っていたのを。教師をたぶらかそうとしたのを、絶だまは知っているんだぞ!...それを、黙っててやったというのに!!!天城研究所から去ってい(く教師は、自分がいかにこの当代きっての大問題児に対して、我慢つぞうし努力したかを、頭の中で揚造していた。

印口が去った後ほはのかは、べたりとるの場に腰を下ろしてしまった。艶が去った後のような穀めきさが、家の中を満たしていた。

足尊に力が入らなかった。腰が抜けてしまったのかもしれない。

昔からそうだった。

原本 107 ページ・文字起こし草稿

まったのだ。うかつにも、あんな上男の前でだ。選ほのかには、印口がやって来たときから、彼が身にまとっている淫靡な気を感じていた。るそるれは、自分に向けて放たれた独褻なに気だった。これとまったく同じ気を、以前学校の保健符で感じとことしがある。るそれは保健室で破れた制服を着替えていた時だった。

印口がのぞきをしていることに気付いたほのかは、保健室のベッドでふとんを人彼って許えていた。ただじつと、自分の方を見つめて淫靡な気を放っている印口が怖かった。

印口はその目で、ほのかを犯していたのだ。!とが、今日の紗変した和印口も、心底恐ろしかった。

やはりこの力のことは誰にも言うまい。友だちにも、父親にも言うてはいけないことなのだ。

ほのかは強く感じていた。

何よりも自分の力が怖かった。そしてこの力を他人に知られるのは、もっと怖かった。自分は他人の考えている事がわかる、「サトリの妖怪」と一緒なのだ。4怖かった。もう誰も信じたくなかった。それをそれでも人恋しくて、ほはのかは泣いた。もうすぐ味衣がやって来るだろう。それだけが心の支えだった。も床衣は、ほのかに対して決して偽ることのをない憧れと信頼を、いつつでもぶっつけてくれるのままのかをすがって生きている麻衣が、ほのかは愛しかった。

原本 108 ページ・文字起こし草稿

「……味衣、床衣。早く来てよお、麻衣い」

味衣を求めて、ほのかは壮き崩れた。

はのかの家に麻衣が到着したのは、るをの日の夜だった。時刻は九時を回っているまだ父親の天城埋土も、帰ってきてはいない。ほのかは、ようやく人昼間の印口のショックから立ち直りかけていた頃である。

麻衣は、小さい目に小さいの小作りな顔の少女だ。どちらかと言えば地味な穀立ちの少女で、少し対人恐怖症の気がある。人前に立つと、叱張してどもってしまう。それも理由となっていじめられ、学校に行かなくなった。

放衣が登棒しなくなったのには、もうひとつ大きな理由がある。それは、麻衣の極端な競包体質である。

静電気を帯びやすい人間というのは、空気が索燥する冬など大変で、灯手で金属のドアノブなどに触れない。麻衣の帯電体質はその極端に強いもので、家の中でも其夏でも常に手袋を外せないのだ。

味衣は一年中、重装備でいなければならなかった。小学校も中学も、麻衣には辛い思い出にしかかならなかったのである。

小さいころはあまり自分の体質に気付いていなかったが、授業でプールに入ったとき了器りゆF

原本 109 ページ・文字起こし草稿

まりのかは初めて麻衣と出会ったとき、麻衣は極度の対人恐怖症だった。もどかしいくらい、人とししゃべるこしとが困難だった。

天城心理学研究所には、選配した麻衣の両親の勤めて、去年の春頃から通うようになっていた。麻衣しとほのかはしだいに仲良くなったのは、ほのかは余りのない麻衣の心を素直に感じ取れたからだだった。

くわえて、ほのかだけが麻衣の帯電体質に、鈍感だったせいもある。ほのかは衣電気には色かった。

まだ初秋だというのに、麻衣は相変わらず重装備だった。帽子をかぶった額にはすっかり和をかいている。

麻衣は、いつも愛用の手袋をはめゆめた手に、一枚のちらしを握り締めていた。興奮気味にはのそのちらしの]っを見せてくれたと。

あのあの、ほんとにほんとに、めっちゃくちゃカッコイイ人だったんてす。デモンストレーションに歌ってくれたのもよかったし、今度は絶対はのかさきん行きさましレル人人見知り激しく、いつも物静かな麻衣が、形しく瑞区していた柔らかそうなねこっ手カドよんぴょん列んでいる。るその度に静電気がバチハチいっていき

原本 110 ページ・文字起こし草稿

Nrrトkl

「ふうん、ティーチャーっていうの2?3?ロックバンド2の3もを、を称衣が遅れて来たのは、これのせいらしい。麻衣の家は西武新宿線のS駅である。ほのかカの家へ来るためには、新宿で山手線に乗り換えなければならない。

西武新望駅から、JR新宿駅へは徒歩二分ほど。その途中の路上で、たまにアマチュアミュージシャンが演奏していることもある。

麻衣は、丁度そんなアマチュアミュージシャンに出くわしたのだ。

ティーチャーというのは、ポポボーカルの名前だという。もうすぐ行われるライブの宣伝のため、路上でデモンストレーションしていたらしい。

一体どうしたの?・麻衣ちゃんがロックだなんて珍しいじゃない]はのかは皮肉っぽく言った。

-う、歌声がね、すごかったんです。で、あたしにちらしをくれた人はマネージャーさんなのだそうで。その人がね、とってもカッコ良くてやさきしかったんです。あたし、男の人とあんなによしゃべりできたのって、生まれて初めてかもしれない」

麻衣はやたらと、はしゃいでいた。いつものおおどおどした口調も、ほとんどなない。

(のかかが選細い思いをして困っていたのも知らず、麻衣はあの電話の後からずっと、.チャーとやらの和歌に聞き入っていたのだ。ほのかがあれば印口に苦勞していたしさに、麻衣は、見ず知らずのかっこいいマネージャーとやややややらし、楽し(やっていたのだ。

原本 112 ページ・文字起こし草稿

きのしんらい和N、つつ)-}し)っしつい昨日までは、ほのかにしか持っていなかった信頼の気が見ず知らずの他人に対し放れているのを、ほのかかかを感じていえ。・まのかにしかなくなつていなかった麻衣に、新しい友だちができようとしている&。そんのにしがほのかの頭の中に浮かんで消えたと、ほのかはなんだか急に、自分が情けなくなってきた。それで、つい麻本にあたりまはらしてしまったのかもしれない。

「蜂くなるっていうなら、電話でもしてくれればいいのに」

舞い上がっておしゃべりを続けている麻衣に、ほのかは冷たく言った。

「こっちはね、毎日麻衣ちゃんのことばかり、見てあげてるワケじゃないんだし。るそういう身がつてめいわく朋手さって、他人には迷惑になるんだだよ。そんなんだから、いじめられちゃうんだよ]麻が、はつとしたようにほのかから顔ををむけたれ。自分が舞い上がっていたことに気付いて了項ずかし(なったのた。そをそれに、突然意地悪を言い出したばはのかか、とても怖かった。

加のように難っていたほのかが突然、まったく知らない人になってしまったようで、視線を合わせていられなかった。

ーカか気付いたたときには、麻衣の心から明るい気持ちは消えてしまつてと。暗く酸んだきますい流黒か、ふたりの間を埋めていた。

原本 113 ページ・文字起こし草稿

『会人人nnj、'1/(一:j|一一_玉尺衣はますます、かたくなになって
でいた。ほのかは、麻衣が泊まっていくものだと思っていたので、
大城博士に答えた。

「康衣ちゃん、今日はうちに泊まってく(から:.....あとでお父さん、
麻衣ちゃんの家)に電話してももらっていいでしょ|yyうすでいvのえた
カ力麻衣は薄手のカーディガンに手を伸ばすと、帰る準備を始め出
した。

一芝lvいいえZ。あ、あたし、今日は帰りります。お、おお、お母
さんこ、タクン一代もらってまふるふるしと首を横に振ると、麻衣
はうつもをいたまま席をたった。

時間は十時を回っていた。

ほのかは玄関先まで送っていったが、麻衣はうつもいたまま最後ま
でて痢を上げけな力かったじゃま[じゃ、さ、さきよなたなら。ああ、
よ邪魔しました」

「...気をつけてねなね:....」須天城研究所の前の道で、空さきのタク
シーは、すぐに捕まえることができた。徹玉を乗せたタクシーが、走
り去って行く3人け意地悪をってしまったことを、ほのかは心から悔
やんでいた。麻衣はいつもとノえいけり意一悪言euやこまっゴメン
ネへ2をいう炎わらは心でほのかにすがりついてさきたのにいなのに
人今日のばpueria

原本 114 ページ・文字起こし草稿

たった四文字の言葉が簡単には言えなかった。

まいあまぎその翌日から、麻衣はあまり天城心理学研究所へは、来
なくなった。

第6章

原本 115 ページ・文字起こし草稿

第六章仮面都市逆答すぐ新学期に入ってからというもの、トオルはなぜか体調が優れな力かった。

はっきりどこが悪いというわけではないのだが、なんとなく(く気分が晴れない。それほほど強いものではないが、時々耳鳴りが止まらなくなるのだ。

朝はまだいい。学校に到着して昼が近づくにつれ、なんだかブルーな気持ちになってしまう日々が続いていた。

おれ[俺、それってマタニティーブルーってやつっなんじゃないかしと思うぞ」

oO入ゞy」\ \$さでてんじよう=\\>で放課後。今日は平日だが、槻舎の天井の吹き替え掃除があるというので、五時限目で授業も終わっている。

謝中グくえいじに、からだびだ弱り間際のトオルが映二|に教室で、自分の身体の不調について話していると、クラスーお調

原本 116 ページ・文字起こし草稿

子者の誠がふたりの間に割り込んできれ。

「誰の子だ?え、誰のって大のおふざけにのって、映二もトオルの肩に腕を回す[トオルは美人だからなあ、モテるのよ]」

「俺は、男だ1っ」

映二のジョークに、るその時教室に放っていた鏡子と朝美も、笑いの輪に入って来た。朝美は鏡子と仲が良いクラスメートの女の子だ。小さくてか細くて、小学生のように見える。

「くすくすっ。トオルツくん、やるうう[[[キョーコちゃんっー鏡子が笑いをこらえながら言った。当然、映二は鼻の下が伸びている。相変わらず鏡子ひとすじな奴なのだ。

なに、パーなことやってんのよ」

朝類も細い目を一層細めで、トオルをからかうように笑った。

きゃあっ。んふたりができでてでるって、ホントなんだーソ23・ 人年の器幅体召部のホーパイもあん彰美は、細く(て小さ(て本当に小学生みたいだ。、にはっ(ーたがマオみたいな人憎まれDDを呂くのも和8癌。多分、口が負いするタイプ9の女の子をんだ

原本 117 ページ・文字起こし草稿

3ントによいルル(んし映二(んっで(で(よ(」:いう装しいことは早く教えてくれルくりーけんめいぺんめい上其に受けた指の鏡子に、映二はあたふたして一生懸命人弁明しようとする。こうなると、まるめなおとまんざいてで嶋当りのカケヒキのようだ。

(いいいいOばく[人のミ3ショータンてしょは、やめでてよキョーコちゃん。僕はね、僕が本当に好きなのは、キョーコちゃん……君なんだ1っほんねよく3本音を多分に含んで、映二が叫んだ。だが、鏡子は案外ケロツとしている。

「そうなの2う2・」

けっこう中[の方は結構マジなのに、鏡子はニユニコしてジョークだと思っっているようだた。

[なーんだ、つまんなをない」

なんだ、るそれは。

[だって、自分の彼氏は絶対フツーじゃない方がいいもん。あたし、フツーの人ってつまんなきんだんいと思う。ミュータントの人彼氏と禁断の愛に身を焦がすなんて、ずっとセンセーショナルでcaマンチックよねなねーっー映二、トオル、誠は、目を見開いて鏡子を

見つめた。ちょっし信じられをいものを見てしまった時の反応だ。
鏡子がこの問、ミュータントを信じていると言っていたのも、本和
気だったの

原本 118 ページ・文字起こし草稿

かもしれなかった。iiくまくうっでも、ありがとう、映二くん。君の
告白は嬉しかったぞを。この胸にシカかと受け止めた」

「キョーコちゃんっ3・」

意外なりアクションだった。青難この展開は、もしかするともしか
するかもしれない。映二は目をきらきら細かせて、鏡子の次の言葉
を待っている。

「けどね。私、まだひとりの人とお付き合いするとか、彼が欲しい
っていう気はないの。たとから、映二くんきえよければ、もっと
友情を深めよう」

女々しいところのない、きっぱりした気持ちのよい返事だった。こ
れには映二も脱帽せざるを得ないだろう。側で聞いていたトオルた
ちだって、拍手したい気分だ。

[キョーコちゃんー鏡子は、映二に右手を差し出す。ふたりはがっち
り提手した。

「と、いいいうわけで。今日の帰り新宿に寄ろうと思うんだけど、
一緒に行かないっう」

鏡子は映二だけでなく、朝美や誠にも誘いをかけている。

{新宿って、今日なんかあるの2う1:-邊はねな、新宿にある『ヘブン』
っそて店で、来週ライブがあつてねぬね。どうやら、林物のミミュ
ータントが出演するかもしれたなまいてでウリワサなの」

、いは1、0.taatae:3ンーijjr7

原本 119 ページ・文字起こし草稿

-和の0/、|L。、うん。だから、をそれを確かめようと思って。情報通の映二くんなら、きっと興味あんし思ったんだ。すごいよね、どんなミュータントなんだろうえろ。日本にもついにXIMENみたいな組織が出来るのかもしれないじゃない]鏡子の興商はトオルたちにも伝わってきた。ずばり指摘されたとありだったのもあって、喚二は頭をかきながら笑って言っとた。

「うん、行くよ。なあ、トオル、お前も行くだろう」

おれじゃ

「えっ俺?俺はいいよ。ふたりの邪魔だろう。それを、俺はミュータントとかって、別に好きじゃないし——やだわ、変に気をよまわさないでよ。そんなこと言われちゃうなら、映二くんとは行かないわ。

そのかわりトオルくん、一緒に付き合ってねううで)い鏡子はトオルの腕に手を回す。白い肌の感触にトオルはドキッとした。

だが、トオルははっきり言って新宿へ(行く気分ではなかった。相変わらず攻鳴りがしているし、気分も優れない。

原本 120 ページ・文字起こし草稿

んじゅゆ。

「だけど、最近新宿って、アブナイっていうじゃん]そんな風に言ってみた。近ごろ、新宿あたりでは乱闘事件や暴力団抗争が相次いでいるのを、トオルたちはみんな二ニュースで知っているのだ。

あまのがわ、SE\新宿は大ノル高校から4そんなに遠くはないが学校帰りに彼らが遊びに行くのなら、閑谷よりも渋谷や品川だ。

けいいつしよ

「をれなら余計にたくさんづで行った方が安全ってコトじゃない。ね、一緒に行こうよ、トオルくんあきみまことじゅゆ}~いい通下へ

い朝美と誠は、塾があるのでしと肛っている。今年の春、高校入学したばかりでまた受験までは速いが、整通いをしている生徒は結構いるらしい。

「トオルう。頼むもよ、一緒に行ってくれよ」

映-デが情けない声でトオルに頼む。

.....ううん、しょうがないあがまり気閑りはしないが、映二のためだ。しかたなく、トオルも付き合うことしになったのだ

原本 121 ページ・文字起こし草稿

「なんだあ、企然平気じゃん」

駅前広場にはピエロの格好をした外人が五人、パフォーマンスとマジックを紹り広げてる側にいる女の子は音大生風で、ビオラを演奏し、憐のアコーディオンの男性ばたエットを奏でていた。、選とし湘妙のテュカ、5人人人とて人kdittまえた昼間だどもの。あ、あれなんかスツ鏡子は激安カメラショップに挟まれた、靴屋の前数、【えた朝屋の前で立ち止まった。渡しい色彩のロングブーツ各種がか、ババーゲン中だ。さっそく買っている。

あちこちのテナントに目を克われながら、トオル、映二、鏡子は目的の「ヘヘブン」を探すことにしたな。番地は新宿区歌舞伎町丁目となっていていい。西武新宿の駅ビル、ペペの横にあるアメリカンバルバードの前を通って、身へし進んでいった。夜には若いコールガールが立つこの辺も、こんな真つ昼間には人通り自体がえい

『え|一つとを、この辺り.....だしと思うんだけどなあこ』

それでも姫い路地に入るとし、急に街全体が汚れた党囲気てで該れていた。トオルたちは符の裏の顔に触れたような気がした。

原本 122 ページ・文字起こし草稿

「あい、映二。あっちの道を行こう」

細い路地の向こうで、ケンカしている四~五人の少年たちの姿が見えた。トオツたちは輝町りしてでも避けようとしたのだ。鏡子をつれて乱闘にでもなったら、トオルと映二だけでは絶頂に守りきれないただだろう。トオルも映二もケンカの腕は、からっきしなのだ。

用心しながら進トオルたちらだったが、路地裏には何人かのグループがたむろしているのが目についた。新宿が物騒になっているというのは、事実らしかった。

「[:.....:あ!あつたわ、あれ『ヘブン』よ]それは、元ラブホテルだったボロいビルだった。建物の壁面にはひび割れが、かなりきてい正面の入り口になっている部分には、シャッターがおおおり、木片が打ち付けられている。るの出入り口は、もう何年も閉鎖されたままのようだった。

建物の反対側に回ってみると、枯れた葛の絡まった格子扉があった。序は閉ざされ、手大さの和才板が下がっている。CLOSEDの文字が新しいところを見ると、現在の通用門はこっち格子扉の向こうには、地下へと降りて行く細い坦旋状の階段が見える。どだどうやら『ヘブン』

はこの噂なのだろう。

原本 123 ページ・文字起こし草稿

ev人レル4/ei,ifルルpkレレ仁和(4,有飛のAムるな2てと[にmj肝[4Leに。

ている8らしく、1か6:しJys『ルー1内側に錠が下ろさきれ-掲中はわかつたんだし、来週のテーブルはっ半日は休みなのかもしれない。

「うん、また三人で絶対来ようね」よれけち人4ーお、航も1)2・また1ー1・はまはたしても、トオレは衝にご放sしLoゞSS\は、でかななれい疾でしまつたけがやっぱりとへり新宿を好ばれない。いくら、昼間はそれほど頂い街んもう-肥来たいという穫に新宿を好きにはなれなかった。iiしドーツかやその時だった。

格子扉を前して>」>い前にしてたたずんでいた三人が、新答駅へ向カ
OO、つ上塊へ記.つの竹二ーなる5い、まん0半科な大阪人が半こて
きた法話で放し和信和和ii庄もあらんのかいながばしや124エル人0人、
=玉esトー脱そこにひとりの少年が立っていれ、いったい、いつのま
に現れたのたろう。悦扉に司肝について、『へへブン』の中を逢っ
ているようだ。

やけに存在感めあるその少年ははトオルたちとしさして変わらな
い年内に見える均寺、光い上系のノースリーブに、数え切れないば
ほどせのついたズタポポロpのオーバー*1ルをりりなく(着こなしてい
る。

原本 124 ページ・文字起こし草稿

みよう衣愛とうしろのひと房だけが長い、変わったヘアスタイルを
している。頭には妙な形のへヘアバンドをつけていた。ヘアバンド
の両側には耳当てが、ぶぶらさかっているしんek少年は、わざと無
視するかのようにトオルたち三人には目もくれず、距をかえして新
室駅とは反対方向へ歩いて行こうとしていた。が、よふと後ろを振
り向いたとき、トオルと視線かあけわ険しい目だった。

きびひおよる少年のものとは思えない、厳しさを秘めていた。トオ
ルはなは、少年の目から視線を自分カから外すことしができたなかつ
た。

いつしトオルと少年の間に、小さなつつもじ風が起こる。一員の後、
少年は何事もなかったかのようにるの場を立ち去っていった。

トオルよはなぜか、その少年のつととバ無性にここつゝい>seoえい
じきようこのカ無性に気になって、仕方がなかった。映二と鏡子が
声2立ち去る少年の後ろ姿に、しばらくの間、身じろぎひしとっでき
ずに見入ったまトオルの耳鳴りは、をの日からさらにひびどくなつ
た。

第七章 ドラッグボイス

原本 126 ページ・文字起こし草稿

第七章ドラッグボイスえいじきようこしんじゅゆく映二と鏡子は、新奏駅新南口で待ち合わせをしていた。ここは、スカイライナーや特急のホームが近く、あまり混雑しないので待ち合わせには最適なのだ。今日は、鏡子が待ちに待った[ヘブン]のライブの日である。ウワサどおりミュタントが現れるのを期待して、鏡子と映二の胸は弾んでいた。

ートオルく{くん、来れなくて残念だったねね本当は、トオルも来るはずだったのだ。だが、相変わらず耳鳴りがひどいといって、今日は不参加になってしまった。すま映二はトオルの家によって来たのだが、トオルの開親も医者へ行くように勧めていたところだった。これでは、無理やり連出すとというのも不可能だった。

原本 127 ページ・文字起こし草稿

「今日のライブが終わったらふたりで、トオルツくんの家にお見舞いに行ってああっそいがのをどうかしら2?・|銚子の優しい言葉に、映二は大きくなずいて見せれた。

新南口で待ち合わせた映二と鏡子は、のミネの中のアーケード街を通り抜けて、】{ヘブン】のある歌舞伎町(と急いだ。

いようよふんいさきこの日、歌舞伎町は異様雰囲気包まよれていた。

少年少女たちは【ヘブン】を目指し、続々と集結する。街のあちこちではブラックローセスやニューエストパワーなど一連のグループに所属する少年たちが、数人ずつたもろしていいえ彼らの中にはまだ中学生らしい者も見える。少年たちの間を走っているところを見ると、伝令係をやっているのだろう。

今日の王第伏町に先日トオルと映二と鏡子が来たときとは、雰囲気
がはまったく違っていた。

あのときにはない緊張感に歌舞伎町全体が覆われていた。

「ヘヘブン」の入り口にある薄のまる格子語の人には、ブラックロー
ゼスのメンバーが総出で講天に当たっている。格子話にもたれ掛かっ
て入場客の人員整理をしているのは、リーダーの1||

原本 128 ページ・文字起こし草稿

タクタレスだった0和をてききしゆめち表以してasなこれ>>」いゝ
oO,p/,クタクルス4すけるように、強面の背の高い少年たちが寄り添
}ている間再を光誕ri、入口こ」こ>)人PDj(、ゆ人たちの渋情はかたい。
だが、クッスだけはいつもの余裕に満ちたほは笑みを沢カーでトー
トー=よブラックロービゼスが主催する、ティーチャーの初めてのラ
イブの日であるクルス力人いいゆ\じい>s」Nvいつs凡らうよい(よい
o。人金えは先日クルスに処畑計則したこのライブを、邪農したいと
思っている奴らは少なくい例え4錠『ソフールい・1を人われいたミシ
シッピーなどじど、この機会にクルスの鼻をあかしてやりたいりし
席視号々と視:ているに交いない、。

いいぶさきもちもよういきつす半誰、クルスは薄圭伝町各所にも偵
察部隊を配備し、定時連絡を取らせている。クルスの余裕のはは芝
みは、問到きに裏付けされたものだった。

「今日は、際たちブラックローゼスが主催のライブにようこる。
最後まで楽しんでくれ」

いじきょうつこそんなタルスxの械を通って、映二と鏡子は他の客た
ちと共に『ヘブン』の階段を降りてい消xの艇やかで落ち着いた様子
が、ブッラブラックロー1せせスの9のメンバーたちに安d克を上えて
いたた。少ルスは不思議な異だつょん。暴力団をも恐れさせる和殺
気し成圧感を持ち合わせていたがを、どこか癒しみやすさがある。

ブラックロービスに集う少年たちは、皆クルスに憧れていた。そ
れは他のりりグループ9リークタ

原本 129 ページ・文字起こし草稿

|。

一にはやっかまれ、嫌われる理由にもなっていた。

クルスの前に麻衣が姿を現したのは、ライブが始まる五分ほど前だった。クッスはるの顔に見覚えがあった。氷家はシルメスの条のざいお0ない少女だった。そのことが、余計に麻衣を覚えている要因と2つでいえ

「やああ、この間路上で会ったね。来てくれたんだ。ありがとう」

「あ、あ、あのう……はは、は、はい」人人。

天気を振り紅って、請衣は今日ひとりで歌舞伝町にやって来た。本当は、とても選幼かつし新容は性かったのではのかについて来て欲しかったのだが、先週あんな別れ方をしでて以来なんとなく話しづらくなっていた。電話もできずに、今日が来てしまったのだった。

しかし、ひとりでも来た甲斐があった。クルスは自分のことしを覚えていてくれたのだ。

もしかしたら、あの時のボーカルの人も、自分のことを覚えていてくれるかもしれない。そるのう考えただけで、胸がドキドキした。麻衣にはそれが、何にも増して心の底から嬉しかった。

ド今日『【ヘブン】』を訪れたことで、ほはのかのことをすっかり忘れてしまうほどに、あよれる宮びsmを感じていた。

|せまらせん虹工し谷子が堆い湯天開度を降り9て行くとほすぐに地下は小さなライブスポットになって|人

原本 130 ページ・文字起こし草稿

「思ったより、狭いんだね。キョーコちゃん」

「ライブハウスって、こんなものじゃない2」

多子は映二の腕を取って、奥へと入っていく。中央の一段上がったステージには、ティーチャーがいた。会場内はオールスタンディングで、観客は皆立っている。映二と鏡子も、その中に混ざってライブの開始を待っていたと。本会場内の周りには、釦き出しのコンクリート壁が囲んでいる。和狭い入り口の左側は、カウンター形式のパーになっていた。椅子はに五つしかない。

ステージの左右は、中二隊になっていて、スタッフがライトや機材を点検していた。

いつぱいもうすでに五十人ほどの客で、「『「へへブン」の中は一称になっていた。ドリンクの乗ったトレ4を抱えて客の間を移動しているのは、ズウズウだった。

スウズウはカウンターの中でドリンクをを用意している女性に、トレイを手渡した。

「役尋きん、身体大丈夫なの?つかったら休んでてい1ーんだたよ」

女は知畑だった。まだ像は多えでていないが、ティーチャーの初めてのライブらを弓低うとしいつでそできかなかったとた。

「がああたしだつてそて、クルスのために何かさせてでて欲しいのよこ」

[IT.]

原本 131 ページ・文字起こし草稿

「。やはり傷が痛ものだろう。鬼姫は痛々しい表情でて、えウズウにばば欠んだ。度胡のがば、命和懸けの恋だった。いつしゅんばくしゅかん突然会場内のライトが消えた。ぎざわついていた客たちが一骨しんとなったのち、折用と失声を上げる。まいい> \ 鏡子に引かれて映二は、ステージの近くまで寄って来ていた。麻衣はカウンターの近くでステージ上のティーチャーをじっと見つめている。

小さなスポットライトがステージの上を照らすと、マイクに向かってティーチャーが語り始

「今日はようこそを。テティーチャーです。今までは口コミだけでやってきてたんだけど、今日からブラックローゼスのバックアップで歌うことになりました」

会場内に、テティーチャーの声が流れた。マイクは、ティーチャーの指が鳴みすぎやターのメロディも拾っていた。

てんじよう。てんめつ左右の天井に下がった大きなライトが、点滅した。

ティーチャーの姿が、まばゆい光に包まれる。

人sい和導eiつ

「今日がその、記念すべき初ライブだ。俺の歌を聞きたい奴は、ブラックローゼスに…について来やがれーっ!!その時、観客の目の色が変わった。るをの表情が変わった。

.

原本 132 ページ・文字起こし草稿

かんせいieNティチャーが叫んだ。それを受けるように、歓声が上がった。ラティーチャーのその声は強烈だった。ティーチャーのギターのメロディに乗って、たったそれだけの言葉が『[ヘブン]』につか、玉集まった少年少女たちの泌を。がっちりと掴んでいたしんそこおどろいいくくss\、\しこれにはクルスも、心底驚かざるを得なかった。クルスの目の前で、観衆が変わってでいったとけんちよのだ。歌が始まると、るその現象はいつそう顕著になった。„はずけいれんきいぐう観沙はテラティーチャーから視線を外せなかった。ある者は手足に雇没を起こし、ある者は既せいYうず、声をあげた。興奏が渦を巻いていたおそ会場全体に、大きな波が起こっていた。興奮が、観客を襲っていた。

そのテンションは、明らかにテラティーチャーの歌声によって上りつめていった。

がくぜんクルスは間然としていた。

、4ふる、まるで強力な興奮剤を与えられたように、クルスの目の前で少年たちは身を漂わせ、もだふえているのだ。曲の合間に、ティチャーが叫んだ。

「おお前らがティチャーの歌を口ずさもかぎり、ブラックローズもお前たちの仲間ただ。このしんじゅゆくまちおれいつしよ新宿の街で、俺たちとし一緒に燃えようぜっ!」

興味が極度に達したのか、ティチャーの熱いパッションを感じた観替りの中には、社名しでていんぷ都もいる。異常な興奮が会場内を満たしていた。

それは、初めクルスによって意図されていた、熱征的ファンの肥了史しも必っている。ド伯人MM和>人MkんWWのりり條光りおいのり1だ2レレ(は人0ののドレ/し0ん和和グリ2。2リリ|ん

原本 133 ページ・文字起こし草稿

ilid7if凍に517の肥序だった。|32少年たちが必で反條しているのだ。倍修とした用性になん見用粗々と痛かせる者。勸衆の反応は、様々だった。

訟ク人麻衣は、体の奥から熱いものが込み上げて来るのを感じていた。朋は北立ちいつもより多最の放和鬼が走り、目の前で火花が散った。

ティチャーの歌に合わせて、入り口近くのカウンターでスイングしていたズウズウは、六んゆかふ声を上げた。その足がとしてつもない速ざさで、床を踏んでいる。あまりのスピードに中はばとしんだど見えない。

ようこえいじふる角子はというと、なぜか涙が止まらない。映二は、自分の体の謀えを両手で押さえつつも、とれれり、償に立つ鏡子の異常に興奮した様子に気付いていた。だが、映二|には彼女を見守る以外に、なすすべもなかった。

会場全体を見つめていたクルスも、るその異常な様子に興奮した。

「何だ……何が起きているんだリリクス自身には、ティイーチャーの歌は影響を及ぼさなかったようだった。たがが、この事態を引き起こしているのがティーチャーの声であることにクルスは気付いていた。

[すばらしい……すばらしいぴぞ、テティーチャー…… |とつげぜん活然パクチクが鳴られ、ガラスピンの割れる音がした。クルスはるその音で、はっと折に

原本 134 ページ・文字起こし草稿

ルル-7武装した少年たちの集団が、会場内になだれ込んで来るのがクルスにも見え入り口付折で警備にあたっていたブラックローゼスの少年たちが、つぎつぎとし投げ込まれてくる。戦いの集団の中央で指示を出しているのは、ミシシッピーのリーダー政夢だった。

先日、鬼姫をめぐってクルスにやられた傷のせいだろう、右上半身に血のにじんだ包帯をぐるぐる巻いて体を固定していた。手には人鉄の棒まで巻きつけている。

[何が、ブラックローゼスだ。ああ前らなんぎざぎざ、このミシンシッピーが町つつつぷぶしたるぜーっ。覚悟しいや1!出て来い、鬼姫1っ!」

聞交か引き連れてきたのは、今度は五人だけではない。ミシシッピーの全勢力を上げての猛攻だった。三十人以上はいる。

aita4.も人人を峰科の下2<9もいしてへって床交がいた。8逃げ惑うばかりだ。その中には、映二と鏡子、そして/

「知姫|、どこだ1ーっ2」

徐不は知人どseなんaeる呆然とカウンターに立っていた知姫の姿を見つけると、人以押-ぴびっ、ヒ人イーっう。節上妙さん、光げてでてよ、逃げでてでよよ」

原本 136 ページ・文字起こし草稿

eス2党いからダグa上4る。ポにひめンスリー人ブルブル許わせながらん4、知尋をかくまおうと必死だ。鬼尋は簡妙衝て和2おれ放相にパニックを起こしていた。2には目の前で起こり始めた事態にしばし絶句していた。よりによって、こんなHHに今日はプライーチャーの初めてのライブなのだ。

Manfきた.....そして、見たことしのない力に気付いた記念すべき出間を、合なしにCいんんそう思うと、クルスはたまらなかった。考える前に、身体が動いていた。クルスの頑客信の緒が切れたのだ。

おい-くる。

ミシシッピーのリーダー夏夢は狂ったように笑いながら、両用にくくりつけた鉄の入く無涯別に襲いかかり知姫を目指している。先日のあ礼参りのつもりもあるのだろう。処尋としクルスへの憎しみで、周りの状況など見えていないようだった。

ふいう[びしゃーびゃっひゃっつ。この前は不意打ちを食らったが、今日はをうはいかんぜ!なんせ、今日は助っ人に強い味方も、ついてるんじゃーっ|叫び声上がる中をかかき分けて、クルスは雅区だけに狙いをつけて近づいていった。和狂ったように若者たちを殴打しながら、鬼姫に向かって進む雅区の両骨から伸びた人鉄の棒を、クルスはわしづかみにしたと。

おどろひたい。まきようれつずつつ釣き振り向いた雅の額の中央めがけて、クルスが強烈な天光きを食りわせる石かが制れ

原本 137 ページ・文字起こし草稿

立ちつくしていた。

しかし、クルスは正夢の両有の武器を掴んだままである。とっくに意識は飛んでいる雅区の血にまみれた額めがけて、さらに打ち続ける。

がつんがつんと打たれる度に、血が弾け飛んだ。クルスの顔も血にまみれ、役気迫るものがある。すでに割れた額から、白いものが覗いていた。

我夢は、白目をもいたまま後ろにのけぞってぶっ倒れた。ドクドクと流れる血が、枯のようにり落ちて床に広がっていく。

「お前ら4、ライブを邪魔しやがって。これ以上怪我したくない奴も、関係ない如もん、とっとしとてから店で人やクルスの比声が合図こなったかのように、巻き込まれては怪我をすると、和洛たちはつきつきと『【へへブン】かんら逃げ出した。映二に引きずられるように、銃子もでの波れの中に紛れて行っ【へへブン】からあわてて逃げ出した若者たちは、クモの子を和散らすように新和の街へと散って

原本 138 ページ・文字起こし草稿

きようこえいじしんじゅく鏡子とし映二も、ようややや(く新宿駅まで走ってさきたところだった。

[「うぴーっ、とんだことになっちゃったねとえ一息をはずませながら、映二が、鏡子に言った。まだ胸がドキドキ鳴っている。

[「ふーっ、ひどい目に道った。やっぱり新宿って、ウワサどおりのところだね

「そをそうね。……でもミュータントに会えなかったの……ちょっと残り残念だったな。あの中にいたのかしら……、全然めわからなかったわ]鏡子は己で息をつきながら、後ろを振り返った。しかし、歌舞伝町の喧嘩はここまでは届いては来なかった。

まいこわこ麻衣だけは、逃げずにひとり『へブン]の入り口に立っていた。怖くて足がすくんで逃げ損なっていたのだが、るそれ以上にティーチャーの事が忘れられなかつた。

彼姫はズウズウに支えられて、カウンターの中から立ち上がった。その時、クルスの足元にがむ転がっている雅夢の目が、かっと見開かれた。

原本 139 ページ

「鬼姫一、ああ、あ、会いたかったぜえええ」

鬼姫の顔を掴み自分の口を押し付けた。そのままの態勢で、鬼姫の舌を思いっきり吸い上げた。その額から流れる血が、鬼姫の顔を真っ赤に染めてゆく。

「ん、んんんんんんん」

雅夢は吸い上げた鬼姫の舌を、引き抜く。血の帯が雅夢と鬼姫の口元から、宙を舞った。

「んがはあああ一、一つ一つ、――!!」

口中の中身をすべて吸い千切られた鬼姫は、悲鳴とも叫びともつかない音を、喉の奥から絞り出して床を転げ回った。そのまま、びくんとおおきく胸が跳ね上がったかと思うと、ぴくりとも動かなくなつて絶命した。

雅夢は口の中のものをぐちゃぐちゃと噛み碎くと、ごくりと飲み込んだ。組み合つて戦っていたミシシッピーとブラックローゼスの両メンバーたちから、すでに戦意は消えていた。

雅夢は笑っていた。その目の焦点は、どこにも合っていない。雅夢はもう、クルスを見てもいなかった。

「鬼姫一、鬼姫一、鬼姫一」

狂っていた。鬼姫の姿は、雅夢だけにしか見えていなかった。

「ヘブン」の入り口でたたずんでいた麻衣の横を、狂った雅夢を抱えたミシシッピーのメンバー

原本 140 ページ・文字起こし草稿

一たちが通り過ぎざて行つた。

[ヘブン』の中では、クルスとティーチャーが会場内の後始末をメンバーに命じていた。

向姫の死体の後始末の方法も、考えなければならない。クルスは頭が痛かった。

「もう、ミシシッピーはおおしまいだな」

ティーチャーは少しうんざりした顔でてつぶやいた。ズウズウは注しながら和鬼姫を黒いビニール袋で包んでいる&。

[「女ひとりのために、こんなことになっちまうなんてな[路夢は、本気で鬼姫に惚れていたからな。いつか、こんなことになるだろうとは思っていたそれがまさか今日だとしは思わなかったがと、クルスは付け加えた。

そんなよふたりの会話に、突然制り込んできた者があった。

[あんさんたち、本当に強いんやな」

問いたことしのない声の大阪弁が響いた。見覚えのない少年が、いつのまにかクルスとティーチャーの後ろに立っていた。

「ミシシッピーの奴らは、根性がないんやな。リーダーがやられたら、さっさと逃げ出してしもうた。もう事務所にも誰もおらへんわ」

原本 141 ページ・文字起こし草稿

初めてみる属のり、背の高い少年だった。頭には友な有味のヘアバンドをしでていん6び。

っ陰どだ?も前::・ :: 和な

「お前が、外落が言っていたミシシッピーの強力な助っ人かカ」

クルスの質問に、なんら悪びれずに少年はにこりと笑ったと。

じごうじとく

「人を引っ張る力がないんは、自業自得ちゅうもんやで。あんさん、クルスはんっていうたとたかカカ。

かつこええなあ、あんさんらの方が、よっぽほどおもしろそうや
や]にく、まどこか憎めない男である。しかも言うことは的を射て
いる。このおおらかさは、クルスにも共通しているびる。

ミ、oOsいいや[どうや、クルスはんわいをブラックローゼスの助っ
人に屋わへんか?わいは、ほんま役に立って-にの上な4自分の事を売
り込もしところをみると、かなり自信家なのたろう。クルスは乗り
気だが、ティーチャーは浮かない表情だ。

Nss、ftJれーふんふつ、気に入った。俺も、おもしろい奴は大好き
だよ」

ークルズスズ::ー何かを言いかけようとしたティーチャーに、クルス
が耳打ちする。

「他たちの、王国建設の萌のためだ」

人ブンエ・い上acチャーはそれで4も不満をうだった。カウンターの
奥の通路から、上の部屋へと消えて

原本 142 ページ・文字起こし草稿

ーあ前、なんて名だえう|劇のテンベスト|人ってましたとはばはか
り、少年がにやりと笑った。

「ヘブン」の入り口でざしばらくたたずんでいた麻衣は、キッと空を
了んだ。何かを決起した表尼を見せるしと、ふたたび『ヘブン』の
中へ入ってい(。

この日から、ブラックローゼスの一員になった麻衣は、毎日のよう
に新箱を訪れるようになそして、この日を境に、歌舞伝町に集う少
年グルハーブの力の均徹が用れた。ミシシッピーを壊洋させたブラッ
クローゼスの名は、一夜にして歌舞伝町を中心に新衛全体に起いて
いた。

ニューエストバパワーをはじめとする他のグループは武装を強化し
戦力を次え妖ゆめた。

歌舞伝町を中心にする少年たちの抗争劇が、新たなる局面を迎えたのたつれ。

第8章

原本 143 ページ・文字起こし草稿

覚醒の明間がむはいじんしんじゅくじゅう雅夢を廃人にしたクルスのウワサは、新宿中の少年たちの間に広まっていた。

クルス最強説にとりつかれた少年たちは、ブラックローゼスに入りたいと、連日『【ヘブン】』

目指して集まってきた。彼らのほとんどだが、中学生、高校生の少年少女であった。

雅夢をつぶされ、リーダーを失ったミシシッピーのメンバーたちは途方に暮れた。だが、有吾日には側のグループへと移るか、新宿から逃げ出すかのどちらかを選択した。ミシシッピーを名乗る少年グループは、新宿から完全に消滅したのだ。

ブグラブラックローゼスによる、ティーチャーのライブがよぶたたたび行われたのは、それかからたった数日後のことだっつ。

先日の騒ぎで中止になっていたティーチャーのライブが、改めて行われるとしあって、『ヘブ

原本 144 ページ・文字起こし草稿

ン]の周りには少年少女が大勢集まっていた。

れれっ・、。きんちよう。

歌舞伝町の少年たちに、ふたたび緊張の波が高まっていた。

ブラッタクローゼスのリーダー、タルスは「ヘブン」の周囲*および歌舞伝町一帯に、警備のための人中を配備する周到きざである。前回のライブはミシシッピーに邪左されたが、今回のらいが-)イブは誰にも邪訂させまいという、クルスの思惑だったと。

ばうかい11でそれに、ミシシッピーが月壊したことで、新宿におけるグループ間の血張が高まっている。

なんどき武力強化しておいて損はない。いつ何時、どこかのグループが襲ってこないとも、限らないの続々と店内に入って来る客を見て、クルスの顔に自信に満ちた笑みが浮かんでいた。

お[絶の考えが正しければ、ティーチャーには…… |クルスは頭の中に、ティチャーに対してある考えが持ち上がっていた。それは、長年の規だったと王国建設への道しるべでもあった。、ぜ、これから行われる今日のライブの結果いかんで、るその考えの是非がわかるはずだった会場内が少年たちらでいっぱいになるとし、照明が落とされた。ステージ上のテラティーチャーを恥こうこうらすスポットライトだけが、燈々と照らされている。

「ようこそ『へへブン』へ、俺がティチャーだ」

ティーチャーの指が弦を弾いて、ギターが鳴った。ライブが始まり、ラテラーチャーみあ吹り因

原本 145 ページ・文字起こし草稿

ティーチャーの声が流れると、るの現象はすぐに起こり始めた。観衆の目の動きが変化し、その表情が悦惚しなる。

「ブラックローゼスがあるかぎり、俺たちはひびひとつだ!さあ、いくぜーつーねつきよう会場全体が、あの日と同じ、言いようのない熱狂と興奮に包まよれていった。

まいからだステージの最前列にいた麻衣は、身体が信じられないほど熱くなっていくのを感じていた。

わ熱いものが体内にあふれ、何かが沸き上がろうとしているのを感じていた。

ひびぎの有禁えが止まらない。首の腰えが止まらなかった。

さそへ麻衣の身体は、ティーチャーの声に誘われ、高く高く上り詰めていく。るの勢いに耐え切れssい):カカえた・しか、ず、麻衣は思わず臣く目を閉じた。その目がカッと見開かれた瞬間、麻衣は自分が隙和飛んとたような錯覚に捕らわれた。

麻衣の身体から、放電が始まっていた。ティーチャーの歌声に反応して、全身から放電の火区を搬き散らしたのだった。

麻衣だけではない。他の少年たちも、身体が弾け8のような感覚を覚えていた。

麻衣和少年たちの変化を確認して、クルスはニヤツと笑った。ティーチャーの力を見つけ和出しええ自分に対する自信が、絶対のものになっていた。

原本 146 ページ・文字起こし草稿

せんざいうはつ[やはりな、あいつの声には潜在能力を誘発させる力があるんだ。やはり、そうだったんだ。奴を上手く利用すれば、この新宿を我が手に収める-とは、人簡単なことした|クルスはプラスーチャ1に、今回のライブでのセリフをあらかじめ指示しておいたのだ。クルスの目論みに気付いていないティーチャーは、妖うこともせずクルスの考えた新しい試みに協力すべく従ってでいた。

|なるほどねなね。あんさんの好きなのは、るそういう権力だったんか」

ーテンペストカカ」

いつのまに側に近づいて来たのか、クルスの騰にテンペストが立っていた。

テラテンペストもまれ不思議な前力を身につけた男だ。なにより不思議なのは、ティーチャーの声による衝導にまったく影響を受けていないところだった。

「ありゃあ、普通やないで。いったいどういいう能力なんややや？
みてみい如らの目え」

まさしく、るをうだ。今も聴衆は、ティーチャーの言葉を受けて命令どおりに動こうとしていんる。だが、隣にいるテンペストは平気な顔をしている。

「テンペスト。なぎ、お前にはあれが効かないのだと

「そをりゃ、あんさんかてでて同じやないか」Aiクルスズ自身前回のライブで少しほうとなったも9099。今日は和多拉ができたように判舌て

原本 147 ページ・文字起こし草稿

ティーチャーの奴、いつから、ああなんやっうう」

「ごく最近だ。三月前には、ああじゃなカかったんだが……あんな、ドラッグみたいな力。

えーだぜ』しんとうそう。テティーチャーの声は、まるでドラッグのように観衆に浸透していた。和観衆はその声に酔いしれている。

「ドラッグみたいな……か、まさきしくありゃあ、ドラッグボイスやな」

ーテンペスト、お前はいったい何者なんだ？・|おこみようーおつと、怒りなや。わいには生まれた時から、炒な力があつただけですわ。さしずめアメリカだったら、ミュータントとでも言われたかもしれん」

ブンペストが人きし指を立てで、くるく{ぶと空を回す。指先から生まれた風が、かまいたちきまのようにクルッスの前髪をひとすじ、断ち落とした。

にらクルスズはばは、テンペストを上馬みつけたまま動かなかった。鋭い視線がテンペストに欠き刺みつ-(つ{くくく……わわいは、あんさんのそんな用心深いところも大好きでっせ。IE思笛収。…、,わわい

原本 148 ページ・文字起こし草稿

と組んだらきつと、おもしろいことになりまっせ]テンペストは陰しい表情のクルスに向かって、ウインクを購った。打子抜けしたように、クルスの表情も崩れる。>|一ふふ、るそうか。奴もお前もミュータントなんだな。ハハハ、るそうか、るそうなんだをな]クルスの言葉に、テンペストは満面に笑みをたたえて応えた。ライブは最高棚に達しようとしているびる。

[よく、わかってまん。わてはあんさんに人多れてまんのや。絶対設切るような其似は、しやしまへんって|ふたりはティーチャーの歌を最後まで聞くまでもなく、カウンターの奥へと消えていった。

興の通路から【[【ヘブン]の上のホテルツへと階段を昇り、クルスの部屋へと向かう。

[へえ、ええ眺めややないか:::こら、ええんわ]」

「ここが、俺たちの夢の出発点だ」

クルスの部屋は最上階、八階のワンフロアを占めていた。下の部屋は章当に折り振ってブラックローをスの若い衆が寝起きしている。奏無しだったティーチャーも、いつのまにか必滞くりうにだっやたというee八階の窓からは、中途半端な高えのビルに混じって染みのように上広がる。葵舞令町り街か中

原本 149 ページ・文字起こし草稿

ふたりが洗つの話の沙teをすするただためにはなは、絶計りの口ケーションった。

ライブの終わった後の『ヘブン』で、ティーチャーはいつまでもやターをひいそてvえた。びをの側には、族衣や数人の少年少女たちが寄り集まっている。彼らは、ティーチャーに熱い眼差しを送っていた。

麻衣のその身体からは、まだ興礁から覚めないのか、バチバチとし火花が散っている。他の連中も同じことしだった。

麻衣はまだ中学生だが、今日はなやけに大人びた服に身を包んでいた。化粧も決して薄くはないたか真っ赤なルージュは、まだ麻衣には少し早過ぎたようだった。

握と同じように真っ赤なエナメルのビスチェとミニスカート。銀の鐘のアクセサリをじゃらじゃもら首や手に闊き付けている。瞭上まで包むもロングブーツまで真っ赤だ。

今までの麻衣と違うのは、るの手に手袋のガードがないことだった。ティーチャーの声を受けた麻衣は、力のコントロールを覚え始めたのだった。

麻衣はまだブラックローゼスに入ったばかりの新入りだが、初めからティーチャーの紫持者である。ティーチャーの側にいられるだけで、幸せなのだろう。ブラックローゼスのみんなに交じって、テラティーチャーと話をしている間も、耳まで真っ赤になっている。

その麻衣に、以前のか弱い印象はない。

原本 150 ページ・文字起こし草稿

「なねえ、信じられる?あたしが、こんなにスムーズにおしゃべりできるなんてでで、ウソみたい。

あなたの声を聞くと不思議に落ち着くの。今日もんねね、何かとしとてつもなく大きな力が、わたしの中に腺いてくるのがわかったの]ライブの興礁が冷めやらないといった様子で、麻衣が興奮気味にしゃべり続けているのを、テラティーチャーは静かにほほ笑んで聞いている。

ドレッドヘアでそんなふうにはほほは笑まれると、まるでイエス・キリストのようでもある。世界を認うために、人々に声をかける。麻衣にとっては、テティーチャーは正しく神だ。麻衣だけでなく、側に集まって来たミュータントにとっても、テティーチャーは神だった。

「あたし、ティーチャーのためなら何だってできる。あなたこそ、ブラックローゼスの神様な[ブラックローゼスのリーダーは、クルスだよ。俺じゃない。俺は、クルスの言われるままに歌うだけさ」

あまりほばほめられ過ぎて、少し困ったようにティーチャーは答えた。

違うわ、みんなわかってないだけなのよ。本当のリーダーはテラティーチャー、あななたよよよ。見て!あなたはこんなに素晴らしい力を、あたしにくれたのよっ」

原本 152 ページ・文字起こし草稿

ティーチャーを崇める麻衣やズウズウたちの目があまりに基供だったので、ティーチャーも6もそれ以上何も言わなかった。

麻衣の好意は明らかだった。だからティーチャーは、ただ、やさしく麻衣の頭をなでた。また中学生の麻衣は、ティーチャーの目には恋愛対象として映らなかったのだ。妹のように思えてたならなかった。

そのまま上へと上がって行っただが、クルスの姿はどこにもなかった。いつものようにティーチャーは、クルスの部屋のソファアアにごろりと転がった。

うたばこ天井が煙草の煙ですすけている。ティーチャーとクルスは古い友人だった。テティーチャーがまた学生時代、路上で歌っていた頃からの知り合いだ。もう八年になる。

クルスは自分の歌の、最初の理解者だった。人クルスは音から頭のいい奴だった。出会ったころにはすでに野望をいていた。いつか世界を手にしてみせると息港いていた。

ティーチャーは簿で、クルスは組織をつくって。やり方は違っていても、ふたりの砂はひとクルスはその人望と実力でブラックローゼスの仲間を集め、ここまで大きな組紙をつくりあ

原本 153 ページ・文字起こし草稿

人人1oririrトs。よよ、人がリークーとたつデウにじこのり信が…7・ -
さいつsv、尿衣が言ったことしを反独して、ティイーチャーは心の中
で笑った。ライイーイチチャ1しとしクルスの目的はひとつなのだ。
どちらが上でもなければ、下でもない。テティイーチャーはどるそう
信じていた。麻衣が、そんなことを言い出すまでは。

いつせきままだが、麻衣のひとつはティイーチャーの心の泉に、一
石を投じた。初めは聞き捨てられた波もんた紋だったのに、時が経
つにつれてしだいに大きくなっていく。

。いちれん人んたくしようy・ アムリよくし人[奴とし俺は一間攻生の
仲間だ。奴に人を引き付ける魅力があるように、他にも…。いや、し
かし…|ティイーチャーの中の波紋は、広がる一方だった。

和和の4Euつつのまに服つでてでしよなつたのだろう。ティイーチャー
が気付いたとしきには、辺りは疾に包まよまれでてでいた。空は重
く較い。

へなやずのうーガラにもなく、悩んじまったな。頭脳労働はクル
スの専門だったのに、公にはやっぱり則つでいるのが性に合う」

ーいいや、あお前こる神の力を持つ男」

真っ喚な部屋の中でぐ、ティイーチャーに語りかける害があつた
むた、聞いたことしのなをない低い対だつ

原本 154 ページ・文字起こし草稿

部屋には時折、近くのホテルのネオンの光が入って来るが、記の主
はそのネルエツしかMM

「だ、施だうこーないランバチーが身体を起こして問いただして4、
シンルエツトは正体を明かさなかなした、地航の底から響いて来る
ような、太く低い不気味な男の声だけが、テラティイーチャーの下元
で吐いた。

「お前に、本物の力を授けてやろう」

後ろを振り返ろうとしたティーチャーの頭を、圈い機械のような感觸の手が締め付けた。ものすごい力が、テティーチャーの両こめかみにかかる。

「うわあああああーっ」

頭が割れそうだった。

自分の叫び声を聞きながら、テティーチャーは気を失っていた。

ニューヨヨークにある『ボ選ばれし子らの学園]てでは、ジュビリーとウルヴァリンが出發準備に追われていた。

とはいっても、あわんてでて旅行の用意をしているのはメシユビリーの方で、ウルヴァリンはしっ(に終わらきせでて待っているのだった。

原本 155 ページ・文字起こし草稿

ジュビピリー。んWWんいいかげんにししけりLt2そんなにいろあい
があろ才っ(いく{泌曾ドド、ばないただろう。ここにこれじゃいつまで
たっても、昌本へ出發できなねなエび」

ウルヴァリンがいらいらするのも無理はない。

ジュビリーは旅行ケースの周りにありったけの荷物を積んで、あれを持っていこうかこれを持っていこうか、ずううーっと思んでいるのだ。...

「だって、この服だっておお気に入だし、このタオルだって持ってでいきたいよ。あ1ー.どうにかしてケースに収まってくれないかな
あああ、こいつよら」

バスタオルや軸はかきばるのだ。ジュビリーのケースはかなり大きいものだが、まわりに衝んだ荷物の半分入らないただろう。

そこにガンビットとローグが、よふたりの様子を覗きにきた。

[おオーおおー、あっちこっち、広げちゃって。大変だね、おふたりさん]

ガンビットは苦笑いだ。

「そうだジュビリー、これ公別な。土産は頼んだぜ」

パラブラを形どったソーブセットだった。たしかに女の子の旅行には、必需品かもしれない。

ーわーい、ソーブセットだ1。サンキュー、ガンビット」

[どうしておおおめえは、るそういう罪なことを……ローグはあきれたように、ガンビットをこづいた。これ以上選択する荷物を増やすのは、ウ

原本 156 ページ・文字起こし草稿

ルウヴァリンのいらいらを増やすことにしかない。

「ガンビットー!・ウルヴァリンが注きそうな顔で窓っていた。

「くっくくくっ。いや、ついね。ウルヴァリンの困った顔が見たかったんだよ]

「ひどい人ね……」

ローグはガンビットの腕をつねった。そのとき、プロフェッサーXも、ウルヴァリンを探して、ジュビリーの部屋へやってきた。

[ここにいたのかカカ、ウルヴァリン。実は、日本に出掛けるついでに、中国の湖南洛によって気功法に関する研究資料を受け取ってきてもらいたいのだが[中国が……引き受けたぜ!]

「少し遠いんだが、これが現地の地図と住所だ。先方へはもう連絡済みた。権威ある気功の先生なので、失礼のないように行ってくれたまえ]結局、ジュビリーの荷物整理に手間どり、二人が出掛けたのはそれから三日後の朝であつと。

第9章

原本 158 ページ・文字起こし草稿

第九章少年抗争激化ようやく暑かった夏が終わり、東京にも本格的な秋の兆しが訪れたころ。

新宿の少年グループ抗争もまた、新たな局面を迎えようとしていた。

クルス率いるブラックローゼスの勢いは、止まるところを知らなかった。新戦力の地強で、日頑しに人数も増えその勢力は拡大する一方であった。

今も麻衣は、ブラックローゼスのミュータント仲間、イブとダダーンを連れて新宿駅構内にいた。他のグループの中にミュータントがいるという情報を手に入れ、目的の少年たちを追ってきたのだった。

それがミュータントならば、力づくでも『ヘブン』に連れていくこしとが凡交たちの仕殖だった。誠衣は獲物を狩る肉食動物のように、嬉々とししていた。

原本 159 ページ・文字起こし草稿

たpdi:1|:目禁は四人の少年だった。中のひとりだけ、やたら耳が長かった。どん2ざきいな者をも間き取るミュータント能力を持っているらしい。をおんどが、新宿駅西口の改札わきに追い詰められた少年は、外の騒音に気を取られててイブがカ林りこんだのに気付かなかった。

「OK、麻衣」なイブはスレンダーな美少女だった。素早い動きで目標の行く手に、立ちはだかった。その措先から秋を出るうとしたが、うまくいかなかった。せっかく追い詰めたものの、イブはまだうまくミュータント能力を使いこなせないのだ。本耳の長い少年は、それを知るとイブになぐりかかった。他の三人も手を貸そうとイブの

胸をつかんだ。と思った過間、イブのうしろに大男が仁王立ちしていた。ブラックローゼスのミュータント、ダダーンだった。

ダダーンの巨体に圧倒きれてか、少年たちがひるんだ。その障をついて麻衣が、少年たちに電撃を放った。

「うわわわわーっー自重改札機に倒れかかった四人の中から、ダダーンは耳の長い少年だけをつぎ上げた。少

原本 160 ページ・文字起こし草稿

年はもう、抵抗はしなかった。

「あっはははは、あんたたちも性しかったらブラックローゼスにいづー麻衣たちは捨てゼリフを残して、るその場を去った。

[く、くそう……俺たちにも、もっと強いミュータントがいたら…:…: 負けやしないのに…:残された三人がどんなに悔しがっても、あしの人祭りだった。

一方クルスとテンペストは、ティイーチャーのドラッグボイスを具体的にどのように利用したらよいのか、連日思案に思案を重ねていた。

ブラックローゼスの勢力拡大のためには、兵隊しして働く手駒、有能な若者たちが数多く必要だった。

テンペストは様々な手段を使って、自分やテアティーチャーのように特異な能力を持つミュータントを探し出をうと都内を健走していた。近ごろ基で流行っている、ミュータント専用の伝言ダイヤルやパソコンネットなど、使える情報網はすべて使った。

どんなにわずかでも特異能力を持っている若者えたちには金を出してでも[へへブン]に引っ張って来る。ブラックローゼスに送り込まれた彼らを、抄順な部下として洗有し潜在前力を引き出すのは、ティイーチャーの役目だったと。

同時にクルスは、テディーチャーの洗脳した若者の中でもん、あまりミュータント前力の多く(ない)いいそのかわり血の気の多い若者を中心に特攻隊を結成する。武装し、柄格的に淫に出ていっ

原本 161 ページ・文字起こし草稿

らない洪力団上中にも、ミュータントという言葉を知っている対抗グッルハーブにも、和人向かうところが英無しの勢いだった。クルスは、増長していったと。

しんじゆめゆくまち新宿は、ますます危ない街になっていった。

かばききちようかいにゆめうめつただが、玖舞伝町に警察が介入することは滅多にない。以前起こった外国人マフィアと地元力団の対立。その結果、ふたつの勢力は縮小され、ようやく(く表向きは安全)になったばかりの新おかほうちたい奏である。正の事情は警察の知るところではない、表の世界を泡さないかぎり新宿は無法地落もちろん、環舞伝町にも派出所はある。新宿には警察四も都庁もある。

なのに薄舞伝町が無法地帯を気取ってられるのは、当然裏で金が動いているせいだ。クルスは初めから、それをのこを計算していた。垣力団を襲って手に入れた金は、その運用金でもあそれに、ミュータントが相手では、日本の警察機構はまったく形無しだった。ミュータントには関知しない。日本はミュータント不在の国……それがこの国のおお偉いさんの彰見であり、

原本 162 ページ・文字起こし草稿

衝誠権力下の警家機梅が独自の見解を持つことは許されない。

このことしによって、ブラックローゼスは歌舞伎町での勢力を拡大していった。対抗する勢力はしたいに、る<の力を弱めた。だがるその一方で、対抗勢力の少年クハループもまたミュータントを探し集め始めていく<く。彼らは、ブラックローゼスの台頭の陰にミュータントがいることに気付いていたのだ。

いままでは何の取り柄もなかった少年がミュータント能力によって、グループ内で権力を得、幹部クタラスへとの上がっていく(く。

どのグループでも、るそんなミュータントの少年少女が増えていた。

「ほーらほらほら、この辺りはブラックローゼスの息のかかった場所だよ。あんたたちがデカイ敵して歩けめるとこじゃ、ないんだ]歌舞伎町の入り口でたもろしているニューエストパワーのメンバー三人に、床交がケンカを売っていた。麻衣は、ティーチャーのドラッグボイスごで、さらに強くなった自分の力を試してみたくてウズウズして、ひとりでここまで出て来たのだ。

なにを1つ、このメスチビがっ|突然ケンカを吹っかけられて、ニューエストのメンバーは面食らった。

ーよ、よせっ。こいつっブグブラックローゼスの麻衣だ!あいつは第本和を他うこ

原本 163 ページ・文字起こし草稿

そう言った少年は、左の手のひらから衝撃波を放つ。衝撃波は)歩身を引きいた席放りして、ピビルの壁を砕いた。

「あんさんも、よう闇が知られてきましたんやな必]おおおおもしろいとしころに出くわしたとしとしばかり、どこからともなく}く現れたテラテンペストが席衣に耳打らした。相変わらず、風のように現れる。

「テンペスト!いいところに来たわね、ちょっとこいつらに痛い目を見せてやるのよ、手伝っててちょうだいしんじゅくざっとう新宿の雑踏の中で、麻衣し衝撃波少年のミュータント合戦が始まった。

靖国通りの交差点上で、互いに攻撃を仕掛や合っていた。

広い交差点の信号が青になるたび、道路上の人波をかさきわけて役ごっこを続ける。赤になって車が通るときには、ビルの前の歩道を駆け回っている。

行き交う通行人の透き間をって、それぞれの技が粒した。よたりとも、同じような力量らし(く)到撃を交わしあっている。

えたが、盾となって攻撃を受けた通行人たちは、流れ弾に当たるのと同じで、つつきつきさきし道に倒れてでていく。

それでも、よふたりは澤いをやめなかった。むもむしろ麻衣は、ゲームを楽しもかのりようにはしゃ

原本 164 ページ

ぎまくっていた。

「あんさん、もうええやろ。ええかげんにしいや」

なかなか勝負がつかない様子に、呆れ果ててテンペストは麻衣を担ぎ上げた。このまま一般の通行人を巻き込んでの戦いは、双方にとってまずいと判断したのだ。

「きゃっ、何すんのよっ。おろしてよっ、やだ、こんな格好一っ」

【一部を要約：テンペストは、露出と屈辱的な扱いに抗議する麻衣を「ヘブン」へ連れ戻す。】

『ヘブン』では連日集まって来る若者たちの心を、ティーチャーがそのドラッグボイスで魅了し、ブラックローゼスの戦士としての使命を与えていた。

「んも一っ、テンペストったら人を赤ん坊みたいに扱わないでよっ」

テンペストは麻衣を荷物のように『ヘブン』に置くと、またどこへともなく出掛けて行ってしまった。

「うわあ……今日もまた、たくさん来てるわねえ」

戻って来た麻衣は『ヘブン』に集まって来た聴衆の数に驚いた。カウンターの奥の控え室に入って新しい服に着替えると、ティーチャーの側へ駆けて行った。

一度でも、ティーチャーのドラッグボイスを聞いた者は、何度でも彼の声を聞きたがる。ド

原本 165 ページ・文字起こし草稿

初めはその現衝に中さきを了せなかったクルス派のメンバーも、自分がミュータントになりんもしれないとしんわんカかるとし、すぐにティーチャーのドラッグボイスを受けようとし佑まよってそでよさと。

クルスやテンペストの預かり知らぬところで、ティーチャーの力は、しだいに強くなっていドラッグボイスは、能力のある若者をさらに強力なミュータントに変えてい(。

時に、ティーチャーへの信頼もたかまっていた。

ドラッグボイスを聞き、能力を強化されたミュータントは狂世した。自分の能力に陶醉し、ティーチャーへのさらなる忠誠を敬うのだった。

な、ねね。あたしの言ったとおありでしょ。みんなクルスよりもテラティーチャーを、頼りにしてのよddじゃき無邪気に笑う、麻衣の言うとおよりだったと。

クルスが不在になることが多くなった『へへブン』の中で、ブラックローゼセスの全指控権はいやや、クルスからティーチャーに移行しつつある。

そんなことは、わかっている。さあ、ステージが始まる」

ティーチャーは、麻衣を連れてステージに上がった。ステージライトに照らし出され、ティーチャーコールが巻き起こっていたと。

原本 166 ページ・文字起こし草稿

――NA朗家もうっとりした表情でティーチャーを見つめている。その角が放電の火花につつまれ、洲立っていた麻衣はティーチャーへの愛ゆえに、たとえティーチャーが妹ししてしか見てくけきつれなくとも、身的に尽くしていた。

麻衣はもう何日も家に帰っていない。もちろん、ほのかのいる天城心理学研究所にもずっと行っていなかった。

麻衣はほのかが好きだった。

した姉のように慕っていたが、いつでも見捨てられやしないかと、びびくびくしていた。

「い・とえ美人で何でもできるほのかには、何も取り柄のない女の子の気持ちはわからない。村交はほのかの前だと心のどこかで、いつも自分をさげすんでしまうのだった。

おてんたいでんじまんすばしかし、今やドラッグボイスによって自分の汚点だった帯電体質は、自机したいほはほど擬晶らしい能力に変わったのだ。この力きさえあれば、もう誰も麻衣をバカにしたりしない。

こわ林ブラックローゼスの中でも最年少に近い麻衣に、もう怖いものなどなかった。人仲間たちは投。て敬の視線を注ぎ、新宿を闊歩すれば他のグループや地元昌力団でさえ、味衣たちミュータントに目置いていた。にドイブッグボイスによって麻衣が得た力は、帯電体質を強化したものだった。終交はその光体に放直できんほどの衣電気を攻え、自在に操るこしができるようになっていた。

徒刀が体呈に電気を走らせ、火花を散らして放電すると、ターゲットは角池する。そ9)生っ

原本 167 ページ・文字起こし草稿

今ななら、承交ははりかだって必くuv。-ばのかに保護されていなくとも、言いたいことは自分で言えん。寺いたいとさに削えんしうう能からも吾振されず、いつでも自分のために行動どきる。あれだけ不安だったばはのかのことは、少しも気にならなかった。

「あたしは、ティーチャーの力で新しい自分に生まれ変わったんだと]氷衣は自信に満ちた眼差しで、ステージに立つティーチャーに忠誠を誓うのだった。

天ノ川高校では、文化祭が終わったばかりだった。

北斗余といって、毎年十月一日近辺の三日間に行われる。今年の春入学したトオルたちにとっては、初めての高校の文化人である。今まで中学の文化衝では味わったことのない盛り上がり、トオルも映二も大いにハッスルした。

ちなみに、トオルのクラスではコスプレカラオケ喫茶なるものを行った。

これは、コスプレ漫画家を母親に持つタラスメートの政雄の提案で、本隊の方々の適切なアドバイス資料提供を得て大評判だった。他のクラスになかなか遊びに行けないくらい、客が入ってでて和忙しい三日間になった。

様々なキャブラクターにコスチュームプレイしたウェエイター&ウェイトレスにカラオケでオ

原本 168 ページ・文字起こし草稿

人喚し、採点機で勝ち抜くと一〇〇〇円ずつ飲食料金が割り引きされるうえ、十人抜きをすると許ても刀みの女の子o男の子を連れて学校内一周のデートができるのである。

当然鏡子は引っ張りダコだった。

たた、ちょっとコスプレの内容が敢んでいて、タンクトップにショーツパンツに赤いグローブをつけて、矢吹ジョーだと名乗っていた。マニアックな鏡子は、出崎・杉野ファンだった。

他の女の子たちはキャミイやサラなどのゲームキャラのコスプレが多かった中で、鏡子のジョーと知美の私号はブツ飛んでいた。

女子からは真人のシュワッツエネッガーも人気が高かった。

映二は初代タイガーマスクのコスプレをして、なかなか悦に入っていた。トオルはいいややながくら、憎かしのブルセラ少女をやらき

された。これは、学校内の独身教師の受けが異常に良くて引っ張り回された。

今日は北斗任の翌日。代休で学校は休みである。恒トオルは朝から、また例の耳鳴りが始まって気分が晴れなかった。昨日までの疲れが残っていあるせいなのかもしれない。だが寝込さむというほどではなかった。

北斗作の一週間ほど前に病院にいった、いろいろみろ枯密検査をしても5つでてみたのたがガルドにも異常な所は発見されなかった。痩せ気味だが、すこぶる健康体であるしと、医者には念をよざれて帰って来た。

原本 169 ページ・文字起こし草稿

{9は、和からら何か胸双ききがしてでかりなたかっいに、負、子し上、
「が迎えに漆たのは、蛋を過ぎたころである。

~行さまたくぐないって言ったのに」

口をとがらせてドナルドダックの真似をしながら、トオルツは映二と鏡子に人釣り物を用意した。

家にはトオルひとりだった。

トオルの両親は共働きてある。カメラの設計技師をしている父と、放上喝所で働く母。どちらも和角やかでおっとりした、のんびりした両親である。トオルも多分にその影響を受けていて、争い事や勝負事はあまり好きではない。一人っ子なので、大事にされてきた。上流階級のお金持ちというわけではないが、結構ンボンなのだ。

映二の家は両親とも教師をしている。大学を出て、あそら(く自分も教師にたなるんだろうなしとトオルと話したこともあび&。

鍼子の家はどちらかと言えば裕福な方である。

母方の曾祖父が築いた自動車関係の会社は、創立後間もなく軌道に乗った。その後自社開発したと軽自動車ルガブームに乗り、会社は

親族を巻き込んで大きくなる。祖父は独制性し柔執住に富んだアイデアマンで、宣伝展開とプロデュース手腕を発揮し、炊々と新車を大当たりさせえた。会社はますます大きくなっていく。人父親は技術垢の人間で、小さいころからエンジニアになるのが夢だったので、今は伯父が社長に納まった会社で技術開発部長をしている。そんな人

原本 170 ページ・文字起こし草稿

規が大学時代に婚約したひとつ下の母は、天皇家縁の旧家の子女で、大学の後輩ある。有周囲の反対は何ひとつない、幸せな結婚だった。

その幸せが、今でも続いている。おおらかな父と、世間知らずの母。鏡子はかなり自由にのびのびととし、何不自由なく育てられた。どこかおっとりしていて、るそれでいて我がまま気まま。

現代っ子のわりに古いしきたりに6も詳しい。知りたいことしはほとんどん追求しなければ、気が済まない。るそれがカ鏡子だった。

[こないたはアクシデントがあって、ライブも中止になっちゃったしきさ。今日は絶好のチャン前回のアクシデントには運悪く映二と鏡子が会場内に居合わせたが、怪我もせず逃げ出して来た。でも、ふたりともこのことは、トオルには伝えていない。知られたらきつと、絶対行かないと言い張るに決まっている。選映二にとってみれば、トオルと一緒になら鏡子は安心して休みの日の誘いにも用いなく出て来てくれる。試しに二人っきりでデートというのに誘ってみたのだが、うまく路られてしまっ

「な、トオルくん行こうよ。この頃じゃ、毎回いろんなミュージタントが来てるっていうウワサ

原本 171 ページ・文字起こし草稿

2。1ft1180員小付っているバツユブメットド07)1ボ1にりかpfをヤー9の対で、別人に性まれ談あれるとしといいいうのえと。

しかし、親符が物双な街であることに変わりはない。それをそれとわかっていながらも、トオルはふたりの説得におおれた。

いきじき

「お姫様起々のお出迎えとあつては仕方ない、行きますか」

「やったあ!るそうと決めたら、すやぐ行こう。気が変わらないうちに、さあああ行こう]映二は、トオルはよっぽど具合が悪くなければ絶対行くはずだと思っていたが、るそのことでみようやしつと鏡子がこんなにはしゃぐのは、なんだか妙な感じがした。別に妊く必要もないのに、婦して今日も鏡子はかわいかった。

えり白い大きな桂のブラウスに、黒のニットの長いベスートル黒のミニスカートに、ちょっとハデテぐくい-ヤな有、じかな交と黒のダイヤ醒様のストッキング。首には小さい十字架のついた細いリボンが結ばれてい喘二は安全ピンの一利つuitは宏全ピンの一拉つuitした白のシャツに、穴の開いたジーンズ。いつもの黒縁有眼鏡は、丸い寺色のサングラスに変えている。

トオルはおしゃれにはうといので、いいつもはいいいてる膝下を切り捨てたジーンズと黒のパーカーに、白い広ジャケットを羽織った。

原本 172 ページ・文字起こし草稿

トオルの家から電車で四十分程で、新宿には到潜する。

[やっぱりさ、行くのやめにしないい?なんかやーな予感がするんだよ」

途中の電車の中で、喘二と鏡子の予期したとありトオルが渋り始めた。まったく涯くないというか、優柔不断というか。煮え切らない性格なのだ。

「なに言ってるのよ、今さら。予感だとしか言って未来予知がでてるなんて、トオルくんったらミュータントみたい」

「俺、ミュータントなんか嫌いだよ」

ともかく三人が新宿に着いたときには、午後三時をまわっていた。今日のライブの開始予定は四時だから、急いだ方がいいだろう。今日は平日なので、新宿の街はいつもほどは人出もなく騒がしくもない。

『へへへブン』の前には、人だかりができていた。入り口付近の警式かやけに嚴重なのは、連日の抗争のせいだった。

[平日なのに、ずいぶん混んでるな...]映二も銘いている。この間来たときは日曜日だったし、とんだだアクシデントも起こったので周りの客の様子にまでは目が行かなかったのだ。細改めて見ると自分たちと同じくらいの少年少女も多かった。だが、をなかには、変な奴らもいん。獣のようなコスチュームに身をつつんだり、顔を真っ赤にペイントしたり。派手な容好の

原本 173 ページ・文字起こし草稿

ルリタタもいい8もちかかrrに1は9のよう)うにライブやってでいんらしいんみん。どそれゆかだただけ和人気があびっそしよよっここにて務ってる人がミータンシト2トオルは入り品近くに貼ってあったチラシを指さして、人鏡子に尋ねなたとた。

「誰が、ミュータントですって2?2・」

『へブン』た入ろうとしたひびとりの少女か)きつい口調でてトオルたちに話しかけた、小さな身体に、光り物のたくさんついたハデなビスチュをつけている。肩とし腹が朱き出しになっているのでトオルは少し目のやり場に困った。麻衣だった。

連日ライブの手伝いをしている麻衣は、また一度もみかけたことのないトオルを、怪訝な目付きさで上から下まで了上みつける。麻衣はトオルよりも年下そうなのに、ずいぶん大人ぶって倅[見ない導だね、初めてなんだ。ついといで、いい場所教えてやるよ」

少女は月パスらしく、並んでいる列の横を擦り抜けて『【へブン』へと降りて行く。

どうしようかと迷ったものの、鏡子、映二、トオルも、とりあふえず名前も知らない麻返の後をついで行くこしにした。

地下はすでに人でいっぱいになっていた。今日も盛況な様子に、床衣も満有中げにうなずいて

原本 174 ページ・文字起こし草稿

[こっちだよ、このカウンターからならばっちりささ。ティーチャーの歌声をたつぷり聞けるよ。

じゃあね」

麻交はにっこりと笑うと、ひびひとりでカウンターの奥へ入って行こうとした。

すると突然、地面が揺れた。本ティーチャーの現れるのを待つ一同の前で、何かが爆発した。トオルたちも思わず膝を着いた。途端にあたりに煙が立ち込める。

[なっ、なんなんだ、これ?キョーコちゃんっ、トオル、大丈夫かっ」を煙に港かれてすぐに何も見えなくなった。人々の阿鼻叫喚に混じって、映二が叫んでいるのが聞こえる。

|ーゴホッ、ゴホッ、ふえ、映二?ともかく外へ、外へ出よう」

あわてて、今降りて来た階段を目指し、煙をかさき分けて進んでいく。トオルは目と中をやられながらも、ようやく地上上に着いた。

すぐあとから、映二も上がって来た。

「げばほばっ、ううー1、ひどい目にあった。大丈夫か、トオル」

「だ、大丈夫だ。キョーコちゃんは、大丈夫ソ」

(ネネヨーコちゃん?井上2?)_そっけつきり映しとせいにに上がって訂たと思った鏡子が、どこにもいなかった。ふそら6らく{まなた堀

原本 175 ページ・文字起こし草稿

たか、つきっきりしとし上がって氷る少年たらちりり中にじもも、
鐘子の淡ば刈えなかいとた。

『ど、じどうしよう2トオルうう』

「どうしようったって、どうする2

「ううーん……よし、俺もう一度下へ行って見て来る」

その時、『ヘブン』の中で、二度目の爆発音が鳴り響いた。

[キッ、キョーコちゃんっ!映二は煙の吹き上がって来る地下へ、上っ
てくる人々を押し分けて降りて行った。

[待てよ映二、俺も行く]トオルも、るその後からあわてて地下へと降
りて行った。

ばばくややくてせいばくだん地下ではまだ、煙がもうもうと立ち込
めていた。一発目は軽量の爆薬の詰まった手製燃弾。

二法日は火江のたっぷり詰まった煙攻だった。

視界が思うようにさきかず、煙で息が苦しい。どだどこからか、う
めき声も聞こえる。性向をした人がいるぶ8のだろう。

中元が爺うかった。うちっぱなしのコンクリートが着がれ落ちらて
いるのが、つま先の感触ぞでわかった。トオルはカウンターを探し
て、壁治いを歩いていた。

原本 176 ページ・文字起こし草稿

7上

「いったい、誰が、誰がこんなことを……ちくしょう。テティーチャー
の邪訟をする、いやな奴は、誰なのっ2・」

さっきのカウンターの近くで麻衣が座り込んでいた。麻衣は、足を
やられて立ち上がれず、初界もきかないのでかなりいいいらだって

いる。いらだちは麻衣の体中から放電を走らせる。バチバチしと火花が散っている。

トオルはカウンターの近くにたたずんでいるのが鏡子だと思って、手を伸ばした。そのとばばくやくき、麻衣の放電がトオルの手を焼いた。その火花が、カウンター近くに置かれた三つ目の炊薬に引火した。

ドドーシソシ。

こまくはかいりよく<\>ミ>3鼓膜を破るような、すさまじい音だった。破壊威力はなといしたことはないか音がとにかくすごかった。_ぱくはつoはおちいる目の前で起こったその爆発に、トオルはパニックに胸っていたと身体が熱くなって、意識が遠くなっていく。今まで体験したことのないほどの耳鳴りが、身ふる体の奥から振動して来た。がくがく{し身体中が震えるそして、トオルの身体が白い光に包まれた。

原本 177 ページ・文字起こし草稿

北ち込める燈でよく見えなかったが、麻衣は自分の近くにいた人影が、半っ角にばに兆り大(のを見た。そして白い光が自分に向かって近づいて来るのを。

今の紅音で、耳も聞こえない。るその人型の光はしだいに発光の強さを増し、目を開けてuvちられなたないほど強くなっていく。

「い、いやっいやっ、寄らないで、触らないでっ!あっち、いつて1っ」

こんな恐怖感は、生まれて初めてだった。

白い光が、麻衣の身体を侵食し始めた。光に包まれた麻衣は、自分の身体が引き千切られてしまうような靖みを全身に感じて、気を失った。

ばくえん爆煙は、少しずつ晴れていった。

[うっ、げほっげほっ鏡子を助けようとふたたび地下へ降りてきた映二は、爆発の煙としコンクリート壁の月れた究にむせんだ。

床に倒れた若者たちの横を通って、壁づうたいに鏡子を探す。

「あっ、キヨ、キヨーコちゃん!」

ようやくステージの近くで鏡子を見つけた映二は、気を失って倒れている鏡子に駆け違った。

原本 180 ページ・文字起こし草稿

[キヨーコちゃん、しっかり、しっかりするんだ]つう…ん…、映二：……くん…|見たところ大きなな怪我はしていない。映二は鏡子の胸を自分の首に回すしとし、出口に向かって歩き出した。

数歩進んでカウンターの方を見ると、気を失って倒れているトオルに気が付いた。

|おいっ、トオル!しっかりしろ、トオル。お前も、キヨーコちゃんを探しについて来てた

「う…映二?い、井上は?」

「大丈夫だ、かすり傷だけみたいだ。それより、はやく逃げよう。ここは危険だ」は映二の声に起こされて、トオルはふらふらと立ち上がった。さっきまであんなに激しかった耳鳴りが、今はうそのように消えていた。

映二のあとについて『へへへブン]を出ようとして、入り口の格子扉まで上がって来た時、トオルたちは『へブン]】の入り口の近くの壁|面に、真っ赤なスプレーで書かれたいたずら書きに気が付いた。
人

「[ピエトロ&バルバパロッサ&ニューユエスト連合軍参上」

原本 181 ページ・文字起こし草稿

もうこ上殿と、こんなところに来るものか。ミュータントにだって二度と関わめりたくない、と、心の中で叫んでいた。

ざわ外に出ると、道路は混乱した若者たちでごった返している。
騒ぎに気付いたやじ馬も集まり始めていた。

かくまちぎざぎざつつとうまざぎ、三人は沈を懇すようにして、
街の雑踏に紛れこんだ。

第十章 クルス失墜

原本 182 ページ・文字起こし草稿

クルス上失墜[ちつくしょー、何が連合軍ただ!なめやがって|あたばくえんにおほんきよちしか辺りには、またと燃煙の臭いが残っていた。ブラックローゼスの本拠地『【ヘブン】』に仕掛けられた爆発物で、うちっぱなしのコンクリート壁が至るところで抽がれれ落ちている。

[ヘブン]に集まっていた藻いブラックローゼスの兵隊は、鉄骨が着き出しになった壁を拳でたたいて、怒りずをあらわにしていた。

クルス率いるブラックローゼスの特攻部隊によって、根域や各地支部を叩かれた他のグループが、手を組んで逆襲を仕掛けて来たのである。しかも、リーダー・クルスのいない本拠地を肌ってだ。おそらく、ブラックローゼスのナンバー2、ティーチャーのライブなし知っての計画的犯行だろう。

原本 183 ページ・文字起こし草稿

当りクルスによる麗人時刃に鶴好をスカ妃の有閉りうク2ク2あなるバルバpツシメシーメタストパワー、クラブ・ビピエトロnnのミグルッグループが、共同戦線を張ったのだ。

和裕にミューエストのリーダーはナルシストで、ブラックロービスに対して封念を眉やし<いるらしい。ブプブラックローゼスに大事な資金源を奪われ、仲間を奪われれ...何度叩さえのめきゆても教勤なまでに食い下がって来る。

今回の爆破事件も、連合軍を組んだことのデモンストレーションに、ミューエストのリーダーか考えたものだ。客を装った鉄砲弾に、三発の爆発物を店内に仕込ませたのである。

より効果的なデモンストレーションを想定して、一発目は爆薬を、二発目は煙藻を、三発目には爆音と、打ち上げ花火の要領で仕掛けられた。完全にクルスの不在をおちよくってのことちょうどるその

時、ティーチャーはライブを前に最上階にあるクルスの部屋で、随想の最中だった。一発目と二発目の爆発音と振動は、街の騒音にかき消され、最上階のティーチャーまでは伝わって来なかった。

ティーチャーが気付いたのは三発目の、一番大きな上爆発音だった。

事台に気付いたテラティーチャーが、『ヘブン』に降りて来た時には、あたりはすでに真っ白い煙がもうもうと立ち込めていて、すぐや前も見えない状態だった。倒れた若者たちのうめさき声だけが、耳に届いた。

原本 184 ページ・文字起こし草稿

地下にある『ヘブン』の視界がようやく少しずつよくなるのにしばらく時間がかかったが、ティーチャーはすぐにカウンターの前に倒れた麻衣に気付いた。麻衣は、ぐったりとしと気を失っている。紅破の衝撃で服が裂け、白い肌があらわになっていた。

煙から遠ざかるために、外に逃げ出していたブラックローゼスのメンバーたちも、戻って来て仙れた仲間に駆け寄る。たいした火薬量でなかったのが幸いした。

爆音や煙攻に気を失った者はいたが、大きな怪我をしている者はひとりもいなかった。だが、一同の湖には不安が隠せない。

この機に乗じて他のグループの奇援を受けたら、たちまちやられてしまうだろう。リーダー不在のこの状況では、満足に応戦することも出来ない。

[大丈夫だ、なにも心配することはない] テライーチャーが[ヘブナー]の中央でメンバーに向かって話しかけた。その声が、メンバーたちの心の奥に染み込んでいくように、彼らの顔から不安と戸惑いが消えていく。

ドラッグボイスだった。ティーチャーのドラッグボイスがメンバーたちの不安と絶望感を、一史にして拭い去ったのだった。シンナーえり古所を総部私たちは無英だ、こんなチャチな手に引っ掛かって

戸惑うようなバカじゃない。安心しろ、私がいる限り、オお前たちは無敵だ。プブラックローゼスは無敵だラテノーチャャャーの声は、説得妃に満ちていた。誰もがティイーチャーの言葉を信じていた。

原本 185 ページ・文字起こし草稿

一芝久鹿チャーがいるかさりブラックロpローゼ2スは無比還だ!・ 営者たちは拳を導り上げ、立ち上がった。るその目にはティーチャーが、この委の何物にも風しない引対神のように映っていた。

仲間のひとりが麻衣の頬を叩いて、気付かせようとしていた。

[::...う::、う::ん::...:]一麻衣、麻衣。しっかかりして、赴きてよ麻衣」

麻衣は重いまぶたをゆっくりと持ち上げた。

[あ、あたし::、いやっ、来ないで!こっちに、来ないで1っようやく目覚めた麻衣だったが、まだ意識が混乱しているらしく、頭を押さえてその場にうずくまっている6るを。

「どうしたの、麻衣?しっかりしてよ」

仲間のひとり麻衣の肩を押さえてがくがくしと振った。

[::あ::...::、白い光、白い光があたしを包んで:::]

多分、麻衣のすぐ側で爆発があったせいだろう、耳が聞こえていなをいようた。人株衣はかなり鑑乱していた。ようやく(く正気に戻って辺りの状況に気付くのに、ミC分ほはどか

原本 186 ページ・文字起こし草稿

「あ、あたし。くうー、まだ耳がおかしいわ:...」

「他のグループが連合を組んで、挑戦して来たらしいよ。リーダーのいない時を狼って診るなんて、ひで1ーよ」

仲間の腕をつかみ立ち上がろうとして、麻衣は自分の身体の変化にようやく気付いた。

何かが変ただだ。どこかおかしい。

「一どしたの。麻衣ちゃん、どっか怪我したの?|心配そうに近寄ってきたズウズウの鼻先に、いつものように火花を散らそうとして指を鳴らした。たカか、いつもの火花はまったく出ない。

試しに、算を両手でつかもように放電してみる。いつもなら出来る放電の符が、現れなかつ

「なんで?・なんで?なんで2^」

麻衣のミュータントとしての力が、消えてなくなっていた。

その理由は誰にもわからなかった。麻衣はティーチャーにすがるうと上手を伸ばしたが、足に

原本 187 ページ・文字起こし草稿

>とたけいだよい、鳴人。時的にショックをけただけだよ。すぐにじ<ずじぎかのの72\、も呈下で、ティーチャーは味輝の手を取って、ドラッグボイスを発動させた。だが、育放に変化はなかつた。彼女の身体からミュータント能力が消えていた。

「いや一つ、あたしの力。あたしの力が、なくなっちゃった一つあしこしかかこんわくかく足腰の立たなくなった麻衣を抱えて、ティーチャーは困惑の表情を隠せなかつた[なぜだ?誰が、いったい誰がこんな:::]麻衣は何者かによって、その力を消されてしまったのだった。

うややつ麻衣の力を奪った奴はミュータントに違いない。ティーチャーは直感した。

ミ>Ss、ばくはつせいそうクルスカ【ヘブン』に戻ったときには、すでに爆発のあとは清掃され残っていたメンバーも平穀を取り戻していた。ティーチャーの報告に、クルスが怒る。

「連合軍だと1、なめやがって。わざわざ俺の留守に乗り込んで来るとは、やってくれるじゃー敵きんも考えたもんやな-ちようどるを

の時、ミュータント探しに出掛けていたテンペストも、『ヘブン』へ戻って来たところだった。テンペストは、一度外へ出掛けると、一週間近く戻って来ない。クルスと衝突を

原本 188 ページ・文字起こし草稿

合わせるのも五日ぶ*りだった。

テンペストの言うとしあり今回の襲撃は、ただのいやがらせや田しのデモンストレーションにしては、手が込んでいる。リーダー不在の時を狙って、ブラックローゼスのメンバーを動揺させようという敵の吉胆は、明らかだ。

だが、ブラックローゼスのメンバーたちは誰も動揺していないように見える。団結力も揺えず統率も乱れていなかった。

これも日頃の自分の教育の成果と、クルスは心の中で安心してた。それをそれが、リーダーのドラッグボイスが及ぼした成果であるとは、みじんも思わなかった。

ブラックローゼスのメンバーの半分は、リーダーのドラッグボイスの影響を受けクルスへの忠誠を堆っているのである。

しかも、ドラッグボイスは、彼らのミュータント能力をより強化した。誰よりも強い力を与えられたことは、彼らにとっても大きな喜びとなったはずだ。

[このままで、崩壊したらあきまへんで・つ選テンペストはクルスに進言した。ここで少しでもひびくんだら、敵の思う壺である。

何か策をめぐらせねばならない。考えあぐねていたところに、リーダーが新しい作戦のアイデアを提案した。

原本 189 ページ・文字起こし草稿

[43] [7] キー転出と導い4んクルppデインーリシン12とードチャーに名光肖り吾質があるとは思わなかつたので、内い<の7チャー、なた了崩にデアランペストとし頼れるナンバー2の台頭は、ブブックローゼ2としっ/dそましく(大しかった。

これでまた、ブプブラックローゼスはより一層強くなる。クルスは自負していった。

だが、それがトップの地位を揺るがす前兆だとは、クルスはまったく想像だにしなかつたとまた、いつもはティーチャーにぴたりと寄り添っているはずの麻衣の姿がなかったことにも、気付く様子もなかった。

しんじゅくねじろ新案を根城にする地元暴力団の中で4特にまた力を持っているのが、土建会社を経営する花輪組系高松会である。

各組織の弱体化が進んでいるとはいえ、暴力団としてのメンツを保っていられるのは、新室和名所に所有する土地権利があり、資金源が安定しているところにある。表の穀とし裏の穀を使い分け、和警察への袖の下も怠らない。たとえ、新宿がどんな時代になっても、るの屋台肖は北るがないと言われていた。

新宿二丁目に位置する、とあるビルの一階。高松会事務所にその挑戦状が届けられたのは、土曜の深夜だった。

原本 190 ページ・文字起こし草稿

っなんっじゃー、こりゃああああ。なをなめとるんか、こわっばどもー・や1」」よりせん0よがその日は、商部三名に若手七名の合計十名が、事務所に泊まり込んでいた。その挑戦状はFAXで送り届けられてきた。

「氷戦状、新室は俺たちがもらった』

子供の段り書きのような、稚押な挑戦状だった。

「そろそろやろうかカカpp…さあて、いっちまうもんだろか湯江リFAXの送信を見はからったテンペストは風を操り、事務所の一面の防弾ガラスを叩き割る。

深夜のピルの谷間にガラスの割れる音が響き潜った。

それがか、戦闘開始の合図となった。

暴力団組織といっても表向きは土建会社である。土曜の夜の人員配備は、かなり手導になっていた。クルスの特攻隊とテンペストの一派が、そこを叩いたのである&。

テンペストとは別の入り口付近に待機していたクルスたちが、ドアを蹴り破って内部に突入

原本 191 ページ・文字起こし草稿

人クススとも久方が戦闘力は眉倒的に上だった。クルスたちも特攻部隊も、問日の少年グループしな人池はへえしめちゃうなo

『の沈付て、すっかり座製にもん尻れでいれつりゃあああ||つ;』

めいくちyoyyつ過のはげあがった芳者が、合口を胸にクルスたちに突っ込んだ身をびるがえしでてよけいりシクだいぶつ人oルスたちに、大仏のようなおおおやじが拳銃を打ち込むタム、タム、タム。

サイレンサーつきの有自箇小銃はイタリアものだ。

[フツィイイツ、ブツィイイイツ、ブフツィムイツくもはAAテンペストが口笛を鳴らした。同時にクルスたちに向かって上撃たれた銃弾が、カランと床に和務ちた。さきらに、入りのスラッグはテレキネシスで刀を曲げた。刀は、めきよめきよとしおもしろいように折れ曲力つとた。

一ひ、ひいいいこいつんら、パケモンやミュータントと暴力団員たちとの勝久は、あつと言う問だった。

金族を焼き切るミュータント能力を持つイブが、人なi\ム、4記店ナ-)>ヨリ出してクルスに流した。きす金許に保管されていた土地権利藻を引きず

「予告どあり、新室の街はいただく。やれ!」

少年のひとりが、証剖類の束に向かって指を押し付ける。のはSTの指先から胸法のように煙が立

原本 192 ページ・文字起こし草稿

ちのばり、すぐに炎となった。

クルスは、るそれらの証書類を彼のミュータント能力で焼くように命じたのだ。ちりちりと燃えていく証書類を少年たちは笑って見つめていた。

「…う、うおお、お、…ガキどもがあ…何考えてんじゃ、お前ら|気絶前のパンチバペーマの幹部が、抗ってクルスにつかみかかった。火事場の馬鹿力で、クルスを羽交い締めになろうとする。だが、クルスはためらわず正面を振り向くと、目にも止まらの早きで幹部の目を指でてえぐった。員嘩のときの急所狙いは、ケンカの鉄則である。

乃で畠れる三自腹の幹部が、床を血まみれにして転げ回った。あんまりやかましかったので、肝門目がけて思いっきり蹴りをねじ込めと、びびくびくと商したままおとなしくなった。

テンペストは、幹部の胸ポケットからハンカチを取り出しクルスに渡す。血に混じった劇球の残骸が、クルスの手を汚していた。

「スプレー出せや|うめき声をあげて倒れる暴力団員たちは、すべて裸に着かれて縛り上げられた。子供のいたずらはタチが悪いとし、相場は決まっている。

ぎりぎり跟前中みして性しがる裸の圧力団員の群れを前にして、テンペストは事務所の聖に

原本 193 ページ・文字起こし草稿

至かもしれないけどれた」

小憎らしい口を叩いて、クルスたちは電力団事務所を後にした。A後はウラで流したバルバロッサやニューエースのアジトの情報を、力団組織の若い衆か所ものを待てはいい。しよくはったかまつかい、いクルスの災いたスプレーの文字に触発された高松会は、滞朝にはルハロッササ、ニューエースパワー、クラブ・ピエトロがアジトにしているビルの一室を襲った。

「いややー、さすが。本物は飼力ありまんなあ」

近くのビルの屋上から様子を窺っていたテンペストが、『ヘブン]で待機するクルスとティーチャーに、トランシーバーで報告する。

「――ティーチャーはんの作戦、大当たりでっせ。お、来た来た来た」

テンペストの報告を受けて近くの公衆電話に待機中のメンバーが、一般市民を装って110番通したのだった。それからの捕り物は圧巻だった。歌舞伝町内での撤争現場を、替が掻きさえたのは久しぶりのことだったろう。

未成年者がばとんどの少年グルハーブのアジトに、殺気を帯びた本職の暴力団員が真っ昼間、

原本 194 ページ・文字起こし草稿

衆り込んで来たのである。銃刀法違反も確かなら、未成年者を相手にしたのもマズかった。

しかも、警察が駆けつける時間も早すぎた。

てきたいはんもくいちもうだじんブラックローゼスに敵対する他のグループも、反目する暴力団組織、一網打民だった。

「計画完了。さてと、わいいいはまた新しいミュータントでも探しに行くとするか」

テンペストは軽い身のこなしで、現場を後にした。一陣の風が舞った後には、何も残っていない。新宿の街は、たった一夜にして静かになった。

Pe夕暮れか近づいていたとた。

クルスはひとり『[ヘヘブン]の上の自室で、夕日に染まる新宿の街を、眺めていた。

街が金色に染まっている。夜が始まれば、ネオンのまたたきが新宿を大人に変える。

[何を感像に授っているんだい]ティチャーがいつのまにかカカ、部屋の入り口に立っていた。

「もうすぐ、俺たちの王国は完成する。いよいよ、俺たちの夢かなう日が来たんだって、しみじみしちまったーテンペストややティチャーのおかげで、戦士しとして使えるミュータントも増えとた。ブラックローゼス今は今や、無敵だった。

-そどのことなんだが、また新しい提案があるんで相談しに来たんだ。悪いがちょっとし、ドFFの

原本 195 ページ・文字起こし草稿

いく7フンで生じにりりでてで和て{れいがかLティーチャーは、なにか相談事がめみるという。

っにここじゃ、話はできないのか2si明日はまた、ティチャーのライブだ。『ヘブン』では今頃は、明日に備えて機材を刻えているはずである。

「客がいるんだ」

先日の坦力団衣撃では、ティチャーのアイデアがものを言った。ティチャーの使い道5導い人が和信"は、ドラッグボイスだけだと思っていたクルスには、意外であり頼もしい結果となった。

だから、より一層ティチャーの新しい提案というのには、興味があった。

先に降りて行ってしまったティチャーの後を追って、クルスは『へへへブン』に入りカウンターをくぐったと。

だが店内には、照明がびとつもついていなかった。カウンターの向こうの通路の汐い明かり以外、外界の明かりが入って来ない地下のライブハウスは遠かった。

おい、テティーチャヤー。明かりをつけでてくれ、それに客ってのは:...・ |は、(半三9とっせんでで3、をの時、映かった店内が突然、

まばゆいばかりに明るくなった。クルスに照准をつけたスラーシメシ用のライトが、出力を最大にして点滅した。

「うググ。なんだ、ティーチャー、湯つ、まぶしじゃないか。どういうことだ2?2で>ヶ)に欠が

原本 196 ページ・文字起こし草稿

、るんたっmpにまぶしくて、よく判別できなかったのだったが、ライトの向こう側でたくさんの人間の気配がした。、しだいに目が慣れて来ると、それがブラックローゼスのメンバーたちであることがかが、クルスにもわかかったと。

区っっ

「なんだ、お前たち。ティーチャーのライブは明日だろう。こんなところで何を…うあおよおよおおっ1!|-おるそたたからだ、。かベクルスを目に見えない力が襲った。叩きつけられるように、クルスの身体が壁に向かって吹さき飛んだ。

ブラックローゼスのミュータントの中の[]人スプラブグの持つ重力操作の能力による攻撃だったルスラックはるその力を操るために、まるで人形を操るようなポーズでクルスに向かって両手を揺れ動かしている。

-ぐ、ややぐ。ぐやおお、何をする、おおお前たち…はっ!=二js0。、3用sで行Kイイフの納身の身体かしなるたび、五本の指先に炎のナイフが生まれた。

原本 197 ページ・文字起こし草稿

上9陽員きき聞いた。

にこいやああああっ!やっ、やめろ一つっ」すgwやさらにズウズウが、クルスの身体にしがみついた。上黒い糸を通した針で制れた服を、吾嘖い早さで粗く継い付ける、ぶっつぶつと、皮を破る音がした。

さいはう

「お裁謎、お裁邦。好き、好き」

銀けた箇所を恋い付けるのが好きなズウズウは、クルスのまぶたまでぶつりぶつりと継い合わせてしまった。服球に作ひとつつせずに継い付けた、ズウズウの裁談テラタクニックは大したも

「僕って、テクニシャン、ん32stい1ぎっ府酢もなしに針で謎われ、クルスの靖みは絶頂に達していた。ぐったりと壁にはりついたさま

「億たちの王国……それは私たちが自分のためにつくり上げるものだ。それには、お前のような無上要リーダーはいらないって、みんなが言うんだよーテライーチャーはクルスに向かって、優しく語りかけた。集まって来た二十人近いブラックローセスのミュータントたちは、口々に叫んだ。

原本 198 ページ・文字起こし草稿

「たちは、あんたをリーダーとは認められない!」

体格のいいダダーンが、指をボキボキ鳴らしながらクルスの前の空気を下かりら区りあけた。

まるでかまいたちのように、クルスの胸の肉がそげた。

「あんたには、條たちみたいな擬敵な力が何もないじゃないか!1日が経つにつれ犬上が伸び続けているチャームは、口口が閉じられずによたれをたれ流している。ハアハアと准い息をクルスに吐きかけた。必が曲がるほどの悪身だ。

「あんたあ、ただの人間だあ。葛汚い無能な人間だあ!」

彼らの力は、ティーチャーのドラッグボイスで開花した。ミュータント能力を目覚めさせるように命令したのはクルスであり、彼は身をもってその力を味わうことになった。

すべてを仕組んだとののはクルス自身なのだ。クルスをいたぶるミュータントたちの有目か、夫々と苾びに交っていた。クルスは地鉄の業火に身を焼かれる思いだった。

[うきやきやっ、全たちは選んだ。俺たちのリーダーははティーチャーだ]

竹宮の災いの中で、パンキーと呼ばれる水使いが叫んだ。それが合図になったかのように、ミュータントたちから次々としざわめきが巻き起こった。

[そうだ、そうだ、テティーチャーこそ、リーダーによさんわんしい]

原本 199 ページ・文字起こし草稿

ユークントーたちの交語のり潜でて、クルスはういに流さ声あこのげた。体由衣や7避に、上がい(でくうだった。

「ティーチャーッ、なぜだっ!なぜお前が、俺を!俺たちは今まそずつと、うまくやってきたじゃないかつ。よたりの夢がかなう日も4、もうすぐじゃないかつ」

だが、ティーチャーは少し悲しげな冷ややかな表情で、クルスに耳打ちした。クルスの帝は至るとしころ、和で焼かれたり氷で焼かれたり、裂かれたり継われたり、上腫れ上がったりえぐられたりして、形相が変わっている。

「俺たちの夢...か。お前は、私を利用していただけたら。みんなのミュータント能力を自分のためだけに利用していただけた。ミュータントは、人間の上に立つ存在。無能なだけの人間こそ、無用の長物だ」

ティーチャーの優しい声は、しかしクルスの痛みを和らげはしなかった。むしろ、ミュータントたちの復約心をあおりたたてた。

[今度はあんたが、みんなのために役に立つ番だ]

-そをうた、俺たちはもう、あんたに利用されるのはゴメンだっ|ミュータントたちが口口々に叫んだ。今のクルスには、狂うことも気を失うことしも許されなかあした[明日は俺、あんたのためだけに歌うよ。これがクルスへの、最後のプレゼントだ。存分に媒

原本 200 ページ・文字起こし草稿

能してくれ」

じごくままだなかもどティーチャーは、地獄の真っ只中にクルスを置き去りにしたまま、上階の自分の部屋へと戻って行った。

第十一章 斜陽

原本 201 ページ・文字起こし草稿

第十「章斜陽あまざぬうつたいくつ天城ほのかは、憂垢で退屈な毎
日を送っていたと。

ほのかもまた、人の心の色を感じることが出来るミュータントである。
それが原因でせっかく入学した高校にも行かなくなってしまっ
たと。

いまは、天城研究所で手伝いをしながら、ただなんとなく退屈な毎
日を送っているだけであばのかの元気がないのには、もうひとつ理
由があった。

仲良しだった麻衣が、研究所に来なくなってしまったのだ。妹のよ
うに思っていた、ほのかにとっては唯一の大切な友達だった。

その関係を、自分から崩してしまったのはほのかだ。

原本 202 ページ・文字起こし草稿

無防備だった麻衣の心を、いたずらに傷つけてしまった。るの事が
気がかりで、何度か麻衣の家に電話をかけたのだが、麻衣は話が
できないままになっていた。

揚陸沿いに伸びたススキの穂が、秋の風に揺れる頃。

突然麻衣が研究所に訪ねてきてくれた。ほのかに会いに来たのだ
と言う。久しぶりの再会に、ほのかは心から喜んで麻衣を居間に招
き入れた。

麻衣は少しだけ、以前より大人になった風だった。いや、ひむしみ
ろ以前よりも明るくなったような気がした。

「わたし、もう一度明日から学校へ行ってみようと思って。それを
報告したくて」麻衣の意外な発言に、ほのかは驚いた。

[麻衣ちゃん?それ、どういう…・ |はおひざくちびるあわ麻衣は羽織っていたシヨールと帽子をたたもと、膝の上においた。小さな唇に淡いピンクのルージュが、薄く引いてあるのをほのかは見逃さなかった。以前の床衣なら、絶対に化粧なんてしなかったはずだ。

「あのあと…いろいろなことが、ほんとにいろいろあったんですけど」

シヨールの裾を指でもてあそんでいる。もじもじとはにかみながら、何かを言おうとしていん麻衣の目は、ほのかの目を見ていなかった。

原本 203 ページ・文字起こし草稿

あぶ店/い{711てに他XXXぷりなをしいた。

狗信和、礁つらちゃってたんです。ゆたし…2よ7田和よ7、)ししし"ルル/ンレレ2いえばは、いつもも味益かが手につけていたた手袋が見当たらない。

っだから、も2学校に行っても大丈夫かなあって思っでて。ばのかざさんは学校、行っ和そま2あの手袋は、放衣の登校否の理由だったはずだ。でしのんなたいいつ何があったのかはわからないが、麻衣が長年悩んでいた極度の帯電体質が、一麟にして消えたのだという。麻衣は普通の人間になったことを、羽から喜んでた。

のぞがくぜんほのかは、るその心を覗いて乾然とした。

たよばの麻衣の心には、以前のようにほのかを信じ頼る気持ちはなくなっていた。ただ、白い炎をままとった少年のイメージが、麻衣の心に強く焼きついてた。

[ほのかカかさきんも、学校に通ってみたらいいのにーSで玉3N3\\ミーうばでイメージだけで顔はわからないがこの少年が麻衣の能力を奪ったのだ。麻衣を普通の少女に戻しとのだ。いいいeVにつれいのカの北の中に嵐が巻き起こっていた。麻衣に対する憎しみと族刀の-ころが、ほのかを侵し始めていた。

|ええ、えええ、2るう…ね。そのうち…たぶん…」

カメうじでてるそう答えたものの、ほのかの目は虚ろだった。麻衣はほのかにおかまいなしに、

原本 204 ページ・文字起こし草稿

近況を話し続けていた。

びととしとあり話すだけ話して、満足したのだろう。麻衣は一時間もしないうちに、ほのかの衣を後にした。

「ごきげんよう、ほのかさん。よければまた、明日来ますね」麻衣が明るく笑って言った。それは、ほのかの知らない少女の顔だった。

[さよなたなら…また、明日ねいいつぱいほのかには、るそれだけ言うのが精一杯だった。

きようこなや、鏡子は、長い間悩んでいた。

実は今日の夜、また『へへブン』でライブが行われるという情報入手したのだが、行くべきえいいじしんけんか行かざるべきか。映二に知らせるべきか、知らせないべきかを、真剣に悩んでいた。

ぼうがい先日のライブでは、ブラックローゼスに対抗する勢力の妨害工作に巻き込まれ、結局また、ティーチャーの和歌を聞きさそをびれてしまった。ミュータントが現れると評判のライブを、二度もじゃま見にいったのに、二度とも邪上訟がはいってしまったのだ。

衆しみろみにしていただけに、鏡子には残念でてならなかった。あのティーチャーというボーカルの声が、人鏡子の耳から離れない。忘れられずにいる自分が、もどかしかった。もうこ」度、今用

原本 205 ページ・文字起こし草稿

的回のライブは、映一とトオルが一緒だった。気を失いながらもふたりに助け喘さ4たも0の、竹我をすところだった。生、ひとりだったなくら、さっと無事に帰ってはこれなかっただろう。るそれはそれで、北細い人かつ、だしたら、映二に今補ライブグがあるからと言って、りずにまた行きたいなんて言いたしええ4映--にもトトオオオルにも絶対愛覆をつかきれる。今度ばかりは、いくらミュータントに興味をもっている喘-も反対するだろう。本しかし、今日のライブはミュータントにとって重要な僕式。黒ふサと呼ばれるスペシャルイベントが、あのテラティーチャーによって行われるという。

鏡子は本当は何がなんでも、行ってみたかった。

しかし、びびびとりずで行ってまたこの間のようなことに巻き込まれてしまったら:.....でも、もしかしたら、何も起こらずに済むかもしれない。

iiブンーってボーカルの声。ステキだった一度目のライブで少しだけ聞くことが出来た、あのときの余鈴、Tかいそさき2スム児し日ココいい>>」Oo度同想して4身もだえる。心が駿ぐのだ。余韻鏡子は思い返していた何人の脱しした上、ことこ擬っ款いてい|の10つても:大丈夫よね」

長い葉藤の後、映二にもトオルにも言わないで、。

になっ鏡子は『へブン]へと出掛けていった。

原本 206 ページ・文字起こし草稿

すでに、太陽は傾き始めていた。

1人つつい>>Loにかでそのお陰で、日本中の農産物は大量作となった。量も多いが味がバツグンを果物たちは、海外からも求められ出荷されて行く。こんなことは、ここ数年見られなかったことだ。

今も成田空港では、大量のジャベニーズファーツが、出荷されようとコンテナに積み込まれていた。

税関では、アメリカから和到着した二人連れが順番を待って並んでいた。四十代の中年の男性と、またティーンの女の子の二人連れである。

妙を取り合わせのふたりだった。親子というには年が近く、兄妹としようには無理があり過ぎる。まさかカ恋人同士ではあるまい。

よたりは税関を過ぎると、ユエスカレーターに乗って一階口ピーへと上がって行く。

稀の方はかなりな力持ちらしく、二人分のトランタケースを軽々とかつぎ上げている。伸びた堅そうな男の髪が、肩のあたりで左右に挨ね上がっているのが特徴的だった。白いワシャツにチェックのカッターシャツ、ブルーのジーンズをはいていた。

男の前をさっそうと歩くショートカットの少女は、なんだか楽しそうだ。しきりに周りをき

原本 207 ページ・文字起こし草稿

レクはお見圧しながら歩いていところた見ん日本に来たのはこれが上まれ(相似だ2ーーツソとおそろいの色のゾジャケハイナツクのジャツジにショートパンツが由動名肝まのブージン半よく似合よふつ=私ーりこみこいNットは新調したばかりのようだ。不釣り合いなほど大きなサンダフスは、抜ー4っでていを且が韻れっぱを衝内の一略の口ビピーには、大画面のモニターが設置されていて、民放の番約が流さざれなしになっでていたと。

えらぼうじゃくボじんとつげき2どうやら、日本政府のお偉いさんに対して、傍若無人な突撃し・ポーターがコメントを求めているところらしい。

しんじゅゆゆくたかまつかいこい

「ては議員は新宿の高松会の関係について、肯定されるんですね

「知らん知らん、私は何も6知らないんだ!」

記念旋玉暴力団但織Ko(バン人1とぎかい時金上如て暴力還争鐘しの関係け到り沙汰されている、若手都議會議員びある。小さい顔をしsた議員は、レポーターのマイタに輝該どうに知らの存ぜのを繰り返している。

人[高松会といえば、先日少年グルハーブに事務所を襲こい1。1いえ2ソノに事務所を襲われましたよねあれも議員し何かかかわいばび女性の突撃レポーターは、意地でも議員の肉声を録ろうと、ている。T和とあの手この手で必死で食いつい

原本 208 ページ・文字起こし草稿

「最近、ミュータントと名乗る少年たちが、東京をカオス・トーキョーと呼んでいるそうですが::これについては::|ミュータント、カオス・トーキョーという言葉に、ショートカットの少女がびびたりとしと足を止めた。モニターをじっと見上げている。選受人すぐに、るその映像はスタジオに変わった。埋道番組てありなかよら.元芸能畑の突撃レポーターを起用した、新番組だった。スタジオには、某大学教授がコメンテーターとして据かれ意見を求められていた。

[たしかに、若者の間でミュータントと呼ばれる新人類が出現しているというウワサがありますけどねえ。日本にはミュータントなんて実際はいないんですからもうひびひとりのコメンテーターとして招かれていた、元警察方長宮という男は冷笑していた。

まったくウワサに過ぎませんよ。要するに、都市に刺激を求めた若者たちが、マスコミ戦略に乗って自分たちの行為を神聖化するという、まことに嘆かわしい現象なんですね」

少女が口をとがらせて、男に向かって声をかけた。サングラスの奥で、少女の目が笑ってい

「あんなこし言ってるよ、ウツヴァリン」

[ブン、みんなウソっぱちえさ」

ウァヴァリンは、きも役人は信じられなまいといった面持ちらだった。

原本 210 ページ・文字起こし草稿

「俺にはわかるぜ、ここにはミュータントの匂いがプンプンしやがる|じようじんするときゆうかくくんくんしとし鼻を利かせる姿は、常人に無い鋭い嗅覚を持った彼のよくやるポーズどだ。

[アジア各国はミュータント人後進国とかって、平和だなんて言って人やがるが、どうやもら日本だけは違うらしいな|

「ふうん。さっ、早いとこトーキョーに行こう、。ウルツルヴァリン。ドクターアマギが、待ってるアメリカからやって来たXIMENのよふたりは、そのまま成田空港を後にした。エグゼビアまぎ教授の友人、天城博士を訪ねるために。

第十二章 儀式

原本 211 ページ・文字起こし草稿

生5第十二章儀いようふんいき人0この日、[【へへへブン】で行われたライブは、今までにない異様な雰囲気包まれていえたべべ、\でこ\0舞台中央のステージの奥から左右までの壁には、一面に真っ赤なバラが襲き詰められているばぼうこうせま地下に降りると、このバラのむせ返るような芳香が狭い店内に満ちていた。

ステージ中央には黒い布かかけられたオブジェが、置かれている。かなり大きなものだが、今日の人徴式のために用意されたものだという。

すごーい、きれい]っーい[和ツ>OO)ミミ分子はため息をついた。こんなに大量のバラの花に囲まれたことは、生まれてから一度も過去二度【へシーに、だ

原本 212 ページ・文字起こし草稿

たのだ。ただしびれるような余韻だけが、鏡子の心の中に残っていた。

三度目の正直。ようやく今日こて5ティーチャーのライブを、心から楽しめるはずだった。

「『へブン]へとし入った鏡子は、とりあえずカウンターでドリンクをもらう3。

がおよむしようのどかわとなりYs\>バラの香りに酔ってしまったのか、無性に喉が梁いていた。隣の席に座っていた男が、バパーテンに何か話しかけているのが聞こえた。

「…テテンペストが…ひと>」こいいb…ムーだれみな許の話かわからなかったが、どだどうやら皆が探している人物がいるらしかった。

しばらくして、店内のライトが消えた。中央のステージにティーチャーが現れると、周囲がかんせいら徐声が上がった。

1。。われわれ、でちようせんざぎざしき[ようこそ諸君。今日のライブでは我々、新生ブラックローゼスの新たなる挑戦への儀式をと執り行おう]あの声だった。鏡子はティーチャーの声を耳にただけで、自分の中から何か大きな力がむくむもむくと湧き上がって来るのを感じていた。

、しんじゅめくすでに我々ブラックローゼスは、新宿を手中に収めた。それは、偉大なるミュータントの講かつやく君の活躍によるものだ」

ティーチャーのドラッグボイスは、何度聞いても心が才えとた。一賜にして若者たちはティーチャーの手中に落ちていく。鏡子もまた、表情が変わっている。

原本 213 ページ・文字起こし草稿

令子の身体の中で、血流が沸風する。|きようせいふれかえるえる観衆は、妖声をあげけずてステージに詰め寄っ・でてでい(く。講もガイーイヤヤーのがををの手に朋けようとし、ステージを目指す。その人波の中に、鏡子もvたと。

をこそ我々スは、莉君のミュータントとしての力をより強力なものにするとために、このトーシネヨーにいけにえを捧げることにした。見たまえ、これがいけにええだ!ステージ中央のディスプレイにかけられた黒い布を、ティーチャーは取り去った。布の下に力かく、。)じゅうじかst、でつ記さきれていたのは、巨大な十字架だった。十字架には、血にまみれたクルスが縛り付けられてそのまぶたは、ズウズウによって縫われたままである。

鏡子はその血とバラの混ぜかふえった匂い、だ;いしんそこ(ドブプツクボボイスこのっ人{隊いいい*う>」o』

チャーの声が、すぐ耳元で聞こえて(くるる。Tiん庭酬いしれてりりフノイノーま[この街には、いけにえが必要なのだ。今日この時より、

ここよは我ヲブ.するえる新世界、今よりここをカオス和そまだ人は
我ヲフブラックロー—セスの支肥

「カオス・ トーキョー!」 イトううカオストーキョ1!」

4部せられさようにフロアブの最前列に出た鋭子がティーチャくし鏡子は無意識に叫んだのだが、周りの和観秒はその声に感応す』1の言葉
を復咽して叫んだ。

[カオス・ トーキョー、カオス・ トーキョー!-人

原本 214 ページ

鏡子が右腕を振り上げて叫ぶ。

「カオス・ トーキョー、カオス・ トーキョー」

観衆もまた、同じアクションを繰り返す。

「ティーチャー、ティーチャー、ティーチャー!」

鏡子の叫びは、ティーチャーの心をも捕らえた。

「ティーチャー、ティーチャー、ティーチャー!」

観衆は口々に、カオス・ トーキョーとティーチャーの名をコールし始めた。

ティーチャーは最前列の鏡子に、興味を持った。鏡子の声は、フロアにいるすべての少年少女の心を捕らえていた。

「さあ、わたしと共に、この美しき罪人に愛のムチを……」

真っ赤なバラの中に、つき立てられた十字架。その十字架に張り付けられた、血まみれのクルス。その姿は、誰よりも何よりも美しかった。

ティーチャーは手にした太く長い革製のムチで、クルスを打った。皮膚が弾けるたび、クルスが声を漏らす。ムチはしなやかに弧を描き、クルスを打ち続けた。

痛みにクルスが吐息を漏らす。

【一部を要約：観衆の興奮が高まる。鏡子はティーチャーの影響下にあり、彼はその反応に気づく。】

原本 215 ページ

「さあお嬢さん、次は貴女がどうぞ……」

【一部を要約：ティーチャーに誘われた鏡子はステージに上がり、ムチを渡される。彼の接触と影響に圧倒されている。】

いまや鏡子は、聴衆をとりこにしているようだった。聴衆もまた、興奮していた。鏡子の一挙手一投足に、彼らの視線は釘付けになる。

ティーチャーの導きで、鏡子のムチは容赦なく、クルスを打った。

「かはあああっ」

クルスがあえいだ。気を失いかけながらも、ムチはクルスの意識を痛みで覚醒させる。

【一部を要約：ティーチャーの影響下で鏡子はクルスを繰り返し鞭打つ。彼に背後から抱きとめられ、自力では立てなくなっている。】

原本 216 ページ

「キミもミュータントなんだね。ご覧、誰もがキミから目を離せないでいるよ。しっかり、立って彼らを天国へ誘っておあげ」

「……ミュータント?!」

ティーチャーの言葉に、鏡子は我を忘れて狂喜した。憧れのミュータントは、自分自身だった！

「ど、どうすれば、いいの？」

「キミのその素敵な声で、命じればいい。この男に愛のムチを、と」

【一部を要約：ティーチャーは鏡子の耳元で、そつと指示を囁いた。】

「.....みんな.....いけにえに、愛のムチを！」

鏡子が叫ぶ。

「いけにえに、愛のムチを！」

観衆は鏡子の言葉に、柔順に従った。

「いけにえに、愛のムチを！」

鏡子もまた、自分の中に新しい力がみなぎるのを感じていた。

「いけにえに、愛のムチを！」

鏡子はムチ打つ手を止めると、そのムチを聴衆の中へ投じた。

観衆の最前列に競り出て来たミュータントたちは、我先にとムチを奪い取る。ムチを手にし

原本 217 ページ・文字起こし草稿

に都たちは、次々しクルスを打ち始めた。

――はそのままステージを降りてカウンター席からその和様子を衣かめかんあこしし-かたうで...った。舟子も卿かれるようにテラティチャーの有片腕に抱き寄せられでていv&ムチのない者たちは、それびぞれのミュータント能力を自慢するかのよう、抜を刻使してu7のおしょうげきはんのうジンからだい区ねた。どが、しだ秋、水、衝撃、風。攻撃を受けるたび反応していたクルスの身体が、擬ねれたたえといにるをの身体も動かなくなっていく。クルス自身の限界が、近づいていたその時だった。一陣の風が巻き起こり、ステージを渡った。

ライーチャーの祝界を風が婚った。

うこかべたつ無数に埋め込まれた壁のバラが、竜巻に飲み込まれたよう四方に飛び散っていく。花びらのまま舞う音港の中に、びひとりの男の交があった。

テンベストだった。

康に未で現れたテンペストはタルスを十字架からはずすと、かつぎ上げた。それを見ていたミュータントたちかんら、喝志と様々な物が和飛んだ。

[るよ中) \>操いレミ\のた俺たちと同じュータントだろういつはミュータントを食物4もの2しよけいー訓切り者、クルスは俺たちが処刑するんだ

原本 218 ページ・文字起こし草稿

|||ばせいとどクルスに対する軸声は、留まるところを知らなかった。

「わいは、この人に條れとるんや。こんなやり方好かんで|にくにらのブンペストは人憎しみをこめゆずライープヤーを和匠みつける。だがティトチテャ1は涯証に会の笑みでこう言った。右腕に鏡子を抱きながら。

\$きといで。。

[私だって貴様のことは最初から、ブラックローゼスの仲間だなどと思っただけのことではない。さっさと、るの役立たずをつれて、どこへでも消えるがいい]テンペストがこれだただけのミュータントを相手に戦うのは、あまりにも分が悪すぎた。

|<っ...Zミフツさせてもらう」

いつしゆめん風ととしもに、テンペストの姿が一上軸にして消えた。ミュータントたちは、簡単にテンペストを逃がしたティイーチャーに、ブーイングを送った。

おれ[負け犬に、用はない。<ろる<ミろ、俺のライブを始めさせてくれよ」]きき-しきけつべつ人後式は終わった。ティイーチャーとクッアスの、るそしてブラックローゼスとクルスの永遠の決別のための、人儀式であった。

「このカオス・トーキョーを支配するのは、我々ミュータントだけなのだから!人間はすべて、いけにえに過ぎない。ミュータントこそ正義。"ミュータントこる力」こテチティイーチャーは声たかだかに

観衆に向かって、隊んだ。そ<それは、ミュータントによる人間支配を許える内容だった。

原本 219 ページ

「ブラボー、ティーチャー！ ビューティフル、ミュータント！ カオス・トーキョー、万歳！ ブラックローゼスに栄光あれ！」

観衆は、様々な賛辞でティーチャーを称えていた。

熱狂のライブは終わることを知らない祭りのように、いつまでもいつまでも続いていた。

ようやくライブが終わったのは、深夜だった。

ライブが終わった後も、鏡子はティーチャーに抱きついたまま離れなかった。ティーチャーはそのまま、鏡子を連れて最上階へとあがっていった。

鏡子は天ノ川高校から姿を消した。

あとがき

原本 221 ページ・文字起こし草稿

あーがsc日本版オリジナルストーリー『X'MEN』第一は、いかがだったでしょう?電設文大の読者の皆様、はじめまして。和桑原忍です。

本国アメリカだけでなく、世界中で毎月二千万部も発売されているマーヴルコミックス。|九三〇年代カから発売されて以来、現在に至るまで多くのアメリカンヒーローを生み出し、親しまれ、日本でもスパイダーマンや超人ハルク、キャプテンアメリカやファファンタスティックフォーなど、一般的にもよく知られています。

なかなかでも特に人気の高い『XIMEN]が、一九九四年ついに日本に上陸しました。テレビアニメで、ゲグゲームで、翻訳コミックで。さらに、日本のコミック作家によるコミックスや、スペシャルムツツクやグッズが続々と発売され始めゆました。

この日本版オリジナルストーリーは、るの中でも異色の企画としてスタートしました。企画の始まりはすでに一年半も前のことしです。長い間力かって、ようやく今回このような有形で完成発売までてこぎつけたのですが、ここまで来るにはとてもたくさんの方がかわってくださった

原本 222 ページ・文字起こし草稿

さて、オリジナルストーリーということで初めに上んだことは、原作のどの部分を使うかということでした。[【XIMEN』の原作は、もう三十年以上も続いている長いお話です。『X'MEN]チームのメンバーも敵のキャラクターも、数え上げれば区異的な人数になってしまい

「XMEN』の登場キャラクターは、どれもがすべて大変魅力的でした。お話も同様で、アメリカ人だからとか日本人だからというのを

超越して、訟もが共感でさきワクワクし、楽しめる展開ばかりでした。原作を知れば知るほど、悩みは深まるばかりでした。

結局、まだ日本ではテレビ放映が始まっていなかったのですが、これから『X'MEN』]を知るみ人たちのために、るそして、黄金欺のチームメンバーを集めたと言われている、このアニメの設定を活かすべきであるとの見解から、私たちはベースにアニメの『XIMEN』チームを持ってくることにしたのです。

しかし、舞台を日本にすることでまだ誰も見たことのない『X'MEN』を作ってみようと考えました。この点については原作のスタン・リー氏をはじめマーヴル社の皆様のご了承を得られたことは、奇跡のようでした。

もうひびびとっ、問題があめありました。アメリカし日本の、ミュータントについての認識の違いです。原作ではミュータントしとし人間が区別されて描かれています。では、日本ではどうなのかう・

原本 223 ページ・文字起こし草稿

たというと、っと見て見ない振りをするのではないかしと思うのです。身近にミューダソトがuにしても、多分表面上は気にしていませんという顔で、ご本人のいないところで「{あそこんちの和子はばはミュータントだそうな}」なんてでて、ウワサするのです。アメリカ人のミュータントは能力を活かしたいと思うのですが、日本人のミュータントはどうにかして能力を捨ててようとするはずです。日本を舞台にしたのは、実はその違いを描きたかカかったからでもありましたと。

みんな日本人の少年トオルは、一般的な高校生です。たぶん、これを読んでくださっている皆と変わらない毎日を送っている少年。トオルから見た『【XIMEN】こる、日本人の視点でであり、ミュータントに対する一般的な認識なのでしょう。

こうして、ようやくこの日本人による日本版オリジナルツル『X'MEN』の小説が出来上がったのです。しかも、っの小説はリレー

形式なので私六い以外のいろよい、楽しめてしまうのですよよよ。
称以外のいいい作家の先生方の文章もでも、これはまた第一湊。
カオス・ トーキーヨーをおおあば舞台に、第二巻はウル、1が大暴れ
する予定です。描くは第一回は人た人ルウアリンしとジューツうご
期待の自信作です。。仙受賞作家の中里融司氏!最後になりましたが、
メディアワークスの角川歴すば彦社長。、らくゝ様。素晴らしいイ
ラストとバッチグーオリジナルキヤッ人pi人同演放石川裕人ターテザ
インを手掛けてくださっ

原本 224 ページ・文字起こし草稿

た西村博之様、平井久司様。ピンナップの思田尚之様。デビデザイ
ナーの朝倉様。まよんがの森の印口替ミア・アリス8&會川易様。途
中まででシリーズ構成を手伝ってくださった石田走様。担当の吉
了腺様、鳥居様。そして、最後まで読んでくださった皆様に、心よ
りお礼申し上げます。

一九九四年十月

奥付・ 巻末資料

巻末資料 / 著作リスト

桑原忍著作リスト

「まほろばの門」(富士見ファンタジア文庫)

「青空盗賊団」(同)

「墮天使白書」(ラポートコミックス)

「獣群～JUHGUN～」(同)

巻末資料 / ファンレター

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

ファンレターのあて先

〒101 東京都千代田区神田神保町2-22-11カンナビル

メディアワークス書籍編集部気付

「桑原 忍先生」係

「西村博之先生」係

「平井久司先生」係

「恩田尚之先生」係

【1994年の刊行当時の住所です。】

巻末資料 / 奥付

電撃文庫

X-MEN① ブラックローゼス

桑原 忍

発行 一九九四年十一月二十五日 初版発行

発行者 角川歴彦

発行所 株式会社メディアワークス

〒101 東京都千代田区神田神保町二-二二-一 カンナビル

電話〇三-五二一七-八一四三 (編集)

発売元 株式会社主婦の友社
〒101 東京都千代田区神田駿河台二-九
電話〇三-三二九四-一一三〇（営業）
装丁者 荻窪裕司（META + MANIERA）
印刷・製本 旭印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

本書の全部または一部を無断で複写（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。

本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（
☎03-3269-5784）にご連絡ください。

TM & © 1994 Marvel Entertainment Group, Inc. All rights reserved.

Printed in Japan

ISBN4-07-302095-1 C0193

巻末資料 / 電撃文庫創刊に際して

電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで“小さな巨人”としての地位を築いてきた。古今東西の名著を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また青春の思い出として、語りついできたのである。

その源を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐うる作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、〈Changing Time, Changing Publishing〉
時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日

角川歴彦